

學位請求論文

『癸心集』構成研究

仏教文化専攻

李曼寧

目次

序章	1
第一章 『発心集』巻構成法試論	8
第一節 巻構成法の抽出	8
一、慶安版巻一の説話配列	8
二、慶安版第12話の妥当性	21
第二節 巻構成法の検証	25
一、慶安版巻二・巻三の説話配列	25
二、慶安版巻二における疑問点	41
(一) 第(1)・(2)話の関連性について	41
(二) 第(12)・(13)話の増補疑問について	49
三、『発心集』の巻構成法	52

第二章 『発心集』 卷構成の検証	58
第一節 卷四の構成検証	59
一、慶安版卷四の所収説話	59
二、第(1)話から第(4)話―読誦仙人と天台法華の救い―	66
三、第(5)話から第(8)話―「魔」の妨げと「魔」の対治―	70
四、第(9)話と第(10)話をめぐって	74
(一) 第(9)話「武州入間河洪水事」をめぐって	74
(二) 第(10)話「詣日吉社僧取棄死人事」をめぐって	76
第二節 卷五の構成検証	80
一、慶安版卷五の所収説話	80
二、第(2)・(4)・(11)話―説話自体における諸問題―	87
(一) 第(2)話「伊家 ^并 妾」話の本文齟齬問題	87
(二) 第(4)話「亡妻現身」話の解釈問題―「愛執の恐ろしさ」か「誓願の不思議」か―	94

(三) 第(11)話「目上人」話の解釈問題―「賢」か「恥」か―	96
三、第(6)話から第(10)話―説話配列における諸問題―	98
(一) 第(6)・(7)話の関連性について	98
(二) 第(7)・(8)・(9)・(10)話の配列について	101
第三節 卷六の構成検証	107
一、慶安版卷六の所収説話	108
二、第(1)話から第(6)話―「恩」をめぐって―	113
(一) 第(1)話「証空替命」話の「恩」	113
(二) 第(2)話「后宮女房」話の「恩」	114
(三) 第(3)話「蔵人所衆」話の「恩」	115
(四) 第(4)話「母子三人」話と第(5)話「西行女子」話の「恩」をめぐって	117
(五) 卷六前半部分の説話配列について	120
三、第(7)話から第(13)話―「数寄」をめぐって―	121

(一) 第(7)話 「永秀法師」 話と第(8)話 「茂光時光」 話の「数寄」	121
(二) 第(9)話 「宝日上人」 話の「数寄」	122
(三) 第(10)話 「室泊遊女」 話の「数寄」	124
(四) 第(11)・(12)・(13)話と「数寄」	125
終章	133

序 章

鴨長明が編纂した仏教説話集『発心集』の現存諸伝本は、いずれも、長明の元来の編纂のままではなく、脱落や錯簡、ないし後人の増補などの痕跡が見出せる。長明の手によって編纂された『発心集』の本当の姿を明らかにし、長明の思想面を解明するには、構成研究は最も不可欠な手段の一つである。

説話集の構成については、内容からは、どのような種類の説話が収集され、各種類の説話が集においていかなる分量・位置を占めるかを研究する方法があるが、方法論の角度からであれば、説話配列、即ち説話の並び方が注目される。

説話配列の方法について、編者の意志によって、単なる類似説話を羅列するか、人物の時代順や身分により並べるか、先の説話のなかで次話へ導く伏線を張るなどの様々な配列方法がある。また、所収説話は、僧伝のように特定の人物に注目し、その経歴を網羅するものや、特に主人公の身分に拘らず、その主人公が持っている特質や話自体の性格を重視するものなどがある。特に説話主題の関連性を重視する説話集の場合、一つの説話は個性と全体性との両面性を有する。『発心集』は典型的な、主題を強調する説話集であるので、その構成を研究する時は、説話の内面と外部関連の様相とを両方併せて考えなければならない。

『発心集』の現存諸本は大きく分けて、八巻百二話の流布本系統と五巻六十二話の神宮本系統との二系統がある。この両系統の冒頭十一話の説話順は完全に同じであり、両系統は同じ母体から生まれたことが確認できる。

が、それ以降は、所収説話数でも、説話の配列でも、大きく異なっている。神宮本の紹介以降、流布本系統と神宮本系統のどちらがより長明の原編纂に近いのか、種々の研究が行われてきた。

両系統の共通説話は、流布本系統における巻一から巻六までに集中し、その八割を占め、巻七・八には一話もない。そして、神宮本においては、独自説話は四話しかなく、共通説話は全体の九割を超える。共通説話が各系統に占める割合から、後に発見された神宮本こそが古い形態を持ち、流布本系統は五巻本を六巻本に改めたものであると、永積安明氏が主張した¹⁴⁾。しかし、神宮本では、既出説話に既に登場しているはずの人物が、その説話の後の説話中に初めて紹介文を持つ場合がいくつかある。従って、神宮本の説話の先後順には食い違いがある。これに対し、流布本系統にはこのような矛盾が見えないので、流布本の説話順がより正しいと見られる。但し、流布本系統においても、脱落や後人増補の痕跡があるので、流布本そのものを長明の原編纂としてはいけない。そして、流布本系統の主要版本―慶安四年版本と寛文十年版本（以下「慶安版」と「寛文版」と略称）に対し、築瀬一雄氏は、この二版本の所収説話と全体的な説話順は完全に一致しているが、巻分けについては、慶安版の方がより古態に近いと指摘された。慶安版巻六の巻末には、跋文と見られる長い評文がある。しかし、寛文版においては、この跋文風文章が無視され、巻七の巻頭部に置かれている。この不審点と、寛文版の各巻の丁数が近似することとを合わせて考え、寛文版の巻分けは出版製本の便宜上、故意に均等に配分した傾向があると主張された¹⁵⁾。

築瀬氏はさらに『発心集』所収説話の同類話をめぐって考察を進めた。明らかに『発心集』の影響を受けた『十

訓抄』『私聚百因縁集』『沙石集』『三国伝記』のなかで、『十訓抄』同類話の様相から、慶安版の巻七・八は『沙石集』後、『三国伝記』が成立するまでに、誰かに補入されたと判断し、特に、『十訓抄』『私聚百因縁集』が成立する一二五〇年代、つまり長明没後約四十年の時に存在した『発心集』は、慶安版巻一から巻六に神宮本独自説話を加え、且つ説話順はおおまかに慶安版の説話順に従う形であると推測された。³⁾

一二五七年に成立した、住信著『私聚百因縁集』の和朝篇の巻八と巻九には、『発心集』の所収説話とほぼ同文あるいは部分的に同文引用した説話が多数見出せる。特に巻九の第15話より第22話までの八話は、『発心集』とほぼ同文で、慶安版の巻一第3話から巻四巻末話第10話にわたる部分から順番通りで取り入れられたと見られる。これはただの偶然とは考えにくく、住信は、彼が見た『発心集』の順番通りで写したと推定でき、慶安版の巻一から巻四までの説話順がかなり原態に近いと考えられる。⁴⁾

さらに、『私聚百因縁集』巻九の第23話「成通卿家山王咎忌事」と第24話「桓舜僧都依貧往生事」は、共に神宮本独自説話であり、住信たちの時代に存在した『発心集』には、この二話も含まれ、当時は「詣日吉社僧取奇死人事」(慶安版巻四第10話、巻末話でもある)の後にあつたことがわかる。また、同じく巻九の第7)〜9)話は慶安版巻六巻頭部にある慶安版独自説話を順番通り取り入れられたものと考えられる。他に、『私聚百因縁集』と同時代の『十訓抄』は、特に説話順に拘らないが、同様に『発心集』の共通説話と各系統の独自説話を同文引用している。

これらの事情から、一二五〇年代に存在し、最も長明の原編纂に近い『発心集』は、慶安版の巻一から巻六に神宮本独自説話四話をも加え、さらに、説話順はおおまかに慶安版―せめて巻一から巻四まで―に沿う形である

可能性が極めて高い。⁵⁾

そして、通し番号第12話以降の部分について、廣田哲通氏は、両系統共通の冒頭十一話より巻構成原理を抽出し、他の部分を検証することができると指摘し、巻一の構成原理として、

第一項 同一主題の説話を連続させ、なおかつその内にもバリエーションや主題の深化をみせることがある。

(一〜六話、七〜九話)

第二項 二話一对の配列様式がみられ、それらには同主旨の並列的關係にあるものと対照的対応關係にある

ものがある。中でも正負の对象的対応(成功譚と失敗譚)には殊に顕著な構成上の配慮を見うる。

(七―八話、一一―一二話)

第三項 一説話が複数の主題を有し、後の展開の萌芽になったり(五話)、一説話の評や部分的な小話柄が次

話への導入部分となる(六話)など、主題の転回点となる説話が存在し、主題が付け合い的に推移する。

第四項 同一主題のいくつかの説話を統一して評をつけたとみられる事例がある。(三話、一〇話、一二話)

第五項 同一主題に関して「昔」と「中比」「近比」を対応させた配列がみえる。(七・八話に対する九話)

との五項目をまとめられた上、全体像から、「二話一对」配列様式は『発心集』の説話配列の「根幹をなす」と指摘された。⁶⁾

右の先行研究を踏まえ、本論文では、慶安版『発心集』の巻一から巻六を研究対象として、神宮本本文をも念

頭に入れ、『癡心集』の巻構成原理を考察・検証し、慶安版『癡心集』は、それほど長明の元来の編纂形態を維持しているかを見極める試みをしたい。

考察する手順として、まずは、慶安版巻一から巻三を考察し、巻構成法の抽出と検証を試みる。次には、巻四・五・六の構成を検証する。

何故なら、巻一から巻三の三巻はともに共通説話のみで構成され、所収説話数も均等である。この三巻から同じ様相が指摘できる可能性がかなり高い。肯定の結果が出れば、この共通冒頭十一話から抽出した巻構成法は長明の考案であると認識してよいに違いない。

次に、慶安版独自説話を有し、所収説話数も均等でない巻四・五・六の説話配列を考察し、説話自体および説話配列における不審点をめぐって、所収説話、特に独自説話は元来の編纂であるかどうかについて考察する。慶安版の巻四は僅か十話しかなく、巻頭部三話は慶安版独自説話であるが、共通説話七話のうち、第四話から第九話までの六話は、神宮本においても同じ配列で並んでいて、冒頭十一話に次ぐ二番目に大きな安定な部分である。

また、前述した『私聚百因縁集』の引用様相も巻四の説話配列の安定性を示していると考えられる。そして、巻五・六は十五・十三話を収め、それぞれ五話・七話の独自説話数を有するが、共通説話は神宮本において同じあるいは近い配列で並んでいるのも数例があるので、巻五・六もある程度の安定性を示していると考えられる。この三巻の説話配列を考察し、巻一から巻三から考察できた巻構成法に相似・近似する部分が見出せれば、その部分は長明の原編纂である可能性が高いと考えられる。

最後に、巻一から巻六に対する考察結果をまとめて、『発心集』の全体像をも明らかにしたい。

『発心集』の説話題名と本文の引用については、基本的に慶安版（大谷大学図書館蔵）による。付題については、長明自身が付けたと確定できないため省略する。明らかな誤字や脱落などは、寛文版（同館蔵）および神宮本（神宮古典籍叢刊『西公談抄・発心集・和歌色葉抄書』所収影印版）により訂正し、人名等は正しい形で記し、註で示す。他の誤字等は（ ） 付の傍注を加え、適宜傍線・傍点を施した。他の引用文も同様である。

本論文中で説話を指示する際、通し番号は「第1話」「第2話」の形にし、巻内での説話順序に注目したい場合は、説話番号を「第(1)話」、「第(2)話」の形にする。必要がある場合、巻数も提示する。また、図表あるいは説話概要を挙げる時、「慶一(1)」「神一(1)」等の形で伝本・所在巻数・巻内説話順番を提示することとする。一話に複数の小話柄を持つ場合、所収話柄を①②…のように示し、慶安版また神宮本独自話柄は傍注で示す。また、必要に応じ、評を単独事項として挙げる場合、神宮本本文を掲示する場合などがある。

註

- (1) 永積安明「長明発心集考（上）」（『国語と国文学』10 | 6、一九三三年六月）、同人「長明発心集考（下）」（『国語と国文学』10 | 8、一九三三年八月）
- (2) 築瀬一雄『発心集研究』（築瀬一雄著作集三）（加藤中道館、一九七五年五月）
- (3) 同註(2)。
- (4) 同註(2)。

(5) 同註(2)。

(6) 廣田哲通 「発心集の説話配列」 『女子大文学』 第二十七号、一九七六年三月)

第一章 『発心集』 卷構成法試論

第一節 卷構成法の抽出

一、慶安版卷一の説話配列

序章に紹介したように、先行研究によれば、「二話一対」配列様式は『発心集』の編纂基準の一つである可能性が極めて高い。なので、偶数話を含む慶安版卷一の説話配列は、冒頭十一話のみで構成される神宮本卷一より妥当である可能性は否定できない。では、まず、各説話のあらすじを挙げて、各話に含まれている説話要素を探し出す。

慶一(1) 「玄賓僧都遁世逐電事」

① 山階寺（現在の興福寺）の玄賓僧都が、三輪河の辺で籠居していた時、桓武天皇に召されやむなく応じたが、平城天皇から大僧都の位が下された時、「三輪川ノキヨキ流レニス、ギテシ衣ノ袖ヲ又ハケガサジ」という歌で、志を表し、大僧都を辞した。その後、誰にも知られず、姿を消した。

② 玄賓は、身分を隠して越の国で渡し守をしていたが、以前の弟子に見破られたので再び姿を隠した。

③ 「山田モル僧都ノ身コソ哀レナレ秋ハテヌレバ問人モナシ」という玄賓の作があり、玄賓は田守などもしたであろう。

④ 近い時代で、三井寺ノ道頭僧都が玄賓の話を読んで、彼を真似て渡し守をしようとしたことがあった。実現

しなかったが、志は尊いと言える。

この一話のなかに、話柄①は、玄賓僧都が再遁世を選んだ経緯であり、②は彼の再遁世した後の出来事である。そして、③は①・②の補説と見られ、④は後の時代の人が玄賓を真似ようとする後日譚である。補説と他人後日譚である③・④を除いて、最も注目されるべきなのは、①の、二度と世俗の塵に染ままいとの志と、②の、露見すると再び姿を消す点である。

慶一(2)「同人伊賀国郡司被仕給事」

玄賓は身分を隠して、伊賀の国のある郡司の家に仕えていた。郡司が国の守に咎められ、領地から追放されることになった時、玄賓は、郡司を大納言の家に連れて行き、正式の僧の姿に戻って身分を明かし、大納言と面会し郡司を救った。その後、玄賓はまた姿を消した。

この一話も玄賓の話である。第(1)話の話柄②と同じく、身分を隠して生活する高僧が身分を人に知られた後、再び姿を隠した話である。ただ、第(1)話での玄賓の再隠遁は、思いかげず弟子に見破られたのに対し、第(2)話では、玄賓は人を助けるため、自ら身分を明かしたのである。玄賓は、人を救った後に再び姿を消したので、その隠遁への志向はあくまでも変わっていないとわかる。また、玄賓が、人を救うために自分で身分をあらわした行為に対し、長明は「アリガタカリケル心ナルベシ」と評した。

慶一(3)「平等供奉離山趣異州事」

①比叡山延暦寺の平等は「カクハカナキ世ニ、名利ニノミホダサレテ、厭ベキ身ヲ惜ツ、空ク明クラス処

ゾ」と考え、寺院から離れた。目標もなく歩いてきた彼は船に乗せてもらって、伊予の国に至り、乞食していた。

② 平等が門乞食をしているうちに、弟子の浄真阿闍梨と出遭い、見破られた。平等は「人モカヨハヌ深山ノ奥ノ清水ノアル所」に隠れ、往生した。

③ 「評①」「今モ昔モ、実ニ心ヲ発セル人ハ、カヤウニ古郷ヲハナレ、ミズシラヌ処ニテ、イサギヨク名利ヲバ捨テウスル也」。

④ 「評②」「菩薩ノ無生忍を得スラ、モト見タル人ノ前ニテハ、神通ヲアラハス事難シ」ト云ヘリ。況ヤ、今発セル心ハ止事ナケレド、未不退ノ位ニ至ラネバ、事ニフレテ乱ヤスシ古郷ニスミ、シレル人ニマジリテハ、争カ、一念ノ妄念ヲコサバラム」。

この一話の話部分の構造は、明らかに第(1)・(2)話の玄賓の話に近似している。ただ、日本各地で転々する玄賓と異なり、平等は見破られた後、山林の奥に隠れたのである。評の①の部分は、ここまで語った高僧たち―玄賓と平等―の再遁世行為に対する解釈であり、②の部分は、その道理を極めたうえでの著者自身の自省であると考えられる。

慶一(4)「千観内供遁世籠居事」

① 三井寺の高僧千観が法要などを勤めて坊へ帰る途中で、空也上人と出会い、「何ニモ身ヲ捨テコソ」という話に啓発され、一人で簑尾に籠った。

② 千観は、東の方に金色の雲が立つのを見たので、その地を尋ね、隠れて往生した。

③ 千観という名は、彼が千手観音の化身である夢告があったからである。

この一話にある三つの話柄のうち、②は後日譚と見られ、③は主人公の名前の由来の紹介である。主眼は明らかに、先の三話と同じく、大寺院の高僧が地位を捨てて再遁世した話である。特に、山林へ隠遁する点では、第(3)話の平等の最後と同じである。ただ、やむを得ず山林の奥へ隠れた平等とは異なり、千観は自発的にそうしたのである。また、千観が再遁世した経緯も先の三話とは少し異なり、自ずから再遁世の行為を採取したのではなく、空也上人に啓発された決断である。

慶一(5)「多武峯僧賀上人遁世往生事」

① 僧賀上人は、若い時から才徳が人に優れ、必ず貴い人になると褒められたが、「名利ニホダサレズ」、密かに浄土に生れることを願った。僧賀が根本中堂に千夜参りに行っていた時、六七百夜から「付給へ」とつぶやいた時、その心を知らない人が怪しんで「天狗付給へト云カ」と皮肉したが、後に、「道心付給へ」と言ったことがわかった。

② 内論議に参加する貴人が食べ残したものを、乞食を集めて食わせる習いがあるが、その際、僧賀が内から出てそれを取って食べた。「此禪師ハ物ニクルフカ」と言われた事件を契機として僧賀は籠居し、後に大和国の多武峯で修行していた。

③ 後の宮が僧賀の貴いことを知り、彼を戒師に召した。僧賀はその命を拒めず参ったが、何もせず退出した。

④ 僧賀が仏供養に行く途中で「名利ヲ思ニコソ、魔縁便ヲ得テゲリ」と考えて、わざと施主と口論して供養しないままで帰った。この事により供養の依頼がなくなつた。

⑤ 師の良源が大僧正に勅封され、お礼を言上に行く時、僧賀が怪しい姿で先駆の列に入つて「我コソヤカタグチウタメ」と叫んだが、師の良源には、それは「我師、悪道ニ入ナムトス」という悲嘆であることがわかり、「此モ利生ノ為ナリ」と答えた。

⑥ 僧賀臨終の時、「心ニカ、リタレバ、若生死ノ執トナル事モゾ有」と考えて、小さい時いさめられた、独り碁と小蝶舞をして執着を断ち、「聖衆ノ迎ヲ見」て、「ミヅハサス八十アマリノ老ノ浪クラゲノ骨ニアヒニケル哉」という悦びの歌を詠んで往生した。

⑦ 「評①」「此人ノフルマイ、世ノ末ニハ物グルヒトモ云ツベケレドモ、境界離レンタメノ思バカリナレバ、其二付テモ、有ガタキタメシニ云置ケリ」。

⑧ 「評②」「人ニマジハル習ヒ、高二随ヒ、下レルヲ哀ムニ付テモ、身ハ他人ノ物トナリ、心ハ恩愛ノ為ニツカハル。是、此世ノ苦ノミニ非ズ、出離ノ大ナルサワリナリ。境界ヲ離レンヨリ外ニハ、イカニシテカ乱ヤスキ心ヲシズメム」。

この一話には、六つの話柄が含まれている。そのうち、①は僧賀の仏道への志を表す逸話で、②は、前四話の「再遁世」要素を継承したと見られる一方、次の③・④・⑤とともに、「名利無視」あるいは「名利蔑視」と解釈できる。②での内論議からの出奔は「身ヲイタヅラニナサン」ためであり、③での後に授戒せず、「見苦キ事」の

みを口にしたことから「名利無視」の姿勢が見える。④では、僧賀が仏供養に行く途中で「名利ヲ思ニコソ、魔縁便ヲ得テゲリ」と思い、わざと施主と喧嘩し、貴まれることを防いだ。さらに、⑤において、師の良源が大僧正の職を受けることに対する僧賀の想いは、師の僧正もわかり、「悲キ哉。我師、悪道ニ入ナムトス」と聞こえたのである。そして、最後の⑥は彼の臨終の話で、後日譚とも見られる。従って、この一話は、冒頭四話の「再遁世」要素を継承しながら、主題は「名利を捨てる」点にあり、話題移転の接点と分かれ目である。また、評の①は特に僧賀の奇行に対する解釈であり、評②は著者の自省である。

慶一(6)「高野南筑紫上人出家登山事」

① 筑紫にある大量の田を持っている男は外出した時、突然発心して家財を捨て、娘の制止を拒んで、高野山に登り出家した。

② 後に南筑紫と呼ばれたこの聖人は堂を造り、夢告を得て浄名居士の化身の明賢阿闍梨を導師とした。

③ 南筑紫聖人は殊に貴いと知られ、白河院までも帰依し、「高野ハ此聖人ノ時ヨリ殊ニ繁昌」した。この聖人が臨終正念で往生を遂げたことは、「委ク伝ニ」書かれている。

④ 「評①」「惜ムベキ資財ニ付テ厭心ヲ発ケム、イトアリガタキ心ナリ」。

⑤ 「評②」「賢キ人ト云、二世ノ苦ヲ受ル事ハ、財ヲ貪心ヲ源トス。人モコレニフケリ、我モ深着スル故ニ、諍ネタミテ、貪欲モ弥マサリ、瞋恚モ殊榮ケリ。人ノ命ヲモ絶チ、他ノ財ヲモカスム。家ノホロヒ、国ノカタフクマテモ、皆此ヨリ発ル。此故ニ、欲深ケレハ、ワサハヒ重トモ説、又、欲ノ因縁ヲ以テ三悪道ニ墮ス

トモ説ケリ。カ、レバ、弥勒ノ世ニハ、財ヲ見テハ深ク恐厭⁽³⁾ヘシ。此釈迦ノ遺法ノ第子⁽⁴⁾、此カ為ニ戒ヲ破リ、罪ヲ作テ、地獄ニ墮ケル者ナリトテ、毒蛇ヲ捨ルカ如ク、道ノホトリニ捨ベシト云ヘリ。

この一話は、評①の「惜ムベキ資財ニ付テ厭心ヲ発ケム、イトアリガタキ心ナリ」に示す通り、主眼は、財産、いわゆる「利」を捨てる点にある。②の夢告の話や③の白河院の帰依の話などが選択されたのは、高野山を繁栄させたこの聖人の貴さを表す裏付けであると考えられる。

そして、この一話と前話「僧賀上人」話を対照させてみれば、「僧賀上人」話の本文では、「名利」という言葉のポイントとして出しているが、話には、特に「利」に関する叙述がないようで、むしろ「名を捨てる」を強調する一話と取った方がよい。この二話は、それぞれ、「名」「利」を捨てるべきと説く一対であると考えられる。また、南筑紫上人が娘の制止を拒むこと、即ち恩愛を切り捨てる点は、前話の評②の「身ハ他人ノ物トナリ、心ハ恩愛ノ為ニツカハル。是、此世ノ苦ノミニ非ズ、出離ノ大ナルサワリナリ」の部分をも踏まえていると考えられる。

慶一(7)「小田原教懐上人打破水瓶事」

①興福寺の別所である小田原の教懐聖人は一つの水瓶を「殊ニ執シ思」ったが、よくないと覚醒して、砕いて捨てた。

②横川の尊勝阿闍梨は、紅梅を植え興じていたが、やはりそれを切った。

③「評①」「此等ハ皆、執フトゞメル事ヲ恐ケル也。教懐モ陽範モ、俱ニ往生ヲ遂タル人ナルベシ」。

④〔評②〕「実ニ、仮ノ家ニフケリテ長キ闇ニ迷事、誰カハ愚ナリト思ハザルベキ。然レドモ、世々生々ニ、煩惱ノツブネ、ヤツコトナリケル習ノ悲シサハ知ナガラ、我モ人モ、エ思ヒ捨テヌナルベシ」。

この一話では、教懐と陽範との二人の主人公は、名利に対して執しないが、物に対する愛着が深かった。この二人は、執の恐ろしさに気付き、その執着の対象を消滅して執を断ち、往生を遂げたのであった。物に対する愛着を捨てる点では、第(5)・(6)話との繋がりが見える。

慶一(8)「佐国愛華成蝶事」

①ある僧が、花をできる限り植えて蝶に蜜を提供する人と出会った。その人は漢詩の名手佐国の子であり、父が花に愛着する故に、蝶と生まれ変わったと人の夢に見えたので、佐国の息子は蝶となった父親を心配してそうしたのである。

②六波羅密寺の僧幸仙は、道心深かったが、橘を愛しすぎたため、蛇となった。

③〔評〕「加様二人ニ知ル、ハマレナリ。スベテ、念々ノ妄執、一々ニ悪身ヲ受ル事ハハタシテ疑ナシ。実ニ恐テモヲソルベキ事ナリ」。

この一話にも、物に対して愛着を持っている人々が登場する。但し、第(7)話の教懐・尊勝が執を断ち往生を遂げたことに対し、第(8)話の佐国と幸仙は愛着を捨てられなず、そのまま畜生道に堕ちてしまった。この一話は、前話の第(7)話と正反対の例となっている。さらに第(5)・(6)話を振り返ると、僧賀と南筑紫の「名利」を捨てる行為も、俗世に対する執着を捨てると考えられ、僧賀が臨終の独り碁と小蝶舞をするのもそのためである。つまり、

第(5)話から第(8)話までは、「断執」というテーマが大きく浮びあがる。加えて、この「佐国成蝶」話は、『発心集』のなかの初めての往生失敗譚であり、長明が序に述べているように、「愚ナルヲ見テハ、自ラ改ムル媒ト」する話である。

慶一(9)「神楽岡清水谷仏種房事」

① 仏種房が比叡山の水飲みに住んでいた時、外出しているうちに、盗人が侵入し物を取って逃げようと思つたが、何かの力によりその場から離れられなかった。仏種房が帰ってきて、その経緯を聞き、盗人を咎めず、物を彼に与えた。

② 清水谷に移住した仏種房が檀那に魚を求めて食べたが、檀那が再び魚食を提供してくれた時、「今ハホシクモ侍ラネバ、是返シ奉ル」と断つた。「評」「是モ、此世ニ執ヲトゞメジト思ケルニヤ」。

③ 病氣した仏種房は終夜念仏して、往生を遂げた。

この一話では、①の仏種房が盗人を咎めず、さらに物を与えることから、彼の寛容な心と資財に拘らないことがわかる。②は、評の「是モ、此世ニ執ヲトゞメジト思ケルニヤ」に示すように、欲を満たして執を消滅すると考えられ、「断執」の側面をも持っている。これらに対して、臨終話の③のイメージが薄いようである。とはいえ、③には目立つ一句がある。話の最後に、

此家ハスコシモ離レズ、アヤシノ下藤ノ家ドモノ軒ツゞキナム在ケル。

と記された。かなり唐突感のある一句である。この一句は、次の説話との関連性を暗示するのかもしれない。

慶一(10)「天王寺聖隱徳事」

①天王寺の瑠璃聖と呼ばれる僧は乞うたものを汚い袋に入れて、歩きながら食べる。物狂いであると思われていたが、大塚の智者の処で雨を避けた時、智者と天台宗の論理について討論したため、徳の高いことが世間に知られて騒がれたので、この聖は和泉の国に隠れて「人モ来ヨラヌ所」で往生した。

②「仏ミヤウ」という乞食は、瑠璃聖と同じように、物狂いの様子で、魚鳥をも食べ、尋常ではない行為をするばかりであるが、実際は徳の高い、立派な僧侶である。この僧も、往生を遂げたようである。

この一話には、二人の主人公がいる。評の

此等ハ勝タル後世者ノ一ノ有様也。「大隠、朝市ニアリ」ト云ヘル、即是也。カク云心ハ、賢キ人ノ世ヲ背ク習、我身ハ市ノ中ニアレドモ、其徳ヲ能カクシテ、人ニモラセヌ也。山林ニ交リ、跡ヲクラフスルハ、人ノ中ニ有テ、徳ヲエカクサヌ人ノフルマヒ成ベシ

に示すように、①の瑠璃聖も②の仏ミヤウも、表面から見れば、ただの怪しい乞食であるが、実は高德のある僧であった。自分の徳を隠すため、わざと悪い行為を見せるのである。卑しい人の間に暮らしている点では、第(9)話の仏種房の最後に相似している。仏種房も最終的に同じ隠居する地を選んだのであろう。また、瑠璃聖が「徳」の露見の後、冒頭三話の玄賓と平等と同じように姿を消した。

慶一(11)「高野辺上人偽儲妻女事」(*神宮本題「高野ノ麓ニ上人偽ニ妻ヲ娶タル事」)

高野山の辺りに、或る行徳のある僧が年を取ってから、妻を儲けて寺の奥で住んでいた。僧の死後、妻の話

により、二人の間には実質的な夫婦行為は一切なしで、本当は仏法のことしか語らないのであった。また、この僧は臨終の儀式をきちんと行って、往生を遂げたと思われる。

この一話は、形式上の妻を儲けた僧の話である。弟子に、妻を探してくれと願った僧は、実際は尊い往生人であった。

慶一(12) 「美作守頭能家入来僧事」 (*神宮本題「乞食僧隠徳事」)

① 美作守頭能の家に若い僧が来て、臨月の妻がいるため食料を乞うと言ったが、物を送ってもらうことを拒んだ。不審に思い、頭能が使い人を遣わし尾行させた。僧のつぶやきから、妻のことは安居の料を儲けるための偽りの理由と知った。頭能は再び食料などを送ったが、露見したことがわかった僧は、後に送ってきたものに触れず、姿を消した。

② 「評①」「実ニ道心アル人ハ、カク、我身ノ徳ヲカクサムト、過ヲアラハシテ、貴マレン事ヲ恐ル、ナリ」。

③ 「評②」「若、人、世ヲ遁タレドモ、イミジクソムケリト云ハレン、貴ク行由ヲ聞ント思ヘバ、世俗ノ名聞ヨリモ甚シ。此故ニ、有経ニ、『出世ノ名聞ハ、譬ヘバ、血ヲ以テ血ヲ洗ガ如シ』ト説ケリ。本ノ血ハアラハレテ、落モヤスラン、知ラズ。今ノ血ハ、大ニケガス。愚ナルニ非ズヤ」。

この話は、第(11)話と同じく「実質でない夫婦関係」を持っている僧の話である。ただ、第(11)話の形式的な結婚に対して、第(12)話の「妻帯」は全くの嘘である。そして、第(12)話の評①に示すように、この二人の有徳の僧は「妻帯」という行為で偽って徳を隠したのである。そして、「妻帯」という点で、第(9)・(10)話間のもう一つの共通点に

気づく。それはもう一つの破戒行為——「肉食」である。第(9)話では、仏種房が魚を食べた、第(10)話の仏ミヤウも同じく「肉食」をした。そして、瑠璃聖と仏ミヤウとの、わざと物狂いの様子を見せるという偽悪行為と関連して考えれば、第(9)話仏種房が檀那に魚を求めることも結果的に同じような行為であると読める。

ここまでの分析結果をまとめると、慶安版巻一の所収十二話は、互いに関連性を持ち、全体的に一本の糸に繋がれているように並んでいる一方、隣接説話間の関連性の緊密度により、二話ずつ一對となるうえに、二対ずつ対応関係を持ち、二対四話ごとに一つの共通主題が指摘できる。さらに、この三つの主題の間にも関連性が見出せられ、巻全体が緩やかな繋がりで一つのテーマをめぐって展開している。

第(1)話から第(4)話はともに、身分の高い僧、いわゆる貴僧が寺院から離れて、再びの遁世を凶った話である。第(5)・(6)話は複数の説話要素を有するが、第(5)話の名利を捨てる点と、第(6)話の財産・恩愛を捨てる点を通じて、第(7)・(8)話の「断執」要素とも繋がっているようである。また、第(9)・(10)話の主人公たちはともに肉食をし、第(11)話と第(12)話には、共に「偽りの妻帯」の要素があり、「肉食」と「妻帯」との二種の破戒行為が対照になり、偽悪隠徳の二つの極端な道を示している。

この十二話は、それぞれ二話ずつ緊密な関係を持っていて、一對と見られるうえに、第一対と第二対はともに「貴僧の再遁世」の話であり、第三対と第四対は「断執散執」を中心とする話である。さらに、第五対と第六対の主人公の破戒行為は徳を隠す手段であり、「偽悪隠徳」というテーマが読み取れる。つまり、二対ずつまた共通主題が見出せ、四話ごとに一つの塊りと見られる。この構成様式を名づけて「二対四話一セット」構成様式とす

る。

また、巻一は三主題に分けられる一方、複数の要素を持つ説話や評などを通して、隣接説話間の関連性を保つ。例えば、第(5)話「僧賀上人」話のなかで、僧賀は、第(1)話と第(4)話の主人公たちと同じく「再遁世」の道を選んだが、この一話の中心となるのは、名利・名聞を魔縁や苦と見る点と、臨終の散執行為である。さらに、長明が記した僧賀の行為に対する解釈は、巻一全十二話の中核となっていると考えられる。

此人ノフルマイ、世ノ末ニハ物クルヒトモ云ツベレドモ、境界離レンタメノ思ハカリナレバ、其二付テモ、有ガタキタメシニ云置ケリ。人ニマジハル習ヒ、高二随ヒテ、下レルヲ哀ムニ付テモ、身ハ他人ノ物トナリ、心ハ恩愛ノ為ニツカハル。是、此世ノ苦ノミニ非ス。出離ノ大ナルサワリナリ。境界ヲ離レンヨリ外ニハ、イカニシテカ、乱ヤスキ心ヲシツテム。

「断執散執」グループに属する第(5)話は執着心を批判する一方、「境界ヲ離レンヨリ外ニハ、イカニシテカ、乱ヤスキ心ヲシツテム」という文が、第(1)話と第(4)話の、仏道に一心不乱を保つため、見ず知らぬ処へ「再遁世」する主題と通じていて、「物クルヒトモ云ツベレドモ、境界離レンタメノ思ハカリ」という文は、次のセットの第(9)話と第(12)話の主題の「偽悪隠徳」をも提示しているのである。

さらに、第(1)話と第(4)話と第(9)話と第(12)話、同じ巻一に属するがやや離れているこの二セットの間にもある程度の関連性が見られる。第(10)話「天王寺聖」話に、

此等ハ、勝タル後世者ノ一ノ有様也。「大隠、朝市ニアリ」ト云ヘル、則是也。カク云心ハ、賢キ人ノ世ヲ背

ク習、我身ハ市ノ中ニアレドモ、其徳ヲ能カクシテ、人ニモラセヌ也。山林ニ交リ跡ヲクラフスルハ、人ノ中ニ有テ徳ヲエカクサヌ人ノフルマヒ成ヘシ

という評がある。「偽悪」行為が「隠徳」のためであると解釈すると同時に、この市中隠遁行為と、第一セットに現れた山林へ隠遁する行為を対照的に説明している。

通して見ると、巻一の第(1)話と第(4)話の貴僧たちの「再遁世」と第(9)話と第(12)話の「偽悪隠徳」は、共に「俗世」との交わりから遁れるための行為であり、俗世からの出離であると言える。また、第(5)話と第(8)話の「断執」の対象は、財物であれ、名聞恩愛であれ、「俗世のもの」であるので、「断執」は「俗世のもの」ないし「俗世」に対する執着を断つ行為であり、俗世から離れることを表明しているのである。つまり、「俗世からの出離」という意識が巻一全体の十二話三セットを覆うと読める。

二、慶安版第12話の妥当性

慶安版巻一の説話配列を考察した結果によれば、巻一第(12)話、通し番号第12話の「顕能家入来僧」話は、冒頭十一話に続き、きちんと配列されていることがわかった。さらに、この一話には、巻一を総括する評もある。この二つの点により、慶安版巻一最終話の妥当性を十分に証明できると考えてよいであろう。

神宮本では、この一話は巻五の第(10)話にあたり、慶安版と異なる題の「乞食僧隠徳事」と名づけられ、「隠徳」という主題が明示されている。また、この一話の次にある、同巻第(11)話「或上人隠居京中独行事」と第(12)話「永

観律師事」が、慶安版卷二の第(1)話「安居院聖行京中時隠居僧値事」・第(2)話「禅林寺永観律師事」と同話である。つまり、通し番号から考えれば、慶安版でも神宮本でも、この一話と次の二話との配列は完全に同じである。このことから、この三話はもとより連続していたことが推測できる。では、この連続三話を含め、神宮本卷五の説話配列を見よう。

神宮本の卷五では、十一の説話が含まれている。先行研究によれば、その第一話を別にし、第二話以降の十話を臨終説話群として考えられている。⁸⁾

神五(1) 叡実憐路頭病者事

神五(2) 「肥州ニ有僧妻ニ為魔事」

神五(3) 「玄賓係念亜相室家不浄観事」

神五(4) 「或女房臨終ニ見魔変事」

神五(5) 「或人臨終ニ不遺言事」

神五(6) 「武蔵国入間河洪水ニ会事」

神五(7) 「乞児物語事」

神五(8) 「真浄房暫作天狗事」

神五(9) 「乞食僧隠徳事」

群 話 説 終 臨

慶一(12)

神五(10)「或上人隠居京中独行事」

慶二(1)

神五(11)「永観律師事」

慶二(2)

ところが、永観の話と隠居の僧の話は、確かに「臨終」というテーマと関わりがあるのであるが、隠徳の僧の話だけは、「臨終」というテーマとは何の関係もない。

また、隠徳僧の話の前話にあたる真浄房の話は、次節でまた考察するため、ここでは詳しく説明しないが、「不思議譚」の性格が明らかなのこの一話は、隠徳僧の話とも何の関係もないようである。

右の二点から考えて、神宮本の巻五には、巻一のようなきちんとした構成様式が見えず、隠徳僧の話の配置は極めて不自然である。これは、逆の方向より隠徳僧の話、つまり慶安版巻一最終話の妥当性を証明できると言ってもよいであろう。

さらに、神宮本の通し番号第12話、即ち巻二の第(1)話である「守輔発願往生事」は「十念」に関する話であり、第11話の「高野ノ麓ニ上人偽ニ妻ヲ娶タル事」とも、何の関連も見出されないようである。第11話に次いで、合理的に第12話が位置できるのは、慶安版巻一の第(12)話しかないようである。

右の理由により、慶安版巻一の説話順は、長明自身が編纂した巻一の説話配列そのものであると断言してよいと考える。

では、慶安版巻一に見られる「二対四話一セット」構成様式、ないしそれに基づく巻構成は他の巻においても指摘できるか、次章は、まず、同じく共通説話のみで構成する巻二と巻三の検証から始める。

註

- (1) 慶安版では「玄敏」と表記。寛文版と神宮本により訂正。
- (2) 慶安版では、目録・内題には「教懐」、本文には「教壞」と記され、神宮本により訂正。
- (3) 山部和喜「神宮文庫本『発心集』の構成」(『国語と国文学』69巻9号、一九九二年九月)、塩野友佳「神宮文庫本『発心集』の特色―配列と構成を中心に―」(『説話文学研究』第三十五巻、二〇〇〇年七月)

第二節 卷構成法の検証

第一節において、慶安版の巻一の説話配列の基本は「二対四話一セット」構成様式であるとまとめ、これは『発心集』巻構成原理の一つであると仮説を提出した。慶安版の巻二と巻三は、巻一と同じく共通説話のみで構成され、説話数もほぼ同じであるので、巻一と同じ構成を持つ可能性は極めて高い。では、この構成様式は巻二・巻三でも同様であるのか、巻二・三の説話配列を考察しながら検証してみよう。

一、慶安版巻二・巻三の説話配列

まず、慶安版巻二所収十三話のあらすじをまとめておく。

慶二(1)「安居院聖行京中時隠居僧値事」

比叡山東塔の安居院にある聖は、京へ行く途中で一人の「下主尼」に呼ばれ、隠居の僧と出逢った。この僧は何らか不詳の理由で、この尼と二人きりで隠居していた。そして、尼が安居院聖に声をかけたのは、僧が尼に「誰ニテモ、後世者ト見ユル人過ギ給バ、必ズヨヒ奉レ」と指示したのであった。安居院聖が隠居僧の願いを受け、彼の善智識になった。隠居僧が弥勒の持者であり、最後その「名号ヲ唱へ、真言ナンドミテ、臨終思様ニ」往生した。安居院聖は隠居僧の善知識として、彼の臨終を見守り往生を助けたうえに、葬礼をも行った。

慶二(2)「禅林寺永観律師事」

① 永観は、もとより、特に深山隱遁には志がなくて、禅林寺に住む時、人に物を貸すことにより生活を維持するが、返却できない場合は、その量により念仏させて済ませた。

② 東大寺の修理に際して、永観は白河院の勅命を受け東大寺別当の職を勤め、修理工事が完成すると、まだ任期中であるのに別当職を辞した。また、別当職にあつた間は、寺の資財を厳密に管理し、「露ハカリモ自用ノ事」はなかつた。

③ 禅林寺には梅の木があり、永観は、毎年その実を薬王寺にある病人に施す。そのため、この梅の木は「悲田梅」と呼ばれてきた。

④ ある人が永観を訪ねた時、多くの算が置いていることに気付いて、「利ノ程数へ給フニコソ」と思ったが、「年来申アツメタル念仏ノ数」を計るためのものであつた。

慶二(3)「内記入道寂心事」

① 内記入道寂心はもとより仏道を願ひ、慈悲の心で暮らした。奉公に行く途中で、主人の帯を落したため泣いている女房に、自分の帯を与えてしまった。

② 親王への進講に向かう途中、寂心は、打たれた馬を「過去ノ父母ニモヤアルラン」と憐れんで涙を流し、親王のもとへは行かなかつた。

③ 『池亭記』に「身ハ朝ニアリテ、心ハ隱ニアリ」と記した寂心は、年を取ってから出家した。横川僧賀上人のところで『摩訶止観』の冒頭を聞く時涙を流してしまつて、僧賀に「アナアヒキヤウナノ僧ノ道心」と

言われ毆られたが、教えを求める度、涙を流す。ついに、僧賀から「実ニ、深キ御法ノタフトク覚ユルニコソ」と感動されることになる。

④ 寂心の貴いことにより、藤原道長までも帰依した。彼が往生した時、弟子の三河入道は優れた道長からの弔問の品の請文を書いた。

慶二(4)「三河聖人寂照入唐往生事」

① 三河守を勤めたことにより三河聖人と呼ばれた寂照は出家前は大江定基という名であった。恋人の死相により無常を感じて、発心出家したのである。

② 寂照は乞食しているうちに、「我道心ハ実ニ発タルヤト心見ココロミ」と思つて、元の妻のところへ行つた。元妻の恨みに対して「何とも覚え」なかつた寂照は、道心を証しえたと、感謝の言葉を言つてその場から離れた。

③ 寂照は寂心の弟子になり、東山如意輪寺に住んでいた。後に、比叡山の横川に上つて、源信僧都に師事した。最後は唐土に渡つて、よく靈驗を現し「円通大師」と称され、唐土で往生したという。

慶二(5)「仙命上人事」

① 比叡山の仙命は、持仏堂で観念の修行をしているうちに、比叡三聖に褒められ、その加護をもらった。

② 仙命の貴いことを知り。後は自分自身で袈裟を縫つて施したが、仙命はこれを受けず谷へ投げた。

③ 仙命は我が資財を惜しまず、板敷までも欲しがる人にあげてしまった。鎌倉の覚尊は尋ねに来た時、板敷のないことを知らなくて落ちてしまったところ、「アナカナシ」と言ったことについて、仙命は『南無阿

弥陀仏』トコソ申サメ」と諫めた。

④ 仙命が覚尊を尋ねて行く時、覚尊は客人の仙命を坊に残して出かける前に物に封を付けた。それは、凡夫である自分が人を疑う罪を作らないためである。

⑤ 仙命の意見を受け念仏し続けて往生を遂げた覚尊の夢告により、仙命の往生もすでに上品上生に定めてい
るといふ。

慶二(6)「津国妙法寺樂西聖人事」

① 樂西は打たれた耕作牛を見て、人間の罪深いことを意識し出家した。

② 津の国の山中に行く時、寒いため主人のいない小屋に入り、勝手に薪を使った。戻ってきた主人に怒られた樂西は、「慳貪ナル火ニハ、アタラデコソハアラメ」と言つて、主人の僧がこの話に悟つて謝つた。

③ 樂西の名を聞き、福原入道平清盛から布施が届いたが、樂西は、「今度バカリハトゞメ」るが、徳も行もないので、再びは受けないと婉曲に拒んだ。さらに、この布施をすべて同寺の僧に分け与えた。

④ 樂西は、日常にもらつた布施の余分を他人に与えた。

⑤ 樂西は、外出する時なくなった念珠を鳥から取り返したが、以後鳥と仲よくなり、その鳥は護法ともいふべき様子であつた。

⑥ 庭にある蓮華が咲かなかつたことを、樂西は「此界ヲサルベキトシナレバ、行ベキ所ニサカントテ、コヽニハサカヌ也」と解釈し、その通りに往生した。

慶二(7)「相真没後返袈裟事」

暹俊は、文殊菩薩のゆかりの袈裟を持っているが、相続できる弟子がいないので、相真が袈裟を継承しようと思ひ暹俊の弟子となった。しかし、先に亡くなってしまった相真の遺言により、すでに渡した五条袈裟と一緒に埋葬された。暹俊は三衣が揃わないことを嘆いているうちに、袈裟の功德により往生を遂げた相真が、暹俊の夢の中に来て袈裟をもとの箱の中に返した。後に、暹俊とその弟子も袈裟をかける功德によって往生を遂げた。

慶二(8)「真浄房暫作天狗事」

鳥羽僧正の弟子真浄房は念仏三昧に専念していたが、僧正の臨終の時「後世ニハ必スアヒテツカウマツルベキ也」と約束したため、鳥羽僧正が堕ちた天狗道に引き入れられた。六年に満ちる時、真浄房は母に憑依し助けを求めて、仏経の書写供養を頼み、翌年天狗道の六年が満ちた時、悪道から離れ不浄身を改めた。

慶二(9)「助重依一声念仏往生事」

前滝口助重という武士が盗人に遭って、矢に当たり、「南無阿弥陀仏」とただ一声叫んで往生した。助重の知合いの入道寂因が夢のなかに助重が往生した由を見て、もう一人の僧もそちらへ結縁に行くべしという夢告を見た。

慶二(10)「橘大夫発願往生事」

八十歳の橘大夫守助は過去「仏法ヲ知ラス…中略…スベテ、愚痴極レル人トゾ見」えたが、亡くなる前の何

か月から、突然発心して、これからの念仏を臨終十念とするように願う発願文を読み、往生を遂げた。また、ある聖人は「時ノカハルゴトニ、最後ノ思ヒヲナシテ、十念ヲ唱ヘツ、此バカリヲ行トシテ、往生ヲトケタ」。

慶二(11)「或上人不值客人事」

長年「念仏ヲコタラヌ」聖は、得意の人が訪ねてきても念仏を止めず、客人と会わない。「アヒ難シテ人身ヲ得」て、念仏より大事なことはないという。

慶二(12)「舍衛国老翁不顯宿善事」

舍衛国にある翁は、宿善があるにもかかわらず、勤めをなさなかつたので、長者・羅漢等になれず乞食になつた。この翁を見て、釈尊が阿難にその経緯を指摘して後世を願うことの大切さを語つた。

慶二(13)「善導和尚見仏事」

唐の高僧善導は観念して阿弥陀仏を見て、往生の証を得たが、師の道綽はその境界になれなかつた。道綽は弟子の善導に頼んで、自分が往生を遂げるかどうかについて、仏に聞いてもらい、「木ヲ切ニハ、斧ヲクダス。家ニカヘルニハ、苦ヲ辞スル事ナシ」という譬喩をもらった。

慶安版卷二所収十三話のうち、第(1)話「京中隱居僧」話と第(2)話「永觀律師」話との間には、内容から見れば何の関連性もないようである。この二話は、巻一卷末話である「顯能家入來僧」話に次いで三話連続であること

は、第一章にすでに紹介した。この隣接二話の無関連の様相はかなり不審であると考えられる。

そして、第(2)話「永観」話と第(3)話「寂心」話との間には、「慈悲」という接点がある。第(3)話「寂心」話と第(4)話「三河上人」話については、第(4)話の主人公寂照は第(3)話の主人公寂心の弟子であり、寂心が逝去した時に勝れた請文を書いたことが語られている。また、第(3)話のなかに、寂心は師の僧賀に殴られても、「アナ、アヒギヤウナノ僧ノ道心ヤ」と叱れられても、諦めず仏道の教えを求め続けていた。そして、第(4)話では、寂照は元妻の悪言に対し、憤懣などの気持ちが生じることはなく、道心を確かめたという。動揺せずという点より、二人とも「堅固な道心」を持っていると言える。

第(5)話の仙命と覚尊、そして第(6)話樂西との三人の間に各々共通する点が見える。まず、仙命も樂西も、我が資財を惜しまず、ついに人に与えてしまった。これに対して、覚尊は客人を坊に残して外出する前に、物に封を付けた行為があるが、それは「人ノ物取ランヲ惜ムニモ非ズ」、凡夫である自分が人を疑う罪障を防ぐためであり、物を惜しむからではなかった。

第(7)・(8)話の二話で最も目立つのは、袈裟の功德により往生したという良い縁と、二世の約束により天狗道に引き入れられた悪い縁との対照である。そして、第(7)話の評の

昔物語ナムトニハ、イミジキ事多カレド、其名残、年ニソヘテホロビウス。マレく残タルモ、世クダリ、人ヲトロヘテ、不思議ヲアラハス事アリガタシ。此ハ、濁レル世ノ末ニ、タグヒスクナキ程ノ事也

から、第(7)話の主眼は「末世の不思議」であることがわかる。さらに、説話のキーである「不思議の袈裟」は文

殊菩薩のゆかりの物であることと、第(8)話に天狗道に堕ちた真浄房が法華經の書写供養により得脱し不浄身を改め異香の靈験を現したことを関連させ、この二話は「仏法の不思議」を語るのであろう。この点から考えれば、第(5)話の、観念時比叡三聖が見守りに来ること、覚尊が往生の夢告に来ること、さらに、覚尊の「日比、橋ヲワタシ、道ヲツクリシ行バカリニテ叶ハ」ない往生の願いは、「時々念仏ヲセシカバ」遂げられたのも、護法や念仏の力などの仏法不思議を語っている。第(6)話の「烏護法」「蓮の往生予告」も同じように見られる。確かに、第(5)・(6)話の三人の身の上から、資財を惜しまずという共通点があるが、この資財を惜しまずという点は、明らかに巻一に現れた「名利無視」「名利を捨てる」に近似し、単独に主題として挙げる可能性がかなり低いと考える。第(5)話から第(8)話は豊富な要素を持っているが、共通主題はやはり「仏法の不思議」、特に「末世の仏法不思議」にあると考えられる。

第(9)・(10)話は、第(9)話の助重の「一声念仏往生」と、第(10)話橘大夫の「願文読み〓臨終十念」および或る聖人の「時々十念」は、一般的な目線から見れば、いずれも本格的な修行ではないが、往生を遂げさせた。この二話は、「仏法不思議」要素を継承したと言える一方、念仏の力を語ることがメインであるに違いない。そして、第(11)話「上人不値客」話のなかに、上人が童に、友人に会わない理由を聞かれた時、次のように答えた。

アヒ難シテ人身ヲ得タリ。此度、生死ヲ離テ極楽ニ生レント思フ。是、身ニトリテ極マリタル営ナリ。何事カ是ニ過タル大事アラム

という。第(9)話から第(11)話は、題から見れば、「一念↓十念↓不断念仏」、念仏の数が増えていくようであるが、

第(11)話の上人の言葉からは「念仏重視」が読み取れる。そして、本格念仏行ではなくても往生を遂げた第(9)・(10)話は、第(11)話の「念仏重視」の姿勢の土台にもなる。

第(12)話と第(13)話については、多くの研究者が疑問を抱いているようである。その理由は、この二話は天竺と震旦、つまりインドと中国の話であるからで、『発心集』の序には、

天竺震旦ノ伝聞ハ遠ケレバカ、ズ、仏菩薩ノ因縁ハ分ニタヘサレバ、是ヲ残セリ。唯、我国ノ人ノ、耳近ヲ先トシテ、承ハル言ノ葉ヲノミ注ス

と書いた長明がこの二話を『発心集』に編入するのは考えにくいと思われるのである。また、この二話は、神宮本においては、前話の「或上人不值客事」の附属説話であるので、特に問題がないという声もある。

この慶安版巻二の第(12)・(13)話は、後人増補であろうか、「上人不值客」話の附属説話であろうか、いずれにしても、慶安版巻二は実質上の第(12)話が欠けているのである。但し、第(9)・(10)・(11)話とともに念仏に関するものであるのも、もし、実質上の第(12)話が存在すれば、それも念仏と関わる可能性が高いと考えられる。

以上の考察結果をまとめると、慶安版巻二においては、第(5)話から第(8)話は「二対四話一セット」構成様式に解釈できる、第(9)話から第十一話は近似の構造が見える。従って、慶安版の巻二の説話配列は、部分的に巻一と通じる。

では、次に、巻一と同じく十二話を収める巻三を見よう。

慶三(1)「江州増叟事」

近江の国に「増叟」と呼ばれた乞食がいた。この翁が必ず往生すると、大和の国のある聖が夢を見た。結縁しようと思った聖が翁を尋ね、この翁から、ただ、悪いことに遭っても、良いことに遇っても、餓鬼道や地獄の苦しさと極楽浄土の素晴らしさを想像比較して、「マシテ」というのを口癖としてしていると聞いた。

慶三(2)「伊予僧都大童子頭光現事」

伊予僧都のもとに、年を取った大童子がいて、宮仕えをしながら絶えず念仏していた。その功により頭に光が現われていることに僧都が気付いた。大童子は、感動した僧都の助力を受け、宮仕えをやめて、念仏三昧の生活をして、臨終正念で往生した。

慶三(3)「伊予入道往生事」

伊予守源頼義は殺生の罪を多く犯したが、みのわの入道の引導により発心し出家した。過去の罪を懺悔し多年修行して、往生へ「勇猛ガウジヤウナル心」を起こした頼義は終りめでたく往生した。その息子は同じく武将であり、善知識もなく、懺悔もしなため、地獄に堕ちた。

慶三(4)「讃州源大夫俄発心往生事」

讃岐の国、もとより仏法を知らずの源大夫は狩をして帰る途中で、偶然に説法を耳にして、阿弥陀仏の本願や極楽浄土のすばらしいことを懂れて、俄に発心してその場で出家した。声のある限り阿弥陀仏の名号を口にして、その所在を尋ねつつ、西方にある海辺の崖に、阿弥陀仏からの返事を聞き、眠っているかのように往生した。その口から、一房の青い蓮花が生じていたという。

慶三(5)「或禪師詣補陀落山事」

ある入道（本文は「入道」）が心も乱れず身にも病のないうちに往生を遂げようと思つて、焼身などの行もやつてみたが、生きたままで浄土に参つたほうがいいと考えて、土佐の国から海へ出て、観音菩薩のいる補陀落山に向かった。みんな、此の僧が必ず成功するであろうと話した。

慶三(6)「或女房参天王寺入海事」

娘の死を悲しみ続けた女房は、四天王寺に詣で、三七日念仏を行った。阿弥陀仏来迎の夢を見た女房は難波の海へ出て、入海し往生した。証として、紫雲と香ばしい匂いがあった。

慶三(7)「書写山客僧断食往生事」

書写山円教寺にやってきた持経者の客僧が、静かに往生を遂げようと思つて、谷の奥に隠れて、無言断食の行を行ったが、この事は信頼する長老が不意に洩らしてしまい、結縁しようとする人々が集まり、結局大騒ぎになっているうちに、此の僧の姿が消えた。後に、隠居した場所の近くに法華経と紙衣が発見され、この僧の往生したことがわかった。

慶三(8)「蓮華城入水事」

世に知られた蓮華城は入水を決意し、親友の登蓮トウレンにいろいろ準備してもらつて、集まっている人々の目の前で川に入った。必ず往生を遂げたと思われたが、「物ノケ」の姿で登蓮の夢に現れ、入水直前に後悔する気持ちが起こり、その一念により悪道に堕ちたと話した。

慶三(9)「樵夫独覺事」

木こりの翁が息子と一緒に山に仕事に行つて休憩する時、木の葉の落ちるのを見て、人間の一生を連想し無常を悟つて、出家し山の中に暮らすと決心した。息子は父の安否をも心配し、且つ若者の先立つこともあると言つて、父と一緒に山の中に隠居し、念仏して日々を過ごした。父は既に往生したという。

慶三(10)「証玄律師希望深事」

薬師寺の証玄律師が年を取つたので寺の職を辞した後、何年か経て、別当という地位を望んだ。弟子たちが師を諫めるため、地獄に堕ちるのを暗示する空夢を語つたが、証玄律師は、悪道に堕ちることを恐れず、別当の職への望みが叶うと解釈して喜びの笑みを見せた。

慶三(11)「親輔養児往生事」

壱岐前司親輔という人の養子が三歳の時、数珠を手に入れ、口癖のように念仏し始め、六歳の時、重病で倒れ、誰にも教えられなかった『法華経』のなかの句を唱えて亡くなった。数日後、養母が仮寝する時、この子が現れて、南方無垢世界へ往生すると告げた。

慶三(12)「松室童子成仙事」

奈良松室のある僧のもとに、諫められても朝夕『法華経』を読む童子がいた。童子は十四五歳の時行方不明になつて、死んだと思われたが、数か月後、実は『法華経』の力により読誦仙人になつて、世間の穢れに堪えられなくなつたため深山に行つたと判明した。童子は僧から琵琶を借り、三月十八日竹生嶋の仙人の樂に

加わった後、琵琶を僧へ返した。その琵琶には、香ばしい匂いが深くしみみていて、権現に捧げられた。

慶安版卷三所収十二話のうち、第(1)話の増叟・第(2)話の大童子は、卷一・二にある人物とは完全に異なり、僧でもなく、身分も低い。また、増叟は普段行ういわゆる「行」は、観念をすることであるが正規な観察行ではない。大童子は最後は僧都の助けにより念仏三昧を行ったが、その前の、頭に光が現れ靈験が示されるまでは、ただ仕事しながら念仏するだけで、正規の念仏行をしていなかった。つまり、二話とも、身分の低い人、卑しい人が非正規の修行で往生を遂げた話である。その往生の因は、第(2)話の評の

往生ハ、無智ナルニモヨラズ、山林ニ跡ヲクラウスルニモアラズ。只、云フカヒナクコウツメル物、カクノ如

に示す通り、功を積む点にある。

第(3)・(4)話の主人公は共に殺生の悪人であった。異なる点を言えば、第(3)話の頼義は罪を懺悔し、正式に出家して、正式な修行をして、勇猛強盛の心が起こって往生を遂げたのに対し、第(4)話の源太夫は突然に出家し、彼の往生は評の「功ツメル事ナケレドモ、一筋憑奉ル心深ケレバ、往生スル事、マタカクノゴトシ」のように、「一筋求める心」にある。従って、第(1)・(2)話の往生の因は、いつでも観念・念仏の功を積むにあるに対し、第(3)・(4)話は主に「心」の問題が問われた。また、この四話の主人公を見るに、第(1)・(2)話は身分の卑しい人であり、第(3)・(4)話の殺生の悪人はもともと人格の卑しい人であったとも言える。従って、第(1)話から第(4)話は、卑しい

人が「功」また「心」の力によって往生を遂げた話である。

第(5)話の入道(題は「禪師」)の補陀落山に向う帰らぬ旅は、第(4)話の源大夫が阿弥陀仏を探し求める姿にも通じる。また、第(6)話の入水した女房は、『発心集』のなかの初めての「女人往生」である。この二話は、共に入水の範囲に属すると考えられる一方、もう一つ内面的な共通点が隠れている。第(5)話の入道が焼身などの捨身行をやめて、生きてままで補陀落山に行こうと決心したのは、疑う心を恐れるためである。そして、天王寺で入水した女房は、三七日念仏参拝のうち、一七日と二七日の間に、地藏・龍樹、普賢・文殊が来たが何もせず、三七日に阿弥陀仏の来迎を見るとすぐに入水をした。疑いのない往生を望む点では、この二人は同じであると考ええる。

次の第(7)話「書写山客僧」話の客僧は断食無言の行を勤め、第(8)話の蓮花城は入水を行った。この二人が行った行は異なるが、鮮明な対照になっている。第(7)話の、静に往生しようと考えた書写山の客僧は、思いかげず、多くの人に発見されても、その騒ぎに動揺せず、姿を隠して往生を遂げた。これに対して、第(8)話の、蓮華城は友達の登蓮に入水の用意をもらって、大勢の人の目の前に入水したが、一念の後悔により物の怪になってしまった。各説話の評により、以上四話の主題は「捨身行」であることは明らかになっている。さらに遡って見れば、第(4)話に、「命ノタエンヲ限りニテ行ント思」って、飲食もせず源大夫の行為は、結果的には捨身とも見え、この四話の伏線となっているのであろう。

第(9)話「樵翁独覚」話と第(10)話「証玄律師」話について、第(10)話の評の

智者ナレバ、此律師マデモノボリケメ。年七十二テ、此夢ヲ悦ケン、イト心ウキ貪欲ノフカサナリカシ。カ

ノ無智ノ翁ガ独覚ノサトリヲ得タリケンニハ、タトヘモナクコソ

の通り、律師の位まで登って智者であるのに、弟子に諫められても恐ろしい貪欲により覚められない証玄は、自ら悟りを開いて往生を遂げた無智の木こりの翁とは、絶妙な皮肉な対照となっている。

そして、次の第(11)・(12)話のなかの子供・少年の往生(昇仙)は自ずからの念仏・誦経によったことであり、第(9)話の木こりの翁にも呼応している一方、第(10)話の律師とはさらに明確な対照になる。従って、ここまでの四話は、それぞれ二話ずつ老少の話でもあるが、自ずから仏道に入る無智なる人と、貪欲に引っ張られ、忠告されても覚めない、いわゆる「智者」の律師との対照にもなっている。

ここまでの慶安版卷三所収十二話をまとめて見ると、第(1)話から第(4)話は、「卑しい人の往生」、第(5)話から第(8)話は「捨身行」を中心に論じ、第(9)話から第(12)話は、独覚の無智者と覚めない「智者」との対照でもあり、老少の対照でもある。巻一と同じく三つの「二対四話一セット」がまとめられる。では、巻三には、どのような共通主題が読み取れるのか。

巻三の主人公は巻一と巻二と異なり、僧だけではない。また、第(1)話から往生の因を問う話が多い。この二つのことから、慶安版卷三の主人公たちの身分と行法などと往生(昇仙)の因を表1にまとめた。

慶安版卷三全体を見れば、巻一・二は殆ど正規の僧の話を収めているのに対して、巻三の往生(昇仙)した主人公には、身分の卑しい人もいるし、人格の卑しい殺生の悪人もいる。男性もいるし、女性もいる。老人もいるし、子供もいる。僧もいるし、仏法と縁のないはずだった人もいる。そして、これらの人が往生・昇仙を遂げた

※ 表1 〈卷三所収説話対照〉

順番	説話	往生（また往生失敗）の諸因諸相	身分	特徴
慶三(1)	江州増叟事	「マシテ」の口癖Ⅱいつも観念	乞食	身分の卑しい人
慶三(2)	伊予僧都大童子頭光現事	仕事しながらの念仏、功を積む	大童子	
慶三(3)	伊予入道往生事	懺悔念仏・勇猛の心	武将	殺生の悪人Ⅱ
慶三(4)	讃州源大夫俄発心往生事	一筋求める心	殺生する人	人格の卑しい人
慶三(5)	或禪師詣補陀落山事	帰らぬ出航Ⅱ入水	入道	俗男
慶三(6)	或女房参天王寺入海事	入水	女房	俗女
慶三(7)	書写山客僧断食往生事	断食無言	客僧	
慶三(8)	蓮華城入水事	入水 (失敗譚)	僧	僧
慶三(9)	樵翁独覚事	独覚・念仏	七十代の樵	
慶三(10)	証玄律師希望深事	忠告されても覚めず (失敗譚)	七十代の僧	老
慶三(11)	親輔養児往生事	念仏・『法華経』	幼児	
慶三(12)	松室童子成仙事	『法華経』読誦(昇仙)	少年	少

理由について、行法を言えば、観察行・念仏行・捨身行・読経などがあり、つまり、総体的に、高僧ではなく、様々階級・身分の人々の様々な往生譚の集合であり、往生の諸因・諸相を示しているのである。

これで、慶安版の巻三が巻一と同じ様相を示すことがわかる。

従って、巻一から巻三のほぼ全体に、「二話一対」配列様式が成立している上に、二対の四話が一セットとなり、より複雑な「二対四話一セット」構成様式となっているようである。現段階での例外は、巻二の第(1)〜(4)話と第(9)〜(13)話である。この二つの部分は、いずれも、両伝本系統の本文異同がある。これらの説話の神宮本本文は疑問を解く鍵になれるか、次に考察する。

二、慶安版巻二における疑問点

(一) 第(1)・(2)話の関連性について

慶安版では巻二第(2)話、神宮本では巻五の第(1)話である「永観律師」話は、その両系統本文の最初の三つの話は同じ話であるが、言葉遣いには微妙な相違が見られる。そのなかに、特に注目したいのは冒頭の記述である。

① (慶) 永観律師ト云人アリケリ。年来念仏ノ志深ク、名利ヲ思ハズ。世捨タルカ如ク也ケレド、

(神) 永観律師、年来念仏ノ志シ深クテ、名利ヲ重クセズ。世ヲ捨テタルカ如ク成リケレト、

② (慶) サスガニ哀レニモツカマツリ、シレル人ヲワスレザリケレバ、殊更、深山ヲ求ル事モナカリケリ。

(神) サスカニ君ニ事マツリ、知人ヲモ忘レサレハ、深キ山ヲ求ル事モ無シ。

③ (慶) 東山禅林寺ト云処ニ籠居シツ、後略：

(神) 東山禅林寺ト云フ所ニ籠リ居ツ、後略：

文中に示した顕著な相違のなかに、「ト云人アリケリ」の有無及び「名利ヲ思ハズ」と「名利ヲ重クセズ」の相違は、本文の理解に対して何の支障もないようであるが、「哀レニモツカマツリ」と「君ニ事マツリ」の意味は完全に異なっている。

『私聚百因縁集』巻八所収の「永観事」本文を参照してみよう。『私聚百因縁集』は、現存二系統に分化する前の『発心集』から多数の説話を全文あるいは部分的に書写・参照したことは、すでに多くの研究者に証明されて

いる。⁷⁾特に、卷八に記録されたのは日本仏教の祖師というべき人物であり、住信が『発心集』を含めて多数の書を参照して、部分的に書写し融合させたのである。上段の話について、『私聚百因縁集』は左記のように記したのである。

サスカニ君ニモ仕、知人ヲモ不_レ忘ケレハ、世不_レ聞深山^①蚬^②蚊^③隱トハ不_レ被_レ為ケリ。東山禪林寺ト云所ニ籠居ツ、：

神宮本に極く近似する「君ニモ仕」と記されている。従って、『発心集』が分化する前の叙述は「君ニモツマカツリ」である、「哀レニツカマツリ」ではないと考えてよいであろう。確かに、「哀」と「ツカマツリ」との組合せも、対句であるはずの「知人ヲモワススズ」との対照も不自然である。では、この「君ニモツカマツリ、知人ヲモワススズ」については、どう理解すればよいのか。長明が『発心集』に記した出典の「伝・記」のなかの『拾遺往生伝』には、次の記述がある。

応徳三年、五十四、高才の聰をもて、維摩の講師の請を給はりつ。然れども念仏の妨を成すに依りて、乃ち辞し遁れむの思を企てつ。貫首の弟子法印慶信相語りて云はく、本寺のため、遺弟子のために、暫く韜世の志を抑へて、宜しく奉公の節を遂ぐべしといへり。これに因りて希望なしといへども、この諷諫に随ひて、
屡^④朝廷に仕えたり。

この記述によれば、永観は東大寺別当に就任する前に、一度講師の任命を辞したが、後に慶信の意見を聞いて、しばしば朝廷に仕えたそうである。これはまさに「サスカニ君ニ事^⑤マツリ知人ヲモ忘_レサレハ、深キ山ヲ求ル事モ

無シ」であろう。さらに、この一句は後の東大寺別当就任とも繋がっていると考えられる。

慶安版の「哀レニモツカマツリ」という記述は、この背景を知らない人が不審と思つて、同話にある慈悲説話と合わせるように改めたのであろう。

では、冒頭部分は正しい形を維持している神宮本の独自話柄を見よう。

「永観律師事」の神宮本文は、最後に永観の臨終話を記している。

此人終リニ臨テ、サスカニ善知識無クテハ悪キトテ、聖人一人喚タリケルニ、律師、「大乘十二部経ノ首題ノ名字ヲ唱ヘ給ヘ」ト云ハレケレハ、聖人、修多羅祇耶ナト云十二部経ノ名字ヲ唱ヘケレハ、是ヲ聞テ、「十二部経ノ名字トハ、是ヲ云トシリ給ヘルカ」トテ、ワロケニ思ハレタリケリ。サテ、正キ折ニハ、我ハ声ニモ出サス。念仏申サセテ、目ヲ閉テ心ヲ澄テ聞テ、「但聞ニ仏名ニ菩薩ノ名」、除ニ無量生死ノ罪、何ニ況ヤ憶念センヲヤ」ト、此ノ句ヲ度々云テ往生シ給ヒケリ。

大乘十二部経ノ名字ヲ唱ヘヨト云ハ、只華嚴大集大品法華涅槃ナトノ題名ヲ唱フヘシト思ハレケルナリ。十二部経トハ、小乗ニハ九部有リ、十二部ハ大乘ニコソアレハ、大乘ヲ十二部経ト云ナリ。サレハトテ、正キ本事門答等ノ名ヲ唱ルハ浅シキ態也。彼ノ聖人、誰ニカハ、善知識モ々々々ニヨルヘシ。無案内ナルカイシヤク無用、大事ノ事也。

「サスカニ善知識無クテハ悪キ」という考え方は、明らかに前話の「京中隱居僧」が善知識を求める行為と同趣である。

「京中隱居僧」の話では、安居院聖は隱居僧の願いを受け、彼の善知識となつて、時々通ううちに、隱居僧の臨終に立ち会い、隱居僧は「弥勒ノ持者ナリケレバ、其ノ名号ヲ唱へ、真言ナムドミテ、臨修（りんしゆ）思様ニ」往生することを得た。隱居僧を見守つて彼の往生を助けた安居院聖は、善知識としての役割をよく果たしたのである。これに対して、永観も往生を遂げたが、呼ばれてきた聖人は、實際は善知識としての役割をうまく果たせなかつた。

永観が「大乘十二部經ノ首題ノ名字ヲ唱へ給へ」と頼んだのは、『觀無量壽經』の教えによる往生の作法の一つである。

下品上生者。或有衆生作多惡業。雖不誹謗方等經典。如此愚人。多造惡法無有慚愧。命欲終時遇善知識。為讚大乘十二部經首題名字。以聞如是諸經名故。除却千劫極重惡業。⁸¹⁾

「首題名字」というのは、「經の題名」である。「例えば『般若心經』とか『妙法蓮華經』という題字」である。従つて、「讚大乘十二部經首題名字」とは、大乘經典の題名を唱えて褒め称えることである。⁸²⁾ 右の經文によれば、方等經典を誹謗しない「惡人」が臨終の時、もし善知識と遇い、大乘十二部經首題名字を唱え讚嘆してもらえば、それまでの惡業が除かれる。往生が遂げられるそうである。

永観が『觀無量壽經』を重視する姿勢は、彼の著作の『往生拾因』にある多数の引用からわかる。また、大乘十二部經首題名字の功德については、同じ『往生拾因』に多数引用された、天台大師智顛著の『觀無量壽經疏』や源信の『往生要集』などに記されている。さらに、永観の生きた頃と同じくする作品の『榮花物語』には、次

の場面がある。

講師たち、なかなか心のどかなるところにて、尊くあはれに仕つまつる。「十千の魚、十二部経の首題の名字を聞きて、みな切利天に生れたり」とあり。¹¹⁾

十千の魚が切利天に生れた話は、『金光明最勝王経』（『金光明経』とも訳す）の「流水子長者品」に載せている。但し、十千の魚が聞いたのは「十二縁起」（「十二因縁」とも訳す）である。しかし、『栄花物語』は部分的に間違つたと言つても、この書物が成立した頃、即ち永観の生きた頃では、「十二部経の首題の名字」を聞けば、滅罪を得て往生できるといふ考え方は、すでに広がってきたと想定できる。そして、この思想は、中世を経て、近世後期までも伝わつた。¹²⁾

しかし、説話のなかに、永観の依頼に対して、善知識の聖人は、「修多羅祇耶ナト云十二部経ノ名字ヲ」唱えた。「修多羅」とは、サンスクリット語「sūtra」の音訳で、「経」あるいは「契経」と訳し、ブツダの教えの散文形式のものを指す。「祇耶」（geya）は、「苾頌」また「重頌」と訳し、散文形式のブツダの教えの意をとつて詩形としたものを指す。他に「伽陀」（諷頌・孤起頌）、「尼那陀」（因縁）などを加え、全部で十二種あり、釈迦の教えを内容および形式により分けた各分類の名称である。故に、仏教経典は「十二部経」あるいは「十二部教」ともいう。¹³⁾従つて、善知識の聖人は「首題」というキーワードに気付かず、「大乘十二部経ノ首題ノ名字」を仏教経典分類名称として理解してしまい、永観の頼みの真意を理解しなかつたのである。つまり、この善知識は観経の臨終作法の文に思いが及ばなかつた。これにより永観が望んだ下品上生の往生作法が成立しなくなつた。

永観は「十二部経ノ名字トハ是ヲ云トシリ給ヘルカ」と、この聖人が誤解したことに気付いたが、往生の「正キ折ニハ」説明する余裕がないため、何も言わず、ただ「念仏申させ」て、自分が「但聞ニ仏名ニ菩薩ノ名」¹、除ニ無量生死ノ罪²、何ニ況ヤ憶念センヲヤ」という経文を唱えた。これも『観無量寿経』の教えに基づいたものである。『観無量寿経』の最後には、

若善男子。善女人。但聞佛名ニ菩薩名。除無量生死之罪。何況憶念³

とある。これは、『観経』のなかの最も基本的な教理である。そして念仏の功德を信じる永観は、既に臨終が近づいていた故、往生の機を逃さぬよう、すぐさま聖人を念仏させ、その念仏の声のなかに、自らが依拠するこの経文を唱えて、往生を遂げたのである。

従って、永観の臨終話と京中隠居僧の話は、共に善知識の臨終看護に関する話である。但し、天台系の安居院聖は弥勒持者の隠居僧の善知識となり、その臨終をきちんと助けたが、永観が呼んできた善知識はその役割をうまく実現しなかった。

これで、もう一度巻二巻頭部四話の関連性を考えよう。

この四話の主人公たちは、実際はある共通点を持っている。この四人はすべて貴族出身の出家者である。第(2)話の永観は文章博士源国経の子であり、第(3)・(4)話の寂心・寂照も、もとより朝廷に仕える貴族として名を成した人々であった。第(1)話の隠居僧については明言されていないが、説話最後に「是モ、ヤウ有ケル人ニコソ」という文から考えれば、この僧も只人でないと推測できる。さらに、この僧は、「京へ出ケル道」より「ハルカニ奥

フカナル家」に隠居して、生活は保障されているが、尋ねてくれる人がないようである。この情況は河原者の境遇と比較して考えれば、この僧は、何かの不具合の病氣のため、隠居させられたと推測できる。そして、不治の病にかかった人を河原に放逐するという習いを持っていた時代に、この隠居僧の場合は、生活の面倒を見る尼もいて、食料なども「ウスル程ヲハカラヒテ」送ってくるのであった。この僧が死ぬまで何年間も続けて二人分の食料などを用意するのは、一定の財力且つ一定の覚悟がなければできないのであろう。従って、この隠居僧も、一定の身分を持って、貴族関係者であると考えてよいと思われる。

さらに、第(2)話「永観律師事」冒頭部分にある

年来念仏ノ志深ク、名利ヲ思ハズ、世捨タルカ如クナリケレド、サスガニ、哀レニモツカマツリ、シレル人
ヲワスレザリケレバ、殊更、深山ヲ求ル事モナカリケリ

という叙述の通り、東大寺別当職の任命を受け、寺の修理が終わると辞任した永観は、名利をも思わないが、山林への隠遁も特に希望しなかったようである。そして、同じ姿勢は他の三人の身の上も見えるようである。

まず、第(3)話の内記入道寂心は、宮中で奉公する時より「心ニ仏道ヲ望願」ってきたが、それにもかかわらず「年タケテ後、頭ヲロシ」たのである。第(4)話の三河聖人寂照の場合では、若く出家して乞食も一度したが、最後に比叡山に登り、学問僧として入唐し、当時の宋の真宗より勅封を受けたこともある。この三人に対して、第一話の隠居の僧については、明確な記述がないが、彼が隠居する場所は京中にあり、貴族であると推測られる関係者からの援助を拒まず受けて続けていた。従って、巻二巻頭四話の主人公たちは、共に朝廷や貴族階級との関

わりが絶えなかった。これは、永観についての評判の通り「殊更、深山ヲ求ル事モナ」と理解すればよいであろう。即ち、「出世の名聞を求めず」という姿勢が読める。

「出世の名聞を求めず」という観点は、巻一の最終話の評に出たのである。

実ニ道心アル人ハ、カク、我身ノ徳ヲカクサムト、過ヲアラハシテ、貴マレン事ヲ恐ル、ナリ。若人、世ヲ遁タレドモ、イミジクソムケリト云ハレン、貴ク行由ヲ聞ント思ヘバ、世俗ノ名聞ヨリモ甚シ。此故ニ、有経ニ、「出世ノ名聞ハ、譬ヘバ、血ヲ以テ血ヲ洗ガ如シ」ト説ケリ。本ノ血ハアラハレテ、落モヤスラン、知ラズ。今ノ血ハ、大ニケガス。愚ナルニ非ズヤ。

長明は、巻一の高僧たちの俗世からの出離を求める貴さを評価すると同時に、貴いと言われたいため「出世の名聞」を取ろうとするのはいけないと諫めた。そして、この諫めに沿って、巻二の巻頭四話に、俗世から離れて隠遁しようとはしなかったが目出度く往生を遂げた四人の事績を配置したのである。

では、わざわざ俗世から離れなくても往生できるのは何故であろう。第(3)・(4)話の一对について、寂心と寂照の間に師弟関係がある上に、二人は共に「真実の道心・堅固な道心」を持っていることは既に説明した。これと関連させて考えれば、隠居僧と永観も同じようである。

第(1)話の隠居僧が住んでいる場所は、「隣ニ檢非違使ノ侍ベリツル間ニ、罪人ヲ責問ル音ナムド」が聞こえるので、どう考えても修行者にとってはよい場所とは言えない。しかし、隠居僧は厳しい条件を克服し、妄念を起さず邪魔されず往生を遂げた。そして、第(2)話の神宮本本文のなかで、永観は臨終の時、善知識の大乗十二部経首

題名字を誤解することにより、彼の本当の望みの臨終作法に添えない事態になつても、動揺せず、『観無量寿経』の教えに従い、善知識を念仏させ、その念仏の最中に心を澄まして往生を遂げた。また、永観が自ら依拠する経文を何遍も唱えたことについては、信心を固める姿勢をも見て取れる。

従つて、卷二の冒頭四話も二話ずつ対となる上に、人物性格には「道心堅固・動揺せず」という共通点が読める。

(二) 第(12)・(13)話の増補疑問について

慶安版の第(12)話と第(13)話について、多くの研究者が疑問を抱いているようである。その理由は、この二話は天竺と震旦、つまりインドと中国の話である。しかし、『発心集』の序には、

天竺震旦ノ伝聞ハ、遠ケレバカ、ズ。仏菩薩ノ因縁ハ、分ニタヘサレバ是ヲ残セリ。唯我国ノ人ノ耳近ヲ先トシテ、承ハル言ノ葉ヲノミ注ス

と書いている。インド・中国の話、仏・菩薩の話を書かないと表明した長明がこの二話を『発心集』に編入するのは考えにくいと思われるのである。

一方、神宮本では、この二話は前話の附属話柄として挙げられ、目録において、主説話の題の左下に「末之二ヶ条難有念仏之勤信有之」という説明文があるため、この二つの話は主題を深化させる役割であり、神宮本のまとまっている形はもともとの形態であるという声もある。

さらに、この二話を後人増補と主張する廣田哲通氏でも、この二話は前話に対して「補足的役割をになう」と認めた。¹⁶従って、この二話は内容から見れば、前話の第(11)話と関連することは間違いはない。第(11)話には、次の評文がある。

此事、アマリキヒク覚ユルハ、我心ノヲヨバヌナルベシ。

『坐禪三昧経』云、

今日營此事、明日造彼事。

樂著不觀苦、不覺死賊至_云

世中ニアル人、サスガニ後世ヲ思ザルナシ。「ケウハ、此事ヲセン、アスハ彼事ヲ營マム」ト思フホドニ、無常ノカタキノ漸近ヅキテ、命ヲ失事ヲバ知ザル也。

この評により、第(11)話の主旨は、常に念仏すべき、浄土を願うべきであるとわかる。そして、第(12)話のなかに、「弥陀仏ノ悲願ヲ聞ナガラツトメ行ズシテ」宿善を徒らにした翁は、第(11)話の「アヒ難シテ人身ヲ得」たので、「生死ヲ離テ極樂ニ生レント思フ」上人とは正反対の例となり、内容から見れば、諫めの役割でこの一話の附属話柄としては相応しいと言える。

そして、第(13)話において、道綽の「我、朝夕、往生極樂ヲ願事ハ叶ナムヤ」という質問により、善導が定に入って阿弥陀仏から、「木ヲ切ニハ斧ヲクダス」と「家ニカヘルニハ苦ヲ辞スル事ナシ」との二つの譬喩をもらった。この譬喩の解釈と評は説話の末尾に書かれている。

カク云ヘル意ハ、木ヲ切ニハ、イカニ大ナル木トイヘドモ、タユミナク是ヲ切レバ、終ニトシテ切タヲサズト云事ナシ。怠テヤスムベカラズ。家ニ帰ニハ、又、クルシトテ、中ニトゞマル事ナカレ。ハフ／＼モ必行付ベシ。志深シテ怠ズハ、疑アラザル由ヲ教給ヘルナリ。此事、道綽ニ限ベカラズ。モロ／＼ノ行者ヲナジカルベシ。

第(11)話と同じく「怠らず」という言葉が使われているが、様相は少々異なる。まず、譬喩の両系統本文異同に注目したい。一つ目の「木ヲ切ニハ」譬喩は、慶安版では「斧ヲクダス」として、神宮本では「斧ヲ多クス」とする。慶安版の「斧ヲクダス」は木を切る時の手段だけで、神宮本の「斧ヲ多クス」こそは努力の方向である。次の二つ目の「家ニカヘルニハ苦ヲ辞スル事ナシ」と比較して見ると、明らかに、神宮本の「斧ヲ多クス」の方が相応しい。また、この「斧ヲ多クス」という教えは、卷三冒頭二話の「功を積む」主題にも繋がれて、卷二から卷三への架け橋のような存在であると思われる。

さらに、卷三の第(7)話「書写山客僧」話の評文には、証拠の事例として、善導の捨身話に取り上げられた。

彼善導和尚ハ、念仏ノ祖師ニテ、此身ナガラ証ヲ得給ヘル人ナリ。往生疑ベクモアラザリシカド、木ノ末ニノボリテ、身ヲナゲ給ヘリ。人ノ為ハ、アシキ事ヲシソメ給ハンヤハ。

この「此身ナガラ証ヲ得給ヘル」という文は、明らかに卷二第(13)話の冒頭の

定ノ中ニ阿弥陀ヲ見タテマツリ。覺束ナキ事ヲ問タテマツリ、証ヲ得給ヘリ

という記述を踏まえている。卷一と同じ様相を呈する慶安版卷三は、長明元来の編纂のままである可能性は極め

て高いので、「書写山客僧」話の記述のもととなる卷二第(13)話も長明の手によって編入されたと考えてよいであろう。

さらに、序を改めて考えて見れば、問題視される二話において、確かに、釈迦牟尼仏と阿弥陀仏が登場したが、厳格に言えば、この二話は「仏・菩薩の因縁」までとは言えない。そして、善導について、仏教、特に天台浄土教が盛んなあの時代では、釈迦牟尼仏と阿弥陀仏でも、善導と道綽でも当時の日本人によく知られている存在であり、「我国ノ人ノ耳近」というの選択条件に入れるのであろう。また、山田昭全氏が、善導捨身譚とこの第(13)話の収録は、「長明の善導への関心の高さを示すものであろう」と推測された。確かに、念仏者でもある長明は念仏の祖師である善導の話を『発心集』に取り入れるのは不自然ではない。

ここまで、後人増補の疑惑のある慶安版巻末部二話をめぐって、説話本文異同および説話関連性の角度から考察してみた。その結果として、第(12)話「舎衛国翁」話は、第(11)話「上人不値客」話の附属説話としては、内容的には特に問題がないようで、「善導見仏」話は、「上人不値客」話との間には「怠らず修行すべき」という共通点を読み取れる一方、「功を積むべし」「苦を辞せず」とも解釈できるので、独立して、実質の第(12)話として、卷二と卷三との結点である可能性も考えられる。

三、『発心集』の巻構成法

『発心集』の巻一から巻三の構成を考察した結果をまとめて表2に示す。

※ 表2 〈巻一〉〜巻三の構成〉

〈巻一〉	
慶一(1) 「玄敏僧都遁世逐電事」	—— 興福寺を離れ、渡守となり、露見後行方不知
慶一(2) 「同人伊賀国郡司被仕給事」	—— 身分を明かし人を救った後再び隠遁
慶一(3) 「平等供奉離山趣異州事」	—— 延暦寺を離れ、伊予にて門乞食、露見後山林隠遁
慶一(4) 「千観内供遁世籠居事」	—— 三井寺より山林へ隠遁
慶一(5) 「多武峯僧賀上人遁世往生事」	—— 狂気・名聞を捨てる・臨終散執
慶一(6) 「高野南筑紫上人出家登山事」	—— 財産・恩愛を捨てる発心
慶一(7) 「小田原教懐上人打破水瓶事」	—— 物への愛執を断ち往生
慶一(8) 「佐国愛華成蝶事」	—— 物への愛執により墮畜生道
慶一(9) 「神楽岡清水水谷仏種房事」	—— 資財惜しまず・魚を求めたが再びは受けず
慶一(10) 「天王寺聖隠徳事」	—— 狂気・魚鳥を食す
慶一(11) 「高野辺上人偽儲妻女事」	—— 形だけの妻を儲ける
慶一(12) 「美作守頭能家入来僧事」	—— 妻帯と偽る
〈巻二〉	
慶二(1) 「安居院聖行京中時隠居僧値事」	—— 善知識を求め、臨終正念往生
慶二(2) 「禅林寺永観律師事」	—— 名利重くせず・慈悲・念仏重視
慶二(3) 「内記入道寂心事」	—— 慈悲・真実の道心
慶二(4) 「三河聖人寂照入唐往生事」	—— 愛人の死により発心・道心試練・入唐靈験
	〔善知識求め・臨終正念往生〕
	〔師弟・まことの道心〕
	〔貴族道心堅固で往生〕
	〔人に知られぬ所へ隠遁〕
	〔貴僧の再遁世〕
	〔断執すべし〕
	〔断執散執〕
	〔名利を捨てる〕
	〔物狂い・肉食〕
	〔偽悪隠徳〕
	〔偽りの妻帯〕

(*神宮本本文により)臨終時善知識を呼ぶ。その意外な無知を補い正しい臨終作法で往生

- 慶二(5) 「仙命上人事」——比叡三聖觀念を見守る・資財惜しまず・念仏の勧め・往生夢告
- 慶二(6) 「津国妙法寺楽西聖人事」——平清盛の布施を受けず・烏護法・証往生の蓮華
〔護法靈驗〕
〔仏法の不思議〕
- 慶二(7) 「相真没後返袈裟事」——袈裟の功德により往生・夢の中袈裟返却
〔良縁と悪縁〕
- 慶二(8) 「真浄房暫作天狗事」——師と後世を契り墮天狗道・仏経供養により脱出
- 慶二(9) 「助重依一声念仏往生事」——矢に射られ一声念仏で往生
〔不思議な念仏の力〕
- 慶二(10) 「橘大夫発願往生事」——発願文読誦を臨終十念に当てて往生
〔怠らず念仏すべし〕
- 慶二(11) 「或上人不值客人事」——念仏のため客人と会わず・念仏怠らず・念仏重視
〔怠らず念仏・修行すべし〕
- 慶二(12) 「舍衛翁老翁不頭宿善事」——宿縁を無駄にした翁・仏道を信じ発心すべし
〔*第12話は第11話の附属話柄か〕
- 慶二(13) 「善導和尚見仏事」——阿弥陀仏、念仏修行は怠るべからずという

〈巻三〉

- 慶三(1) 「江州増叟事」——「まして」の口癖||随時の非正規観念・往生夢告
〔身分卑しい人、「功」を積み往生〕
- 慶三(2) 「伊予僧都大童子頭光現事」——宮仕しつつ不断念仏・頭光現る・念仏往生
〔卑しい人の往生〕
- 慶三(3) 「伊予入道往生事」——武将懺悔修行往生・勇猛強盛の心
〔殺生の悪人、「心」によって往生〕
- 慶三(4) 「讃州源大夫俄発心往生事」——殺生悪人阿弥陀仏を呼び探し往生・一筋求める心
- 慶三(5) 「或禅師詣補陀落山事」——補陀落渡海
- 慶三(6) 「或女房参天王寺入海事」——四天王寺入海・女人往生
〔入水〕
- 慶三(7) 「書写山客僧断食往生事」——無言断食往生
〔捨身行〕
- 慶三(8) 「蓮華城入水事」——入水、妄念により往生失敗
〔捨身行〕

慶三(9) 「樵夫独覚事」	無智樵翁自ら無常を悟り隠居往生	
慶三(10) 「証玄律師希望深事」	別当職を望む老僧、墮地獄の諫に回心せず	〔独覚樵翁と目覚めぬ老律師〕 〔自ずから仏道に入る 無智者対照の「智者」〕
慶三(11) 「親輔養児往生事」	幼児自発の念仏往生・法華経文を唱える	〔子供の成仏（昇仙）〕
慶三(12) 「松室童子成仙事」	少年法華経を読み誦誦仙人となる	

廣田氏が指摘された「二話一対」配列様式が成立する上に、より複雑な「二対四話一セット」構成様式が存在を推測した。さらに、『発心集』巻二は巻一・巻三と同じように、三つの「二対四話一セット」の存在が読める一方、この三巻の第(8)話―加えて、巻四第(8)話も―すべて往生失敗譚であり、これはただの偶然とは考えにくく、巻四第(8)話までの説話配列の安定性をも示しているのである。

大胆に推測してみよう。長明が構想した『発心集』の基本構成様式は、「二話一対」だけでなく、「二対四話一セット」に基づき、三セット十二話で一巻を構成するのではないであろうか。さらに、各巻の第(8)話、つまり第二セットの第四話目に往生失敗譚を配し、序に記した「愚ナルヲ見テハ自ラ改ムル媒トセム」という方針に従い、諫める機能を確実に果てるためであろう。

では、この巻構成法は、慶安版独自説話を有する巻四から巻六において、同じように指摘できるか、次章でその検証を行う。

註

(1) 慶安版は「吉」である。他兩本により訂正。

- (2) 慶安版は「卜蓮^{ホク}」である。神宮本により訂正。
- (3) 神宮本には、二人とも往生したと記されている。
- (4) 慶安版は「証空」である。神宮本により訂正。
- (5) この一話の出典の『拾遺往生伝』においては、往生を遂げたのは、親輔の養子ではなく、その二男の養子である。
- (6) 慶安版は「成仏」である。神宮本により訂正。
- (7) 築瀬一雄『発心集研究』（築瀬一雄著作集三）（加藤中道館、昭和50年5月）。山内益次郎「発心集解説」（『西公談抄・発心集・和歌色葉抄書』（神宮古典籍影印叢刊）一九八四年五月）
- (8) 『拾遺往生伝』の本文引用は、『往生伝 法華験記』（日本思想大系7）（岩波書店、一九七四年九月）による。
- (9) 『仏説観無量寿経』（大正新修大藏経第十二巻、一九二六年六月）
- (10) 中村元・早島鏡正訳註『浄土三部経』下（岩波書店、一九九〇年12月）
- (11) 『栄花物語』②（新編日本古典文学全集32、小学館、一九七九年1月）
- (12) 江戸後期僧、香月院深励が『観無量寿経講義』のなかに、「讚大乘十二部経首題名字」について、
善知識が大乘経の題号をのべて讚嘆してきかせた処なり…中略…これは臨終の機へ対して長長として御経が説いて居らるるものにあらず。故に題号ばかりを説いてきかせる。大方広仏華嚴経と云ふ題号。これはすぐれた経の題号じやほどにと讚嘆してきかせる。或は摩訶般若波羅密経或は妙法蓮華経等の題号を説いてこれも勝れた題号ぢやと讚嘆してきかせることなり…中略…其大乘経の題号を聞いたばかりで千劫の罪を除こる。これは天台疏の最初に此経の題号

を積する所に経説を引いて。若し首題名字をきかば得る処の功德限量ならずとある。それを妙宗鈔に積して金光明経及び諸大乘経に多く此説をなすと積しておかせられた。これ仏経の題号には其経の功德がみなそなはる。(『観無量寿経講義』、法蔵館、一九八二年一月)

と詳しく説明した。「天台疏」とは、天台智者大師著の『観無量寿経疏』である。宋の四明知礼大師が著した「妙宗鈔」も『往生拾因』に多数引用された。

- (13) 「修多羅」(経)「祇耶」(応頌)及び「伽陀」(諷頌・孤起頌)、「尼那陀」(因縁)「伊帝目多伽」(本事)、「闍多伽」(本生)、「阿浮達磨」(未曾有)「阿波陀那」(譬喩)、「優婆提舍」(論議)、「優陀那」(自説)、「提仏略」(方広)、「和伽羅」(授記)との十種の分類がある。中村元『広説仏教語大辞典縮刷版』(東京書籍、一九九〇年七月)、岩本裕『日本仏教語辞典』(平凡社、一九八八年八月)等に参考。

- (14) 注(9)に同じ。

- (15) 池田敬子「『発心集』の旅路―説話配列解釈の試み―」(説話論集、二〇〇八年五月)

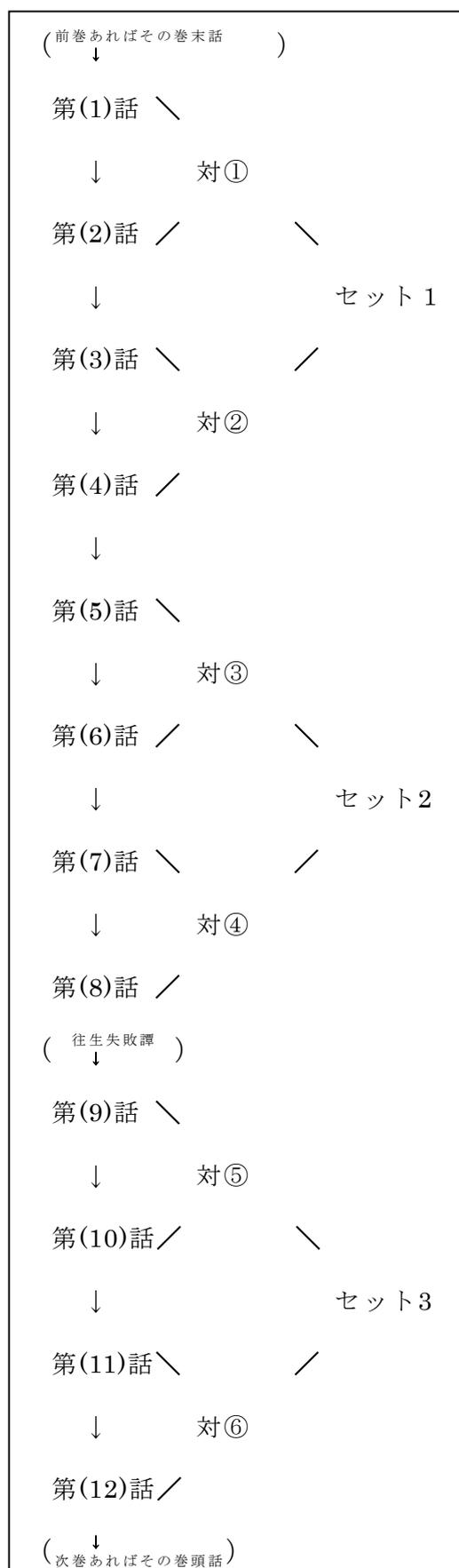
- (16) 廣田哲通「発心集の説話配列」(女子大文学、一九七六年三月)

- (17) 山田昭全「長明の善導観を論じて慶政に及ぶ―『発心集』卷三第七話をめぐって」(『説話文学研究』24巻、一九八九年六月)

第二章 『発心集』巻構成の検証

第一章において、慶安版『発心集』の巻一から巻三に対し考察し、長明が採取した巻構成法を推定した。図示すると、次のようになる。

※ 表1 〈巻構成法〉



一つの巻には十二話が収められ、互いに関連性を持ち、全体的に一本の系に繋がれているように並んでいる一方、隣接説話間の関連性の緊密度により、二話ずつ一対となるうえに、二対ずつ対応関係を持ち、二対四話ごと一つの共通主題が指摘できる。この構成様式を名付けて「二対四話一セット」構成様式にした。そして、同じ巻の三セットの主題間も関連性が見出せられ、巻全体が緩やかな繋がりで一つのテーマをめぐって展開する。さ

らに、第(8)話に必ず往生失敗譚を配すると推定した。

慶安版の巻四から巻六は、それぞれ、十話・十五話・十三話を収める。慶安版独自説話が、各巻の三割から五割ぐらいまでの分量を占める。

第一節 巻四の構成検証

慶安版巻四の所収説話数は十話しかなく、巻頭部三話は慶安版独自説話であるが、共通説話七話中六話―第(4)話から第(9)話―は神宮本においても同じ順序で連続していて、冒頭十一話に次いで、現存『発心集』のなかの二番目に大きな安定説話群である。また、巻三までと同様の構成様式があてはまるのであろうか、巻四の第(8)話は、巻一から巻三と同じく往生失敗譚が配される。このことと第(4)話から第(9)話の安定説話群のことを関連させて考えれば、この側面からも巻四―少なくとも第(8)話ないし第(9)話まで―の配列の安定感を暗示すると言えるのであろう。また、築瀬一雄氏・山口真琴氏等のご指摘によれば、慶安版巻四の巻末部分には説話の脱落があり、現在の第(9)話と第(10)話と各々一対の説話となる説話があったと考えられるという¹¹⁾。従って、巻四はもともと、巻一から巻三のように十二話で三セットとなっていた可能性があり、巻一から巻三と同じ構成を持っていた確率が高いと考えられる。

一、慶安版巻四の所収説話

まず、巻四所収の十話のあらすじをまとめよう。

慶四(1)「三昧座主弟子得法華驗事」

僧義叡は熊野詣での途中で道に迷い、山中で不思議の聖と出逢った。三昧座主の弟子だった聖は山中に隠居し八十余年過ぎたが外見は若々しく、また、随侍の童子がいるだけでなく、夜中に鬼神のような様々な生き物が説経を聞きに来る。この種々の不思議について、聖は『法華経』の偈文を挙げて、経の験力と説明した。夜が明けて、聖が水瓶を飛ばし下山の案内とした。義叡は後にまた訪ねようとしたが、その地を見つけれなかった。

慶四(2)「浄蔵貴所飛鉢事」

「並ビナキ行人」である浄蔵は、比叡山において鉢を飛ばす行をしていたところ、三日間鉢が空のまま戻ってきた。自分の力よりも上回る人がいると思えず、驚いた浄蔵が真相を調べると、深山のなかに隠居する老僧の随侍童子の仕業だと分かった。老僧は童子を諫め、お詫びとして不思議の果実で浄蔵を歓待した。身体の不具合が解消し、力が付いた浄蔵は、後にこの老僧は「只人トハ見ヘザリキ誦誦仙人ナントノ類ヒニヤ」と語った。

慶四(3)「永心法橋憐乞児事」

僧永心が清水百日詣でに行く途中、泣き声を憐んで尋ねると、元天台僧が病気により河原に行かせられ、さらに先住者に酷使され苦しんで、「古へ世々ニイカナル逆罪ヲ作りテ、カ、ル報ヲ受ツラン」と思ったが、比叡山で学んだ『法華文句記』の「唯円教意、逆即是順、自余三教、逆順定故^②」という教えを思い出し、その

貴さに感涙したと語った。永心は「我一山ノ同法ニコソアリケレ」と気の毒と感じて、「逆即是順ナルヤウ、ネンゴロニヤ、久ク説聞セテ」別れた。

慶四(4)「叡実憐路頭病者事」

比叡山の叡実が天皇の病の祈祷に参上する途中で、「アヤシゲナル病人」を見た。天皇とこの非人とを「只同ジヤウニ覚ユル」上に、権力者の天皇と比べて、「此病者ニ至リテハ、イトヒキタナム人ノミアリテ、近ツキアツカフ人ハアルベカラス。若我ステ、サリナバ、ホトク寿モツキヌベシ」と考え、天皇の方へ参らず、路頭の病者を救おうとした。

慶四(5)「肥州僧妻為魔事」

① 肥後の国のある僧が晩年に至って妻を儲けたが、僧は病気になった時、妻に隠れて往生した。後に僧の死を知った妻が騒いで、自分が多生に渡って、夫婦の間柄になりこの人の往生を妨げたが、今逃したと言った。

② 「評」「是、一人ガ上ニアラズ。悪魔ノ、サリガタキ人トナリテ、二世ヲ妨ル事ハタレモ必ズアルベキ事也。

カレハ、此事ヲ心ニカケツ、ジタシキウトキワカズ、善ヲス、ムル人アラバ、仏菩薩コソサマク、形チヲ変ジテ人ヲ化度シ給へ、若化身カ若又其便カトムツマシク思ヒ、ツミヲ作ラセ功德ヲ妨テ、執ヲ留メン人ヲバ、生々世々ノ悪縁ト恐レテ、遠ザカラン事ヲ願フヘシ。大方、人ノ心ハ野ノ草ノ風ニ随ガ如シ。縁ニヨリテ、ナヒキヤスシ。タレカハ道心ナキ人ト云ヘド、仏ニ向ヒ奉リテ、掌ヲ合セザル。イカナル智者カハ、ニビタル形ヲ見テ、目ヲ悦バシメザル。彼浄蔵貴所ハ、日本第三ノ行人ナレド、アフミノ守ナガヨガムスメニ

契ヲ結ベリ。久米ノ仙人ハ、通ヲ得テ空ヲ飛アリキケレド、ケス女ノ物アラヒケルハギノ白カリケルニ、欲ヲ発シテ、仙ヲ退シテ只人トナリニケリ。今ノ世ニモ、手足ノ皮ヲハギテ、指ヲトボシ、ツメヲクダキ、サマクカタワヲサヘツケテ、仏道ヲ行フ人ハ、ソノ発心ノホド隠ナケレド、悪縁ニアヒテ、妻子ヲマウクルタメシ多カリ。我モ人モ凡夫ナレバ、タ、近ヅカヌニハシカヌ也」。

慶四(6)「玄賓係念亜相室事」

① 玄賓僧都が「ソコハカトナク」病となり、親交のあつた大納言が尋ねると、玄賓は大納言の北の方に一目惚れしたためと告白した。大納言は妻を説得し、玄賓との二人の面会を準備したが、玄賓は大納言の妻に触れることなく、やがて不浄観を行つて女性に対する欲を断つたという。

② 「釈」「カク云(観)ハ、人ノ身ノケガラハシキ事ヲ思トグナリ。諸ノ法、ミナ仏ノ御ヲシヘナレド、ギ、ドヲキ事ハヲロカナル心ニハヲコラズ。此観ニ至リテハ、目ニ見ヘ心ニシレリ。サトリヤスク思ヤスシ。『若、人ノ為ニモ愛著シ、自ラモ心アラン時ハ、必ス此相ヲ思ベシ』ト云リ」。

③ 「評」「大方、人ノ身ハ、ホネシ、ノアヤツリ、朽タル家ノ如シ。六府五蔵ノアリサマ、毒蛇ノワダカマルニコトナラズ。血ハ体ヲウルホシ、筋次目ヲヒカヘタリ。ワヅカニウスキ皮ヒトヘヲホヘル故ニ、此諸ノ不浄ヲカクセリ。粉ヲ施シ、タキ物ヲウツセド、誰カハ偽ルカザリトシラザル。海ニ求メ山ニエタル味モ一夜ヘヌレハ、悉ク不浄トナリヌ。イハゞ、エカケルカメニ糞穢ヲ入、クサリタルカバネニ錦ヲマトヘルカ如シ。若タトヒ、大海ヲ傾テアラフ共、キヨマルベカラス。若梅檀ヲタキテニホハストモ、久クカウバシカラ

ジ。況、タマシヒ去、^{イシチ}寿尽ヌル後ハ、空クツカノホトリニ捨ツベシ。身フクレクサリ乱レテ、終ニ白キカバ
ネトナリ。(又一生所愛ノ身ノハカナキ事、如レ此ノ。然レハ、^ミ悟リ有人ハ)真ノ相ヲ知故ニ念々ニ是ヲ厭ヒ、
『愚ナル者ハ、カリノ色ニフケリテ、心ヲマドハス事、タトヘバ、カウヤノ中ノ虫ノ、糞穢ヲ愛スルガ如シ』
ト云ヘリ。

慶四(7)「或女房臨終見魔変事」

① 或る女房が臨終の時、天魔が火車に乗る恐ろしげなるものや玉車に乗る天女や浄土に導くと言った僧などを偽って妨げようとしたが、女房は善知識の助言を聞き、至心に念仏して臨終正念で往生を遂げた。

② 「評①」「是モ、魔ノサマクニ形ヲカヘテ、タバカリケルニコソ」。

③ 「評②」「志シ有ン人、後世ヲ欣フホトノ人ハ、能々聞キ留テ、用心アルヘシ」。

慶四(8)「或人臨終不言遺恨事」

① 或る人が重病になり、善知識が呼ばれたが、病人は衰えていくにもかかわらず、死に至ると意識せず、寵愛する娘の掣取の準備を営んでいた。善知識は「イトアサマシクヲロカニモ有哉」と思ったが、憚って何も言わなかった。後に病がより悪化、遺言を残そうと様々に努力したができず、さらに病状が急に悪化し、善知識は念仏を勧めたが、ものも言えなくなり念仏もできない病人は、「大ニ驚ケル気色ニテ」亡くなった。「若ヲソロシキ物ナンドノ目ニ見」えたようである。

② 「評」「大方、人ノ死ヌルアリサマ、アハレニカナシキ事ヲホカリ。物ノ心シラン人ハ、ツネニヲハリヲ心

ニカケツ、苦ミスクナクシテ、善知識ニ合シ事ヲ仏菩薩ニ祈奉ルベシ。若アシキ病ヲウケツレバ、ソノ苦痛ニ責ラレテ、臨終思ヤウナラズ、ヲハリ正念ナラネバ、又一期ノ行ヒモヨシナク、善知識ノス、メモカナハズ。設ヒ若、臨終正念ナレドモ、善知識ノヲシフルナケレバ、又カイナシ。生涯タ、今ヲ限リト思ニ、恩愛ノ別レト云、名利ノ余執ト云、見ル物キク物ニフレツ、心肝ヲクダカズト云事ナシ。何ノ心ノヒマニカ、浄土ヲネガハントスル。然ヲ、念仏切ツモリ、運心年フカキ人ハ、加被ノ故ニ、ヲハリ正念ニシテ、必善知識ニアフ。耳ニハ誓願ノ外ノ事ヲキカズ、口ニハ称名ノ外ノ事ヲイハズ。最初、引撰ヲ期スレハ、妻子ノ別モノグサミヌ。五妙キヤウ界ヲ思ヘバ、エドノ執モアラズ。ス、口ニ進テ、ツキニ往生ヲトグル也。或ハ、『兼テ死期ヲシリ、心モトナク待事、国ヲ出ベキ人ノ、其日ヲ望ガ如シ』ナント云ヘリ。何況ヤ、聖衆ノ来迎ニ預リテ、楽ノ声ヲキ、妙ナル香ヲカキ、マサシク尊容ヲ見奉ル時、心ノ内ノタノシミ、説ツクスベカラズ。カ、レバ、タトヒ、道心スクナクトモ、ヲハリヲ恐レン為ニモ、イカ、往生ノ願ハザラン。「以下神宮本のみ」如此ノ道理ヲ聞ナカラ、万一不信ノ輩ラ是レ有ラハ、上件ノ死人躰ニ少モタカハシナ。可レ信」。

慶四(9)「武州入間河洪水事」

① 武蔵の国のある村の官首である男は洪水に遭って、郎等の意見を受け家族を捨てて、自ら泳いで命を助かろうとした。蛇にからみつかれるなど苦しんだが、強く神仏に祈り命を拾った。しかし、財産も村も家族もすべて失った。

② 「評」「カヤウノ事ヲキ、テモ、厭離ノ心ヲハ発スベシ。是ヲ人ノ上トテ、我、カ、ル事ニアフマジトハナ

ニノ故ニカモテ放ルベキ。身ハアダニ破ヤスキ身ナリ、世ハクルシミヲ集タル世ナリ。身ハアヤウケレドモ、争カ海山ヲカヨハザラン。海賊ヲソルベシトテ、ス、ロニ宝ヲスツベキニ非ス。況ヤ（世ニ）ツカヘテ、罪ヲツクリ、妻子ノ故ニ身ヲホロボスニツケテモ、難ニアフ事、数モ不^レ知。害ニアヘル故、マチくナリ。（所詮）只不退ノ国ニ生レヌルバカリナン、諸ノ苦ミニナン、アハサリケル。（以下神宮本のみ）イソヒテ、出要ヲ求ムヘシ⁽³⁾」。

慶四(10)「詣日吉社僧取弃死人事」⁽⁴⁾

或る僧が、日吉の社へ百日詣でをしているうちに、途中で母を失った女と出逢った。女を憐れんで、また「神人ヲ哀ミ給フ故ニ、濁ル世ニ跡ヲタレ給」うたことをも考え、女を助け彼女の母を葬ることにした。そして、穢れを心配したが、過去八十余日間の功を惜しんで、沐浴し百日詣でを続けた。かななぎに憑いて託宣をしていた十禅師権現（地藏菩薩の垂迹）は僧を呼び、小声でその善行を褒めた後、「物ヲイムコト」は「人ニ信ヲオコサセンガ為」の「カリノ方便」であると教え、「此事人ニカタルナ。愚ナル者ハ、ナンヂカ憐ノスグレタルニヨリ制スル事ヲバシラズ。ミダリニ是ヲ例トシテ、ワヅカニオコセル信モ又ミダレナントス。モロくノ事、人ニヨルベキ故ナリ」と戒めた。

慶安版卷四の第(1)・(2)話は、名僧（義叡と浄蔵）が深山の中で『法華経』の持経者、いわゆる読誦仙人と出会う話で、第(3)・(4)話には、ともに、僧が病弱者と出会い、それを憐れむシーンがある。第(5)・(6)話は、女色に惹かれた高僧が往生の障礙を乗り越えた話で、第(7)・(8)話はともに臨終と善智識とに関わる。ここまでの八話はそれぞれ

二話ずつ一対と考えられる。そして、脱落があると考えられる巻末部分について、第(9)話と第(10)話は主題の点では一対の説話と見られないが、「死穢」という要素を共有する。

二、第(1)話から第(4)話―読誦仙人と天台法華の救い―

慶安版巻四の巻頭三話は神宮本系統に見えないが、第(1)話と第(2)話は巻三巻末二話に現れた法華経要素を継承したと考えられ、第(3)話は第(4)話と明らかに一対の説話と指摘できる。従って、慶安版において、この三話はその前後の説話と関連性を持ち、もとより連続していたと考えられる。

巻四の第(1)・(2)話と巻三末話の「松室童子成仙事」は、「読誦仙人譚」の性格を持ち、『発心集』中やや特異と見られる話⁵⁾で、「原形本に存在していたか否かの疑問をいだかせる」という考え方もあるが、そうではないと考える。まず「松室童子」話は、前話の「親輔養児往生事」と子供が成仏・昇仙する話の一対であり、同巻第(9)・(10)話の老人の話と対照的な一セットとなっている。さらに、第(1)話のなかに、元三昧座主弟子が深山に隠居する由を語った後、「今ハ爰ニテオハラン事ヲ待也」と言った。つまり、この僧は経の験力によって、不老の身や天の諸童子の給仕などの靈験を得たとしても、往生を諦めていない。「読誦仙人」が怠らず誦経する姿も、彼らが期する最後は「往生」であることを示していると考えられる。従って、巻四巻頭部二話と巻三巻末話は一見異色のようであるが、往生への願いとは矛盾しないのである。

そして、複数の要素を有する説話によって説話主題の移転をはかる方法から考えれば、巻三巻末二話に現れた

法華経という要素は、次の説話群、つまり巻四の第(1)話から第(4)話の主題となるはずである。第(3)話に登場した永心法橋と「カタワ人」となった元天台僧は、『法華文句記』の文をよく知り、『法華経』をよく勉強していた。第(4)話の主人公の叡実については、本文では明確に示していないが、長明が『発心集』を編纂する時、源泉とした『法華験記』『続本朝往生伝』によれば、叡実は法華経持者として名高く、様々な靈験譚があるという。従って、巻四の第(3)と第(4)話も『法華経』との関連性が見出せる。

では、法華要素を継承した巻四巻頭部四話は、一体何を表現したいのか。この四話を振り返って見れば、第(1)・(2)話の読誦仙人の話は特に法華経靈験譚の傾向が強いが、第(3)話と第(4)話、特に第(3)話は山本一氏が指摘されたように、類話の「智海法印癩人法談事」という「化人譚」とは異なっており、「神秘の影はなく」、「現実的性格」を持っている⁷⁶。これと合わせて考えれば、叡実の法華持者身分が記されていないことは、この四話をめぐって靈験譚意識を過剰にさせないためであろうと考える。

長明は『発心集』を編纂する時、彼の独自の視線を持っていると言える。例えば、巻一の第(8)話「佐国愛花成蝶事」の末尾には僧幸仙の話を付す。

又六波羅蜜寺ノ住僧幸仙ト云ケル者八年来道心深カリケルカ、橘ノ木ヲ愛シ、イサ、カ彼執心ニヨリテクチナワト成テ、彼木ノ下ニソ住ミケル。委クハ伝ニアリ。

この話は、長明が出典を提示した『拾遺往生伝』以外、『法華験記』にも記された。共に、執着によって蛇身を受けた僧が『法華経』読誦の力を通して救われた話である。つまり、法華経靈験を主題とする話である。しかし、

長明はこの話を採る時、幸仙が救われたことについて一切触れず、蛇身を受けたところにとどめた。この話は巻一第2セットの「断執散執」グループに属し、さらに第八話に配され、「自ラ改ムル媒」とするため、わざと救われたことに触れないことがわかる。つまり、長明は出典の記述をそのまま継承するのではなく、自分が強調したい主題に邪魔になるような部分を省く傾向が見える。

では、巻四巻頭部四話の主題は「法華経」の「靈驗」でなければ、「法華」の「何」の特質に注目したいのか。この疑問を解くには、やはり第(3)・(4)話はその手掛かりとなると考える。

第(3)・(4)話はともに、僧が外出途中で病人と出会って、憐れむ心によって病者を助けたシーンがあるが、第(3)話の重心は明らかに永心の憐れむ心ではなく、苦しみを受けている「カタワ人」の心が、天台法華の教えにより救われたことと、永心がその経歴を聞いて仏法の貴さに感動したことにある。

そして、第(4)話のなかで、叡実が路頭の病者の世話をした場面だけを記したが、叡実の「若我ステ、サリナバ、ホトく、寿モツキヌベシ」という言葉、そして、明記していないが叡実の法華経持者であることを含めて考えれば、第(4)話のなかの病者も叡実の法華持経者の験力によって治されることが当然なことであろう。

叡実の看病が主に肉体上の救済であることとは逆に、永心と出会った元天台僧が自身の境遇を考え、「逆即是順」という天台教義に感涙したことと、永心が「逆即是順ナルヤウネンゴロニヤ、久ク説聞セ」ることは、心即ち精神上の救済であると考えてよいであろう。肉体上としても精神上としても、持経者の験力としても、教義としても、天台法華の救いであることには違いない。

では、天台法華の救いを説く第(3)・(4)話は、「読誦仙人譚」の性格を持つ第(1)・(2)話とは、どのような関係を持っているのか。ここに、池田敬子氏が指摘された、「読誦仙の清浄世界」と病穢の「不浄世界」の対照性を思い出す。確かに、「カタワ人」になった元天台僧でも、叡実が救おうとした「アヤシゲナル病人」でも、市中から追放される対象であり、当時の観点から見れば共に穢れた存在である。

次に、第(1)・(2)話のなかの、読誦仙人が住む「清浄世界」を検討しよう。まずは卷三卷末話の「松室童子成仏事」に戻って見たい。童子が寺院から離れて深山に行ったのは、『法華経』の力により読誦仙人になったため、世間の穢れに堪えられなくなったのである。この事情と合わせて考えれば、第(1)・(2)話の二人の読誦仙人が住むところも同じく世間の穢れと離れている「清浄世界」であるに違いない。

また、第(1)話のなかで、こういう場面もある。

即サマ^(く)ノ形シタル鬼神、諸ノタケキケダモノ、数モ不^レ知集ル。馬面ナルモアリ、牛ニ似タルモアリ。又鳥ノカシラナルモアリ、鹿ノ形ナルモアリ。各々香花ノ如ク。クダ物ノ類ヒ、諸ノ飯食ヲ捧テ、松ノ庭ニ高キ机ヲ立テ、ソノ上ニ置ツ、掌ヲ合テ敬ヒ^(カ)ヲカミテヒラビキヌ。此中ニ、或ル輩ノ云、「アヤシキ哉、常ニ似ズ。人間ノケアリ」。又或ガ云、「何人カ爰ニ来ラン」ト云。

義叡が仙人の指示に従って、聴法の鬼神が来る前に隠れたのに、その人間の気が鬼神に察知されたのである。逆に考えれば、義叡がこの地に来るまで、この地は確かに「人間ノケヲ離テ」、完全な「清浄世界」であった。

さらに注意したいのは、第(1)話と第(2)話に現れた「食物」である。「味ノ妙ナル事、人間ノ食ニアラズ」と考え

られる食物について、特に第(2)話では、その効力を強調した。淨蔵は「ワヅカニ一菓ヲクフニ、身モ冷ニ、力ツキテナン覚ヘケル」。『法華経』の力によって読誦仙人の身の回りに随侍する童子が出した果物、それが持っている不思議な力も当然『法華経』に拠るのであろう。また、身体の不具合を治すことができ、ある意味で病穢を除去する機能があると言える。確かに、第(1)話のなかで、読誦仙人が唱えた『法華経』「薬王菩薩本事品」の偈文「得聞是経、病即消滅、不老不死」のように、『法華経』は「病穢」を消滅する、いわば「浄化」の力を持っていると言える。このことから考えれば、第(3)・(4)話の「カタワ人」と「アヤシゲナル病人」のような「穢れた存在」に対する救いも「浄化」であると言える。

即ち、巻四の第(1)話から第(4)話は、それぞれ二話ずつ対となっている上に、「天台法華の清浄と浄化」（＝穢れに対する救い）をめぐる一グループであると考えられる。

三、第(5)話から第(8)話―「魔」の妨げと「魔」の対治―

慶安版巻四第(5)話「肥州僧妻為魔事」は、『拾遺往生伝』下所収の「肥後国聖人」を出典とする。出典の原文には「魔」という言葉は現れていないが、『発心集』では、「悪魔ノサリガタキ人トナリテニ世ヲ妨ル事ハ、タレモ必ズアルベキ事也」と指摘し、それをめぐって様々に論じている。さらに、第(7)話には、「是モ、魔ノサマクニ形ヲカヘテ、タバカリケルニコソ」という文が見え、編者が「魔の妨げ」を強調する姿勢を示している。

この二話に現れた「魔」あるいは「悪魔」とは、欲界の六欲天の最高位の他化自在天を司る第六天魔王とその

眷属であると推定できる。

長明よりやや早い時代に成立した『宝物集』においては、第六天魔王が「往生」を妨げる理由について、次のように述べられる。

一人出家すれば、第六天の魔王の宮殿、震動するなり。…中略…人いまだ出家をせざる時は、魔王の奴婢なり。出家の後は、仏の御弟子となりて、ながく魔王の奴婢をはなるゝなり。たとへば、国に凶あらんとては、その国の大地、震動するがごとし。魔王も、ながく奴婢をうしなふがゆへに、出家するものあれば、魔宮震動するなり。⁸⁾

さらに、『平家物語』には、

第六天ノ魔王ト云外道ハ、欲界ノ六天ヲ我物ト鎮テ、此内ノ衆生ノ生死ヲ離ル事ヲ惜テ、廻⁹⁾諸方便¹⁰⁾、或ハ妻ト成リ、或ハ夫ト成テ是ヲ障フ

という記述があり、この第六天魔王が往生を妨げるといふ認識は、長明以前の時代から彼以降の時代まで伝わっていたことがわかる。

ところで、第(6)話には第六天魔王とその眷属の存在は見えない。第六話のなかで、一回会うだけで高僧の心を惹いた北の方の魅力は、魔力のような存在だと言えるが、北の方は魔が変じた女性であるとは断言できない。第(8)話の本文にも「魔」の存在を明示していないが、ここでは「魔」の動きが察知できる。第(8)話の病人の臨終時は「大キニ驚ク気色」であり、「若ヲソロシキ物ナンドノ目ニ見」えたようであった。これは、第(7)話の女房の、

最初に魔の変化を見たところの様子と似ていて、病人が「魔」を見たときと推測できる。しかし、「魔の妨げ」を強調する第(5)話と第(7)話に挟まれた第(6)話は、「魔」とは無関係であるとすれば、聊か不自然である。この疑問を解くには、長明が座右に置いた『往生要集』の記述を挙げたい。『往生要集』大文第五「助念方法」のなかに「対治魔事」という項があり、「魔」について次のように書かれている。

種種魔事能障正道。或令發病患。或令失觀念。或令得邪法。所謂若有見若無見。若明了若昏闇。若邪定若攀緣。若悲若喜。若苦若樂。若禍若福。若惡若善。若憎人若戀著。若心強若心軟。如是等事。若過若不及。皆是魔事悉障正道。

これによれば、第六天魔王でも、道心を動揺させる感情などでも、「往生」を妨げる「もの」は、すべて「魔」である。また、「或令發病患。或令失觀念」という文と、第(8)話の病人の死の直前、話もできず、手も動かなかった状態を含めて考えれば、「魔」の存在を確かめることができる。従って、第(5)話から第(8)話はすべて往生を妨げる「魔」、つまり「往生の魔障」に関する話である。

では、往生を遂げるため、この「往生の魔障」に対し、どのように対応すればよいのであろうか。同じく『往生要集』「対治魔事」において、

治道雖多。今但應依念佛一治。此中亦有事理。一事念者。言行相應一心念佛時。諸惡魔不能沮壞。という文から、「念仏」をはじめとして、様々な対治方法があることがわかる。

そして、慶安版巻四のこの四話を見れば、第(5)話では、僧は臨終の事を魔が変じた妻に伝えず、修行のため別

に造った屋で往生を遂げた。第(6)話で、玄賓は大納言の北の方に会いに行ったが、やはり近く寄らず、不浄観を通して念を断った。「不浄観」については、『往生要集』大文第一「厭離穢土」のなかの、「人道」の「不浄相」に関する記述を踏まえて、長明が同じ第(6)話において、次のように解説している。

カク云（観）ハ、人ノ身ノケガラハシキ事ヲ思トグナリ。諸ノ法、ミナ仏ノ御ヲシヘナレド、ギ（キ）、ド（ト）ヲキ事ハヲロカナル心ニハヨコラズ。此観ニ至リテハ、目ニ見ヘ心ニシレリ。サトリヤスク思ヤスシ。若人ノ為ニモ愛著シ自ラモ心アラン時ハ、必ス此相ヲ思ベシト云リ。大方、人ノ身ハホネシ、ノアヤツリ、朽タル家ノ如シ。六府五蔵ノアリサマ、毒蛇ノワダカマルニコトナラズ。血ハ体ヲウルホシ。筋次目ヲヒカヘタリ。ワヅカニウスキ皮ヒトヘヲホヘル故ニ、此諸ノ不浄ヲカクセリ。粉ヲ施シ、タキ物ヲウツセド、誰カハ偽ルカザリトシラザル。…中略…然レハ悟リ有人ハ、真ノ相ヲ知故ニ念々ニ是ヲ厭ヒ、愚ナル者ハ、カリノ色ニフケリテ心ヲマドハス事、タトヘバ、カウヤノ中ノ虫ノ糞穢ヲ愛スルガ如シト云ヘリ。

「魔」あるいは「魔」となり得るもの（異性の魔力とか）から脱出することについて、特に「不浄観」、つまり、人体の「穢れ」を見抜くことで、「愛着」を断ち、「往生の魔障」を遠ざけるといふ方法を勧めている。この評と話自体の間に、「不浄ヲ観ジテ、其執ヲヒルガヘスナルベシ」といふ文がある。この「ベシ」といふ語については、玄賓の「不浄観」は編者の推測だけであるという説もあるが、玄賓が大納言の屋敷に行く時、「イト事ウルハシク法服タタシクシテ」いることから、玄賓が僧の自覚を持って行くことが分かる。ここの「ベシ」は「に違いない」と解釈すべきであろう。さらに、玄賓が北の方に「近クヨル事ナク」観ずる時、「弾指ヲゾ度々」した。「弾指」

は僧にとって、警告や懺悔の意味を持つという。従って、玄賓は「不浄観」を行いながら、「弾指」で、女色に動揺した自分に警告して懺悔したのである。そして、次の第(7)話と第(8)話に現れた方法は、源信が一番勧める「念仏」である。第(7)話では、女房が魔の種々の変化を見て戸惑う時、善知識の僧は「念仏」のみを勧めた。第(8)話において、善知識が最後「念仏ス、ムレド」、病人はすでにものを言えない状態になっていて、「言行相應一心念佛」ができないので、「云甲斐ナキ」ことになってしまった。善知識の優柔不断によって病人が往生できなかったのである。

第(5)話から第(8)話においては、「往生の魔障」を説く一方、対治方法として、「魔を遠ざける」とことと「念仏」との二つの道が示された。特に人に対する「愛着」については、「不浄観」という具体的な方法を勧めているのである。

四、第(9)話と第(10)話をめぐって

ここまで検討した結果、慶安版巻四の第(1)話から第(8)話までは、第一章でまとめた巻構成を満足し、巻一から巻三と同じ様相が見えることがわかる。ただし、巻末二話―第(9)話と第(10)話―について、まだ疑問が残っている。

(一) 第(9)話「武州入間河洪水事」をめぐって

前にも述べたように、慶安版巻四の第(4)話から第(9)話は、神宮本と共通する連続説話群で、長明元来の編纂の

ままである可能性は極めて高い。さらに、第(9)話は評の

カヤウノ事ヲキ、テモ、厭離ノ心ヲハ発スベシ。是ヲ人ノ上トテ、我カ、ル事ニアフマジトハナニノ故ニカ
モテ放ルベキ。身ハアダニ破ヤスキ身ナリ、世ハクルシミヲ集タル世ナリ。身ハアヤウケレドモ、争カ海山
ヲカヨハザラン。海賊ヲソルベシトテ、ス、ロニ宝ヲスツベキニ非ス。況ヤ(世ニ)ツカヘテ、罪ヲツクリ、
妻子ノ故ニ身ヲホロボスニツケテモ、難ニアフ事、数モ不^レ知。害ニアヘル故、マチクナリ。(所詮)只不

退ノ国ニ生レヌルバカリナン、諸ノ苦ミニナン、アハサリケル。(以下神宮本のみ)イソヒテ出要ヲ求ムヘシ

が示す通り、世間の無常を説きながら、濁世から離れ浄土に往生することを願うべしと主張する一方、「妻子ノ故ニ身ヲホロボスニツケテモ、難ニアフ事、数モ不^レ知」という文は、明らかに第2セットに論じられた、「執ヲ留メン人」という「往生の魔障」——特に妻子をいう——を踏まえたものである。また、濁世を厭離すべきという主張は、第1セットに現れた「清浄と浄化」という主題にもある程度関連性が見える。故に、この一話は第(8)話に続き、第3セットの先頭にあたる可能性は否定できない。ただし、第(10)話については、「穢れ」に触れた僧がその慈悲心を十禅師権現に褒められた話で、「穢れ」という要素から見れば、前の説話とは完全に無関係ではないが、直前の第(9)話との関連性もかなり薄く、その間には一話ないし数話の脱落があると考ええる。これは、『発心集』の際に何かの事情によって散佚したか、後人の手により削除されたか、その原因は容易に判断できないが、『発心集』の巻四は、もともと表一に示すように、十二話で「二対四話一セット」構成様式に従う三つのセットに分かれ、且つ第(8)話に「往生失敗譚」を配する形であったと考えてよいであろう。そして、現段階において、慶安版

卷四の第(1)話から第(8)話までは長明の元来の編纂であると推定できて、第(9)話の位置も妥当であると結論してよいと考える。また、この一話に見られる「濁世を厭離すべし」という主張は、第3セットの主題を提示するとも思われる。但し、現段階では、この一話と緊密な関連性を持ち、一対と見られるものはまだ見当たらない。

(二) 第(10)話「詣日吉社僧取棄死人事」

第(10)話「詣日吉社僧取棄死人事」と一対になる一話を探すには、築瀬氏や山口氏の指摘によれば、『発心集』の説話順に従って説話を書き込んだと考えられる『私聚百因縁集』はその鍵となる。

『私聚百因縁集』のなかに、日吉詣での僧の話のすぐ後の説話「成通卿家山王咎忌事」の原話の、神宮本独自説話「侍従大納言ノ家ニ山王不浄ノ咎メノ事」は、神宮本では卷四の第(2)話にあたる。そして、「詣日吉社僧」話は神宮本では卷四の第(3)話にあたり、この二話は『発心集』神宮本でも『私聚百因縁集』でも二話連続の形であるとわかる。両書において、この二話の前後順は逆であるが、『私聚百因縁集』は『発心集』の二系統分化の前に成立したことで、『私聚百因縁集』は『発心集』の説話順に従ったという推測より、「山王不浄ノ咎メ」話が「詣日吉社僧」話の前にあるのは原形であると考えたいのである。では、説話内容の考察に入ろう。

「詣日吉社僧」話には、僧が憐れみの心に従って葬事を手伝ったことについて、山王上七社の十禅師の権現が死穢を心配する僧を慰める時、「人ニ信ヲオコサセンガ為ナレバ、物ヲイムコトモ又、カリノ方便ナリ」と言った。そして、「山王不浄ノ咎メ」話も十禅師を背景とした話である。侍従大納言の病気のため、僧已講がその家に居て

作法をしていた時、十禅師の権現が現れて、大納言の家に不浄のことがあるので咎めに来たと言った。この一話の不浄、つまり穢れを咎めることと、日吉詣での僧が死穢と接触したにもかかわらず褒められたことは、一見、姿勢が全く両極的なものであり、両話の主旨は矛盾しているようであるが、実際そうではない。

「山王不浄ノ咎メ」話のなかに、已講の、物忌は仮の便りであるという反論に対し、十禅師の権現が

俱舎ノ頌ト云物ヲ読ゾカシナ。其ノ初メニ、「諸一切種諸冥滅、拔衆生出生死泥」ト云ヘリ。生死ノ泥ヲバ、厭フベシトコソ見ヘタレ。五時ノ教義ニ随テ、趣キ異ナレドモ、生死ヲ厭フ教ヘニ至リテハ、一切ノ経論、皆同ジ心也。然ルニ、諸ノ衆生愚ニシテ、空ク往キ反リスルヲ見レバ、生ル、モ悪ク、死スルモ悪キ也。是ニ依リテ、衆生ヲ助ケンガ為ニ跡ヲ垂タレドモ、猶ヲ生死ヲバ忌メト禁メタル也

と、泥のような現世に生きること、死して輪廻し続けることを忌むのは濁世を厭うためである。従って、「物忌」は、衆生を輪廻から救おうとするため、衆生を「厭離」の心を生じさせるための手段である。そして、「詣日吉社僧」話を顧みれば、十禅師の権現が僧を褒めた後、また諫めて、

タ、此事、人カタルナ。愚ナル者ハ、ナンヂカ憐ノスグレタルニヨリ、制スル事ヲバシラズ、ミダリニ是ヲ例トシテ、ワヅカニオコセル信モ又ミダレナントス。モロくノ事、人ニヨルベキ故ナリ

と言ったことも、同じ考えを示している。従って、この二話は緊密に繋げられ、「濁世を厭離すべし」という点は、第(9)話の「武州洪水」話の主張とは重なる。

右の観点に基づき、神宮本独自説話の「侍従大納言ノ家ニ山王不浄ノ咎メノ事」を『発心集』巻四の第3セツ

トに配置することは合理的であると考えてよいのであろう。また、前にも論じたように、『私聚百因縁集』は分化前の『発心集』の説話順によることと、神宮本には説話の先後順は逆になった例も少なくないので、因縁集の順序を参考して、『発心集』巻四の実際の第(11)話は「詣日吉社僧取棄死人事」であり、実第(12)話は神宮本独自説話の「侍従大納言ノ家ニ山王不浄ノ咎メノ事」であると推定できる。

これで、第(9)話と一対である話はまだ見当たらないが、巻四の第3セットの主題は「穢土を遠離すべし」と想定できる。

そして、巻四三セットの主題関連性について、第1セットの「天台法華の清浄・浄化」の対象の、俗世も病穢も穢れる存在であり、第2セットの「往生の魔障の対治」は、浄土に往生するためであり、穢土から離れるためである。第3セットの「穢土を厭離すべし」とを合わせて考えると、巻四にある三つのセットから「厭離穢土」という大きなテーマが読み取れる。この様相は、明らかに巻一・巻二・巻三の説話配列と同様のものであると見られ、長明の『発心集』編纂方針が貫かれていると考えられる。

註

- (1) 築瀬一雄『発心集研究』（築瀬一雄著作集三）（加藤中道館、一九七五年五月）、山口真琴「異本発心集神明説話をめぐる諸問題」（『国文学攷』九二巻 一九八二年一二月）
- (2) 慶安版の原文は「唯円教意、逆即是順、自余三教、逆順是故」である。『大正新修大蔵経』等により訂正。
- (3) 慶安版は「沈水」である。神宮本により訂正した。「沈水」について、『日本国語大辞典』には二つの解釈がある。一つは、

沈香という木またその木からとった香料を言い、「じんすい」と読む。もう一つは、「水に沈むこと。沈没すること」の意で、「ちんすい」と読む。後者の解釈は、一見、「武州入間河」話の内容と関連があるようだが、話のなかには何か沈没したなどの場面がない。さらに、「沈水」の用例は十七世紀のものしかないようで、神宮本の「洪水」の方が正しい、「沈」は「洪」の誤写であろう。

- (4) 慶安版は「取奇」である。「奇」は「弃」の誤字であると考えられ、神宮本により訂正。
- (5) 山本一「『発心集』巻四巻頭部の意味」(『金沢大学語学・文学研究』一七卷 一九八八年一月)
- (6) 廣田哲通「発心集の説話配列」(『女子大文学』一九七六年三月)
- (7) 同注(3)。
- (8) 池田敬子「『発心集』の旅路―説話配列解釈の試み―」(『説話論集』第十七集 二〇〇八年五月)
- (9) 小泉弘・小島孝之等編『宝物集 閑居友 比良山古人霊託』(岩波書店、新日本古典文学大系40一九九三年十一月) 167頁
- (10) 北原保雄・小川栄一編『延慶本平家物語 本文篇下』(勉誠社、一九九〇年六月)
- (11) 『往生要集』の本文引用は『大正新修大藏経』による。下同。
- (12) 「弾指」について、『法華経』如來神力品第二十一には「釋迦牟尼佛及寶樹下諸佛。現神力時滿百千歳。然後還攝舌相。一時警效俱共彈指」があり、嘉祥大師吉蔵の『法華義疏』では「警咳令聞令覺悟。是故彈指」と解釈し、『織田仏教大辞典』では「警告の為」と説明した。また、『日本国現報善惡靈異記』下・三十八には、「彈指する者は、罪を滅し、福を得るなり」という記述がある。

第二節 卷五の構成検証

慶安版『発心集』の卷五には、十五の説話が収められている。そのうち、第(2)・(6)・(7)・(8)・(9)話の五話は神宮本系統には見えず、慶安版の独自説話が一卷の三分の一を占めていることになる。この割合は巻四に類似しているが、巻四の共通説話七話のうち、六話が神宮本においても同じ配列で連続しているのに対し、巻五では、共通説話十話の神宮本における配列はばらばらである。神宮本においても同じ配列で連続しているのは、第(3)・(4)話と第(10)・(11)話しかない。とはいえ、共通説話のみで構成する巻二・三においても、神宮本と同様あるいは近似の配列が指摘できるのは二三箇所しかないので、巻五は、巻四ほどの安定性には及ばないと言っても、ある程度長明編纂当初の様子を反映していると考えられる。

一、慶安版巻五の所収説話

まず、各説話のあらすじを記しておく。

慶五(1)「唐房法橋発心事」

①所の雑色源国輔は、本意なく別れた恋人と再会したが、女はすでに両眼を失っていた。その経緯を聞いた国輔は無常を悟り出家し、後に唐房の法橋行円として知られた。

②天台山門派の檀那僧都覚運が、比叡山の辺りで迷っている国輔を見て、出家志願者であると見抜いた。後に、国輔が寺門派に入ったことを知り、残念だと嘆いた。

③ 師の慶祚が行田を試すため、千秋万歳の舞を舞わせた。行田は平気で承諾し、目出度く舞を舞った。師は「定テキナヒスラントコソ思ヒツルニ、マコトノ道心者ナリケリ。イトタウトシ」と褒めた。

慶五(2) 「伊家^并妾頓死往生事」 ◆

ある女が自分を捨てた男と再会した時、男からいろいろと語りかけられたが応じず、『法華経』を読み続けて、「於此命終即往安樂世界阿弥陀仏」という部分を繰り返して眠るように亡くなった。人が普段罪深い習いとして扱う「恋」を「往生の縁」として往生できたという。

慶五(3) 「母妬女手指成蛇事」

若い夫を前の夫との娘と結婚させた母は、娘と若い元夫に対する嫉妬のため、両手の親指が蛇になった。娘と若い元夫はこのことを相次いで知り出家し、母も出家した。三人ともに懺悔・修行して、母の指はようやくもとに戻った。

慶五(4) 「亡妻現身帰来夫家事」

① 亡くなった妻の「今一度アリシナガラノ姿ヲ見」たいという夫の念願に応じて、或る夜、妻が生っていた時の姿で帰ってきた。(「神宮本のみ」「モロトモニ輪廻ノ業アサマシキ事共也。」) 小野篁のような立派な人でも、亡くなった恋人の声しか聞こえなかったのに、不思議なことである。

② かげろふという虫の妻夫を各々銭に乾し付け、朝に市に出て違う人に渡しても、夕方になれば、二つの銭は必ず同じ人の手に渡り、一緒になる。「我等、フカキ志ヲイタシテ『仏法ニ値遇シ奉ラン』ト願ハ、ナ

ジカハカケロウノ契リニコトナラン。タトヒ業ニヒカレテ思ハヌ道ニ入トモ、折々ニハ、必ズアラハレテス
クヒ給フベシ」。

慶五(5)「不動持者生牛事」

不動明王が、「生々而加護」という誓願の通り、牛に生まれ変わった不動持者を見捨てずに、重荷に苦しむ牛を助けるという夢を見た僧は、現実にその牛を見て、牛に餌をやった。

慶五(6)「少納言公経依先世願作河内寺事」◆

豊かな国の守になれば寺を造ると願ったが、河内国守となったので、古寺の修理ぐらいでいいと思った公経は、河内のある古寺の仏座の下に、公経という僧が来世河内国の守となりこの寺を修理しようという内容の、現在の自分と同筆で書かれた願文を発見した。前世の因縁を知り、心を致して修理した。前世と今生に同じ名前であることは伏見の修理大夫俊綱と同じである。

慶五(7)「少納言統理遁世事」◆

少納言藤原統理は満月を見て発心し、関白を訪ねて、志を告白し、僧賀上人の所で出家したが、出産に近い女を心配してきちんと修行できなかつた。僧賀上人が都に上つてその産婦を助けたことよって修行に専念できるはずだったが、仕えていた三条天皇のことも忘れられず、和歌を奉った。後に返歌をもらって泣く統理に対し、師の僧賀上人は「この心にては、いかでか生死を離れんぞ」と恥ずかしめた。

慶五(8)「中納言顯基出家籠居事」◆

① 中納言源顕基は、若い時より仏道を願ひ、また数寄人としての心もある。後一條天皇が亡くなられた時「忠臣ハ二君ツカヘズ」と新君に参らず出家した。

② 横川に籠居していた時、上東門院が安否をたずねられた際、和歌を奉った。

③ 大原で修行していた時、その貴さを知った「一ノ人」が訪ねてきて、一晚中話を交わして、後世のことを頼んだ。別れる時、顕基は「俊実ハ不覚ノ者ニテ侍ナリ」と言った。「一ノ人」は後に、顕基が息子俊実を心配しつつも直接には頼めなかった心情に気づいて、その息子を出世させた。

慶五(9)「成信重家同時出家事」◆

成信中将と重家少将は同時に発心し、一緒に出家すると約束した。成信は予定通り慶祚のもとで出家した。重家は父の許可をもらうため、予定より遅れたが、約束の時間に自ら元結を切って後に三井寺に向かった。

慶五(10)「花園左府詣八幡祈往生事」

花園左大臣源有仁は「近キ王孫」で才智兼備であった。正装して歩行で石清水八幡宮へ七夜詣でたことがあった。八幡大菩薩は応神天皇であったことから、子息のない有仁は血筋の継続を望むのであろうと他人が疑ったが、実際に願ったのは「臨終正念往生極楽」であった。

慶五(11)「目上人参法成寺供養堅固道心事」

① 法成寺落慶供養に、河内国の目上人という僧が参り、宇治殿頼通の容姿を見て素晴らしいと感じたが、天皇の威勢を拝見し、さらに素晴らしいと思ひ、最後に天皇が仏に礼拝するのを見て、やはり仏こそが一番尊

い存在であると再認識して、道心を固めた。

②^慶 「評」 「彼妙莊嚴王ノタグヒニコトナラズ。イト賢キ思ヒハカリナルベシ」。

②^神 「評」 「妙莊嚴王ノタクヒニモ、最ト賢キ思ヒナリケリ。カクコソ発心・道心ハ堅メタルモノナレ。可恥之」。

慶五(12) 「乞児物語事」

① 或る上人が、他人の幸運を羨む乞児達の会話を聞いて笑ったが、後に、仏菩薩が我々のことを御覧になる時も同じ感覚であろうと自分を恥ずかしく思った。

② 八十余歳でいつ死んでもおかしくない年齢の翁が往生を願わず、三年上の上臈の職を継ぐことをのみ望んだ。

③ 「露ノモノ貴賤ヲウレヘ、心ヲナヤマシ、名利ヲワシル」のは、処刑場に赴く途中に、棘をよけて踏まないようにした死刑囚の行為と同じく愚かである。

④ 長寿の人間としても、天人から見れば、ひおむしの寿命のようようである。絶対的な長寿はない。

⑤ 三井寺の禅仁が法印になった時、六欲天と四禅天の王が備えている「法印」——仏法の徳を示す標識——と比べて、日本で「法印」という「階」をもらったことはいはいたことではないと言った。

⑥ 「総評」 末世の人にとって、極楽は我が分を越えた存在であるため、「ネガハヌハキハメタルコトハリ」であるといえども、「生々世々ニツトメタリケル余波トシテ、イカニモ近ケル事トタノモシク思フ」べし。

慶五(13) 「貧男好差函事」

家を持たない貧しい男が、不要な古い紙をもらい、家作りを空想して指図をかくことで心を慰めてきた。現実の建物に悩まされる人に比べれば、紙の上の家を想像するのは罪がないが、同じ願うなら浄土を願うべきである。

慶五(14)「勤操憐栄好事」

大安寺栄好は、寺の毎日の食事を分けて母を養っていた。彼が急死し、隣の勤操が憐れんで、代わりに栄好の母に食事を送っていた。或る日、栄好の母は子の死を知り、余りの嘆きに急死した。勤操は、栄好の母の供養をし、法華八講を開いた。

慶五(15)「正算僧都母為子志深事」

① 正算僧都が貧しくて西塔の大林に住んでいた時、大雪の冬があった。子の窮境を推測した母は髪の毛を切り売って食料等を送らせた。正算は使いの男からそのことを知り感涙した。

② 畜生の親心。畜生さえ貴い親心を持つ。

この十五話のうち、第(1)・(2)話とともに別れた恋人同士が再会した話で、第(1)話では男、第(2)話では女が仏道に入った。そして、第(3)・(4)話は、両話とも不思議譚の性格を持ち、第(1)・(2)話と同様に男女愛との関わりが見出せる。次の第(5)・(6)話はともに前世今生の話であり、誓願に関する部分は第(4)話にある評とも繋がっている。そして、第(7)・(10)話はすべて貴族道心譚ということ可能である。そのうち、第(7)・(8)話は相似の構造を持っている

て、貴族の発心・出家で始めて、彼らの出家後の俗世との関わりを語り、出家したが俗世の情愛を完全に切り捨てられないことで話を終える。第(9)・(10)話では、元皇族や右大臣の息子などの、出世ができるはずの人々が後世のことを願う。そして、次の第(11)・(12)・(13)話はともに身分の低い人に注目するが、第(11)話の目聖の「猶シ仏ゾ上モナクオハシマシケル」と、第(12)・(13)話のなかの「浄土を願うべし」という勧めは、第(9)・(10)話と照応すると考えられる。そして、最後の第(14)・(15)話は僧である子とその母との話であり、僧の家族との絆という点で第(7)・(8)話と関連性があるようである。

この十五話は内容から見れば、おおまかに以下のようにまとめることができる。

- ① 愛執と仏道 (第(1)話・第(2)話・第(3)話・**第(4)話**)
- ② 誓願不思議 (**第(4)話**・第(5)話・第(6)話)
- ③ 貴族道心譚 (第(7)話・第(8)話・第(9)話・第(10)話)
- ④ 浄土を願うべき事 (第(11)話・第(12)話・第(13)話)
- ⑤ 僧である子とその母 (第(14)話・第(15)話)

第(4)話の「亡妻現身」話は両系統の本文異同によって、「愛執の恐ろしき」と「誓願の不思議」との二つの完全に異なる方向への解釈ができ、①か②か、どの説話グループに属すべきか、容易に判断できないが、慶安版巻五の所収十五話は五つの説話グループに分けられ、全体的に、表1に示した巻構成を満足していないことがわかる。とはいえ、部分的には「二対四話一セット」構成様式を満足する、あるいはそれに近い部分もある。

但し、この十五話のなかで、独自説話である第(2)話及び第(6)～(9)話のような、長明の手によって採用されたかどうかまだ疑問のあるものがあり、そのうち、さらに第(2)話「伊家_并妾頓死往生事」は題名と本文との間に齟齬がある。また、第(4)話「亡妻現身帰来夫家事」は共通説話であるが、両系統本文の異同が全く逆の説話解釈をもたらすことなどの問題点がある。そして、隣接説話の関連性についても、疑問のある部分が多い。

では、これらの説話及び配列における疑問点をめぐって、巻五所収諸話を詳しく検討しよう。

二、第(2)・(4)・(11)話―説話自体における諸問題―

(一) 第(2)話「伊家_并妾」話の本文齟齬問題

第(2)話「伊家_并妾頓死往生事」の題には「伊家」という人物の名を挙げてある。しかし、本文中では、

男トハ、ナニガシノ、弁トカヤ聞シカド、名ハワスレ、ニケリ、

と記している。また、題によれば、男も女も、二人が往生したはずであるが、話のなかで、往生したのは女だけである。この二点について、後者に関しては、「伊家_并妾」は「伊家_ガ妾」の誤りであると解釈することが可能であるが、前者については、簡単に誤写であると解釈できない。廣田哲通氏が指摘された通り、題は後に付けられたのか、もとの本文が逸失し、後の時代に誰かが類話を補入したか、複数の可能性がある。²⁰従って、この一話は、長明原撰でない可能性もあるのである。

現在見られる書物のなかに、この一話と同類関係を持つ説話は三話ある。²¹『発心集』を含めておおむね成立順に

並べると

『今昔物語集』 卷三十一(7) 「右少弁師家朝臣值女死語」

『今鏡』 卷十 「敷島の打聞」

『発心集』慶安版 卷五(2) 「伊家^并妾頓死往生事」

『雑談集』 卷四(8) 「恋故往生事 法華往生事」

となる。この四つの説話の本文を比較した対照結果を表2に挙げる。⁽⁴⁾

※ 表2 「伊家^并妾頓死往生事」同類話本文対照

『今昔物語集』三十一(7) 「右少弁師家朝臣值女死語」	『今鏡』十 「敷島の打聞」	『発心集』慶五(2) 「伊家 ^并 妾頓死往生事」◆	『雑談集』四(8) 「恋故往生事法華往生事」
今昔、右少弁ノ師家ト云人有キ。其ノ人ノ、互ニ志有テ行キ通フ女有ケリ …中略…遂ニ絶ニケリ…中略… 女…中略…七ノ卷ニ成リテ、薬王品ヲ押返シミシクリ返シツ、三度許読奉… 中略…於此命終 即往安樂世界 阿弥陀仏 大菩薩衆 困遶住所 青蓮花中 宝座之上ト云所ヲ読奉テ、目ヨリ涙ヲホロノ、泛セバ…中略…「今一度対面セムト思テ呼聞エツル也。今ハ此レヲ恨ミテ」と云テ、只死ヌレバ…中略…	また、女有けり。時かよひけるをこのいつかたへにければ… 中略… 七の卷の即往安樂世界といふ所をくりかへしよむとみけるほどに…中略…やがてうせにけり… 中略…	中來、朝夕帝ニツカフマツル男アリケリ。優ナル女ヲ語ヒテ…中略…終ニカヨハス成ニケレバ…中略… 女…中略…「於此命終即往安樂世界阿弥陀仏」ト云所ヲクリカヘシ、二度三度ヨミテ、ヤガテネイルカ如クニテ、イナガライキ絶ニケリ。	中比、アサ夕御門ニ仕フマツルヲノコアリケリ。有ルイフナル女ヲ語ヒテ… 中略…遂ニカヨハスナリニケレハ…中略… 女…中略…「於此命終、即往安樂世界、阿弥陀仏」ト云所ヲクリ返シ、再三ヨミテ、ヤカテネイルカ如クニテ、イナカライキタヘニケリ。

其レヨリ返テ、弁幾モ無クテ病付テ、日來ヲ経テ遂ニ失ニケリ。其ノ女、寄タルニヤトゾ。其二、親カリケル人ハ、女ノ靈ナドハ知タリケムカシ。

其ノ女、最後ニ法花経ヲ讀ミ奉テ失ニケレバ、定メテ後世モ貴カラムト、人モ見ケルニ、弁ヲ見テ深ク恨ノ心ヲ発シテ失ケルニコソハ、何ニ共ニ罪深カ、ラムトゾ思ユル。此ナム語り伝ヘタルトヤ。

しばしば山ごとにかくれをりければ、よをそむきぬるなどきこえけれど、さすがかくれもはてぐいでつかえければ、かえるの弁とぞいひける。

男トハ、ナニガシノ弁トカヤ聞シカド、名ハワスレニケリ。人ヲ恋テハ、或ハ望夫石ト名ヲトメ、モシハツラサノ余リニ悪靈ナンドニナレルタメシモ聞ユ。イカニモ罪深キ習ノミコソ侍ニ、ソレヲ往生ノ縁トシテ、思フ様ニヲハリニケン、イトメデタカリケル心ナルベシ。哀レ、是ヲタメシニテ、此世ニモ物思フ人ノ往生ヲ願事ニテ侍ラバ、イカニモ心カシコラン。

タトヒ同シ心ナル中トテモ、幾世カハアル。楊貴妃ハムナシク比翼ノ契ヲノコシ、李夫人ハワヅカニ反魂ノケフリニミアラハレタリ。況ヤ、思ハヌ人ノ為ニハ、コトニフレツ、哀モシランコトハリモナシ。思ヒアマリヌル時、富士ノネヲヒキカケ、海士ノ袖トカコチテ、念比ニ心ノ底ヲアラハセド、何ノカヒカハアル。独ムネヲコガシ、袖ヲシボル程ハイミジクアチキナクナム侍リ。何況ヤ、此世ヒトツニテヤムベキ事ニテモ非ス。其ムクヒ空シカラネバ、来世ニハ又人ノ心ヲツクサスベシ。如此世々生々タガヒニキハマリ無シテ、生死ノキヅナトナラン事ノ罪深ク侍ルナリ。此度思キリテ、極楽ニ生レナバ、ウキモツラキモ、ネヌル夜ノ夢ニコトナラジ。立婦リ、善知識トサトリテ、カレヲ道引ン事コソアラマホシク侍レ。若浄土ニテ猶ツキガタキ程ノウラミナラバ、其時イヒムカヘヲモセヨカシ。

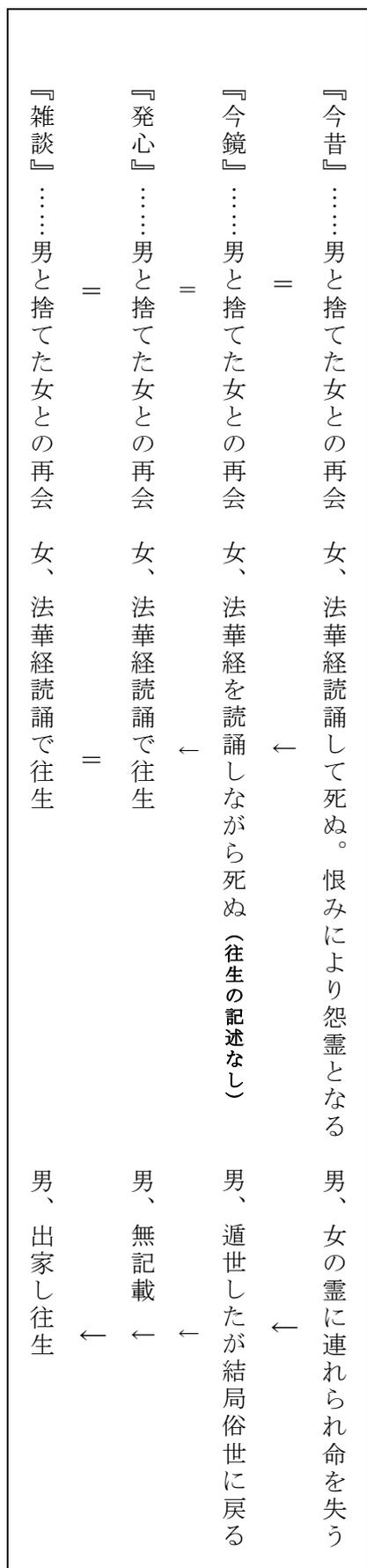
男ハナニガシノ弁トカキ、シカトモ、名ハワスレニケリ。人ヲコヒテハ、或ハ望夫石ト名ヲトメ、若ハツラサノアマリニ悪靈トナルタメシモキコユ。何ニモ、ツミフカキナラヒニテコソ侍ルニ、其レヲ往生ノ縁トシテ、思フサマニ終ニケム。イトメテタカリケル心ナリケリ。アハレ、コレヲタメシニ、コノ世ニ物思フ人ノ往生ヲ願フ事ニテ侍ラハ、イカニ心カシコカラムトナリ。

サテ男ハ、即我宿所ヘモカヘラテ、モトヒキリ、遂ニ仏道ヲ修行シテ、(往生)往要ヲ遂ニケリ。

表2に示す通り、『発心集』は、早い時代に成立した『今昔物語集』『今鏡』との間には同文関係が見えず、説話の流れにも大きな相違が見える。一方、『発心集』の説話部分と評の前半部分は、『雑談集』にほぼ同文の部分を見出すことができる。ただ、『雑談集』の説話部分の末尾には、

サテ男ハ、即我宿所へモカヘラデ、元結キリ、遂ニ仏道ヲ修行シテ、往要ヲ遂ニケリ
(往生しむ)
 という『発心集』に見えない、男の往生を記している一文がある。

四作のストーリーの展開は次のように整理される。



また、説話のなかの主人公の身分に関しても、多少の関連性が見える。

『今昔』	師家	右少弁
『今鏡』	無記名 <small>(註に「師賢」と記すもの有り)</small>	かへるの弁
『発心』	無記名 <small>(題に「伊家」)</small>	ナニガシノ弁

『今昔物語集』では、女が恨みのあまりに怨霊となり男を死なせた話が、後の時代において段々に変貌し、女がいし男女二人とも往生を遂げる話になってきた。時代の推移に従って、仏教説話の性格が強くなっていく様相が見える。ただし、本文を詳しく見ると、『今鏡』の所収説話は初めて男性の出家に触れたと言えるが、「かへるの弁」の由来を語るこの一話の笑い話としての性格は、明らかに他の三作とは異なる。説話の変貌は、『今昔物語集』の評の

其ノ女、最後ニ法花経ヲ読ミ奉テ失ニケレバ、定メテ後世モ貴カラムト、人モ見ケルニ、弁ヲ見テ深ク恨ノ心ヲ発シテ失ケルニコソハ、何ニ共ニ罪深カ、ラムトゾ思ユル

からの発想であろう。

しかし、『今昔物語集』は『発心集』の直接的出典であるとは考えられない。その理由は二つある。一つは、長明が『発心集』を編纂する時、出典の本文に対して大きな変更を加えることがない点である。もう一つは、『発心集』の成立時代には、『今昔物語集』は流布していたと考えられない点である。

ここで、『発心集』より後の時代に成立した『雑談集』の巻四第(8)話「恋故往生事法華往生事」に注目したい。前述の通り、同類話三話のうち、『発心集』の話と同文関係にあるのは、この一話しかない。さらに、説話部分だけでなく、『雑談集』の評部分についても『発心集』の本文にはほぼ同文であるものが見出せる。著しく異なるのは、男の出家に関する一文の有無だけである。とはいえ、評の部分まで同文傾向を持っていることから、この二

つの説話は直接的書承関係を持つことは否定できないのである。しかし、これこそ不審なところである。

『雑談集』の著者無住は、もう一つの著書『沙石集』で、長明の『発心集』を見たとき明記しているのが、『雑談集』の「恋故往生」話は、『発心集』から取り入れたと考えるのが一般的であるが、そうではないようである。無住には出典説話をそのまま記す習慣がないのである。⁵⁾ここに、『発心集』を出典として明記した「婦人臨終ノ障成事」の第二段と、出典の『発心集』巻四(5)「肥州僧妻為魔事」の本文対照を表3に挙げる。

※ 表3 「肥州僧妻為魔事」 同類話本文対照

『発心集』慶四(5)「肥州僧妻為魔事」	『沙石集』四(4)「婦人臨終ノ障成事」
<p>中比、肥後国ニ僧アリケリ。本ハ清カリケルヲ、年半タケテ後、メヲナンマウケタリケル。カ、レド、ナヲ後世ノ事ヲ思放タズ。理観ヲ心ニカケツ、ソノ勤メノ為ニ別ニ屋ヲツクリテ、彼コヲ観念ノ所ト定メテ、年比ツトメ行ヒケリ。此妻、男ノ為心サシ深ク、事ニフレテネンゴロナリケレド、イカ、思ヒケン、病ヲ受タリケル時、此妻ニウチトテズ、相知レル僧ヲヨビテ、忍ビ語ラフヤウ、「若限ナラン時ハ、穴賢々々メノ方ニツゲ給フナ。コトサラ少シ思フ故アリ」ト云ケレバ、ソノ心エテノミアツカフ程ニ、イトモワツラハズ、終リ思フサマニ目出クシテ、西ニ向テイキ絶ニケリ。</p>	<p>フルキ物語ニ、道念アリケル僧、世ニヲチテ、妻ヲカタラヒテ、庵室ニコモリキテ、妻ニシラレスシテ持仏堂ニ入り、端坐シテ目出ヲハリテケルヲ、</p>

サテシモ、アルベキナラネバ、トバカリアリテ、妻ニ此事ヲツグ。即ヲトロキマドヒ、ヲビタ、シク手ヲタ、キテ、眼ヲイカラカシ、モダヘ迷ヒテ絶イリヌ。人ヲヂテ、近キモヨラザリケル間ニ、一時計アリテ、世ニヲソロシウ声ノアル限リヲメキサケビテ云様、「我、拘留孫仏ノ時ヨリ、此ヤツカ菩提ノ妨ゲンタメニ、世々生々ニ妻トナリ男トナリ、サマノシタシミタバカリテ、今マデ本意ノ如ク随ヒツキモタリツルヲ、今日ステニ、ニガシツル。ネタキワザ哉」ト云テ、ハラクキシハリ、カキカベヲタ、ク。人キト、ヲソレヲノ、キテ、皆ハイカクレタル間ニ、イヅチトモナク失ニケリ。其後ツキニ行方シラズトナン。往生伝ニハ康平ノ比ト註セリ。

是、一人ガ上ニアラズ。悪魔ノ、サリガタキ人トナリテ、二世ヲ妨ル事ハタレモ必ズアルベキ事也。カレハ、此事ヲ心ニカケツ、ジタシキウトキワカズ、善ラス、ムル人アラバ、仏菩薩コソサマノ形チヲ変ジテ人ヲ化度シ給ヘ、若化身カ若又其便カトムツマシク思ヒ、ツミヲ作ラセ功德ヲ妨テ、執ヲ留メン人ヲバ、生々世々ノ悪縁ト恐レテ、遠ザカラン事ヲ願フヘシ。大方、人ノ心ハ野ノ草ノ風ニ随ガ如シ。縁ニヨリテ、ナヒキヤスシ。タレカハ道心ナキ人ト云ヘド、仏ニ向ヒ奉リテ、掌ヲ合セザル。イカナル智者カハ、ニビタル形ヲ見テ、目ヲ悦バシメザル。彼淨藏貴所ハ、日本第三ノ行人ナレド、アフミノ守ナガヨガムスメニ契ヲ結ベリ。久米ノ仙人ハ、通ヲ得テ空ヲ飛アリキケレド、ケス女ノ物アラヒケルハギノ白カリケルニ、欲ヲ発シテ、仙ヲ退シテ只人トナリニケリ。今ノ世ニモ、手足ノ皮ヲハギテ、指ヲトボシ、ツメラクダギ、サマノカタワヲサヘツケテ、仏道ヲ行フ人ハ、ソノ発心ノホド隠ナケレド、悪縁ニアヒテ、妻子ヲマウクルタメシ多カリ。我モ人モ凡夫ナレバ、タ、近ヅカヌニハシカヌ也。

妻後ニ見ツケテ、「アラ口惜。拘留孫仏ノ時ヨリツキソヒテトリツメタリツルモノヲニカシツル」トテ、オソロシケナル気色ニ成リテ、手ヲ打テヒテツセニケリ。發心集ニ侍ルヲヤ。

流転生死ノヲモキサハリ、タ、此コトナリサレハ、イカニモオソルヘシ。コレホトノ事ハマレナレトモ、妻子ナミキテ、カナシミナキシタフヲ見テハ、下根ノ機、イカテカサハリトナラサラン。マメヤカニ生死ヲハナレント思ハン人ハ、菩提ノ山ニ入ルミチノホタシヨステ、煩惱ノ海ヲワタル船ノトモツナヲトクヘシ。

無住は、出典を明記したものでも、そのまま写すのではなく、自分の言葉で著す習慣があるとわかる。この点から考えれば、『雑談集』の「恋故往生事法華往生事」のみをそのまま写した、さらに出典をも示さないことは、いささか不自然である。さらに、慶安版所収説話の題と本文との矛盾や、この一話は慶安版の独自説話で、神宮本に見えないことなど、いずれも、「伊家妾」話は不審であると語っているようである。この一話は後の時代に、別の人が『雑談集』から『発心集』へ入れた可能性が極めて高い。

(二) 第(4)話「亡妻現身」話の解釈問題―「愛執の恐ろしさ」か「誓願の不思議」か―

第(4)話「亡妻現身帰来夫家事」の両系統本文はほぼ同じである。但し、神宮本においては、亡妻の話と、その夫の志の深さを説明するに对照として挙げた小野篁と妹の話の間に、

モロトモニ輪廻ノ業アサマシキ事共也

という、慶安版に見えない一文がある。この一文により、この一話の主題は「愛執の恐ろしさ」であるという解釈が可能なのである。しかし、もしこの文がもともとあったもので、夫の強い志に応じて亡妻が生きていた時の姿のままに家に帰ったことを批判するつもりであるとすれば、明らかに説話後半の、

凡夫ノ愚ナルダニシカリ。況ヤ仏菩薩ノ類ハ「心ヲイタシテ見ント願ハ、其人ノ前ニアラハレン」ト誓給ヘリ。是ヲ聞ナカラ行ヒ顕シテ見奉ラヌハ、我心ノトガ也。妻子ヲ恋ガ如ク恋タテマツリ、名利ヲ思ガゴトク行ハ、顯レ給ハン事カタカラズ。心ヲイタス事モ無テ、世ノ末ナレバアリガタシ。拙キ身ナレバ叶ハジナ

ド思テ、退心ヲオコスハ、只志ノ浅キヨリヲコル事也

という両系統共通評文の趣旨と矛盾する。厳しい口吻で批判したばかりの「男女愛」を譬えとして、仏菩薩の誓願の有難さそして仏菩薩に願うべきことを説くのは、極めて不自然である。従って、神宮本の独自評文が示している「愛執」に対する批判的な姿勢は、一般的な角度から見れば、より仏教説話集の背景に相応しいと言えるが、この一話の場合では、蛇足のような存在である。

この一文はもとより存在したもので、右の共通評が導いた「誓願論」こそが後人の増補である可能性も当然考えられるが、この一話は神宮本独自評文で完結するとすれば、この一話は「愛執」を批判する姿勢だけを取ることにになり、次の誓願説話群との繋がりが見えなくなる。

さらに、本話の最後の部分の、「タトヒ業ニヒカレテ、思ハヌ道ニ入トモ、折々ニハ必ズアラハレテ、スクヒ給フベシ」という文は、明らかに次の第(5)話「不動持者生牛事」のなかの、牛に生まれ変わっても不動明王が助けしてくれることを暗示している。「誓願論」は確かに長明の考えを表すものであると考えてよいであろう。また、神宮本の独自評文について、それは、いずれかの人物が編者の意図を正しく把握しないままに、瞬時の感想として書き込んだ可能性や、『発心集』を説経の材料として「愛執の恐ろしさ」を説く時の批判として加えた可能性などが推測できる。

要するに、この「亡妻現身」話については、慶安版の形が本来の形を示すと解釈することが可能であり、この一話は誓願説話のグループ②に入るはずであるとわかる。

(三) 第(11)話「目上人」話の解釈問題―「賢」か「恥」か―

第(11)話「目上人参法成寺供養堅固道心事」について、神宮本の末尾には、「可恥之」という批判文があり、一見、「イト賢キ思ヒハカリナルベシ」と評価する慶安版と異なっているようである。この一話をどのように理解すればより正しいのか、まず、本文を比較してみる。

※ 表4 「目上人参法成寺供養堅固道心事」両系統本文対照

慶五(11)「目上人参法成寺供養堅固道心事」	神四(16)「目上人法性寺供養ニ堅ク道心発シタル事」
<p>河内国ニ、目聖トテタウトキ人有ケリ。御堂入道殿法成寺ツクリ給テ御供養アリケル日参テ拜ミケルニ、事ノ儀式、仏前ノカサリ、誠ニココロ及バズ。宇治殿、其時ノ関白ニテ事ヲコナヒテオハシマス座ニ、ナラブベキ人モナク、目出度ミエケレバ、^①「人界ニ生ルトナラハ、一ノ人コソイミジカリケレ」トホドノ、^②シル。百司雲霞ノ如クキネウシ、乱声ノ、シリテ至リ給フ時、イミジト覚ヘル関白モノナラズ覚ヘテ、サキノ思ヲアラタメテ、「イカニモ、国王ニハシカザリケリ」トミル間ニ、金堂ニイラセ給ヒテ、仏ヲ拜ミ奉リ給ケル時ナム、「猶シ仏ゾ上モナクオハシマシケル」ト覚ヘテ、イト、道心ヲカタメタリケル。</p>	<p>河内ノ国ニ、目上人トテ貴キ人有ケリ。御堂ノ入道殿法性寺ヲ作り給テ供養シ給ヒケル日詣テ拜ミケルニ、事ノ儀式、御前ヘノ粧、誠ニ心モ言モ不レ及ハ。宇治殿、時ノ関白ニテ事ヲ行テヲハシアス様、並フヘキ人モナカリケリ。目出ク見ヘ給ヒケレハ、^①「人界ニ生ル、ナラバ、一ノ人コソイミジカリケレ」ト、妄執ニモ成又計ニ思ヒ居タリケリ。カ、リケル所ニ、時儀ヨク調テ、行幸ナト旬ル。^②百ノ官人、雲霞ノ如ク圍繞メ乱声シテメリ給フ時、イミシト思ヒツル関白、物ナラズ踞キ給ニ、先キニ改タマツテ、又「国王ニハ不トレ如カ」見ル間ニ、金堂ニ入セ給テ、仏ヲ拜ミ給ヒケル時ニナン、ウン、「猶ヲ仏ゾ上モ無クオハシケル」ト覚テ、イトゞ道心ヲ猶ヲ能ク堅メケル。</p>
<p>^③ 彼妙莊嚴王ノタグヒニコトナラズ。イト賢キ思ヒハカリナルベシ。</p>	<p>^③ 妙莊嚴王ノタクヒニモ、最ト賢キ思ヒナリケリ。カクコソ発心・道心ハ堅メタルモノナレ。可恥之。</p>

表4に示すように、問題視される末尾を含め、顕著な相違部分は三箇所ある。細かく対照した結果を挙げる。

①	(慶)	「人界ニ生ルトナラハ、一ノ人コソイミジカリケレ」ト、	ホドくノ、シル。
	(神)	「人界ニ生ル、ナラバ、一ノ人コソイミシカリケレ」ト、妄執ニモ成ヌ計ニ思ヒ居タリケリ。カ、リケル所ニ、時儀ヨク調テ行幸ナト	旬ル。
②	(慶)	百 司、雲霞ノ如クキネウシ、乱声ノ、シリテ至リ給フ時、	
	(神)	百ノ官人、雲霞ノ如ク圍繞 乱声シテメリ	給フ時、
	(慶)	イミジト覚ヘル 関白、モノナラズ覚ヘテ、	サキノ思ヲアラタメテ、イカニモ、国王ニハシカザリケリトミル間ニ、
	(神)	イミシト思ヒツル関白、物ナラズ 踞キ 給ニ、先キニ	改タマツテ、又、 国王ニハ不 _レ 如カ 見ル間ニ
③	(慶)	彼妙莊嚴王ノタグヒニ	コトナラズ、イト賢キ思ヒハカリ ナルベシ。
	(神)	妙莊嚴王ノタクヒニモ	最ト賢キ思ヒ ナリケリ。カクコソ発心・道心ハ堅メタルモノナレ。可恥之。

この三つの部分の本文異同について、特に問題とならない傍線部を除き、①の網掛け部分は、明らかに神宮本の方が正しい形で、慶安版には脱落部分がある。②の網掛け部分は、両方とも意味が通じているようであるが、吟味すると、前半は神宮本の「物ナラズ踞キ給ニ」、後半は慶安版の「サキノ思ヲアラタメテ」がより相応しいと考える。そして、③の網掛け部分二箇所について、前の方は、明らかに、神宮本の「ニモ」の後には「コトナラズ」に相当する言葉の脱落があると考えられ、慶安版と同じく、帝が仏を礼拝するのを見て、仏・仏法の貴さを再認識した目上人を、二子の神変を見て仏道に入った妙莊嚴王と重ねて評価したのである。後の神宮本にしか見

えない部分の「可恥之」という文は極めて理解しにくく、不審である。この部分は、後人増補の神宮本独自文⁶⁾であると考えてよいであろう。

三、第(6)話と第(10)話―説話配列における諸問題―

(一) 第(6)・(7)話の関連性について

第(6)話「少納言公経依先世願作河内寺事」と、次の

第(7)話「少納言統理遁世事」◆

第(8)話「中納言顕基出家籠居事」◆

第(9)話「成信重家同時出家事」◆

との連続四話は慶安版独自説話でありながら、『今鏡』との書承関係から推し、長明の手によって採取されたと考えられている⁷⁾。この四話は、共に貴族を主人公とするもので、次の第(10)話「花園左府詣八幡祈往生事」と合わせて、「貴族道心譚」とする見解が多いが、それはこれらの説話の配列にとつては大きな意味を持たないだろう。

第(6)話のなかで、公経が前世の沙門公経の願文を見て、『然ルベカリケル事』ト思ヒシリテ、望ノ本意ナラヌ事ヲモイサメツ、信ヲイタシテ修理⁸⁾した。この「信ヲイタシテ」という文句から、公経は深く道心を発したという意見があるが、それは長明が強調したい点ではない。この一話の末尾の評の

我モ人モ、サキノ世ヲシラネバコソハアレ。何事モ此世ヒトツノ事ニテハ侍ラヌ。又空ク心ヲクダキ走り求

メテ、カナハネバ、神ヲソシリ、仏ヲサヘウラミ奉ルハ、イミジウ愚ナリ。カツハ、願ノムカシニタガハスニテ、願トシテ成ヘキ事ヲシルベシ

が示す通り、この話についての編纂者の注目点は、前世今生の因縁に対する関心及び神仏を誇る行為への批判の二箇所にある。前世今生の因縁そして誓願との関わりについては、明らかに前話の第(5)話「不動持者」話との関連性が見える。特に、この評の後半の「又空ク心ヲクダキ走り求メテ、カナハネバ、神ヲソシリ、仏ヲサヘウラミ奉ル、イミジウ愚ナリ」という文に注目したい。少納言公経は豊かな国の守になれなかったので、「本意ナク覚テ」古寺の修理をしようとした。ここの「本意ナク覚テ」は、『今鏡』の「かひなし」を改めたのである。長明は『今鏡』の文章をほぼ忠実に継承したと言える一方、微細な変更を加えることもある。この言葉の変更こそが長明の主張あるいは編纂意識を表すと考えられている。¹⁰⁰「本意ナクテ覚テ」がさらに発展すれば、「神を誇り、仏を恨む」までも至るので、ここで強く批判したと考えられる一方、この一文を踏まえる説話が次に来ることをも想像させる。

ここに想起されるのは、神宮本独自説話の「桓舜僧都依貧往生事」である。神宮本卷三の第(7)話にあたるこの話のなかで、桓舜という貧しい僧が「世路叶ヌ事ヲ愁テ、年来朝夕ト云ハカリ無ク、山王詣テツ、泣ク々祈リ申ケレド、更ニ其験無ク、最口惜ク覚テ、『宿業限り有ラハ叶フマジキゾトモ示シ給ヘカシ。フツト聞入給ハヌ物哉』トウラメシク思ヒテ」、稻荷明神に祈り千石を賜る夢告を得た後、夢のなかに、山王権現が現れ、稻荷明神を制止した。桓舜は、「サルニテ八年来功ヲ入奉リシ間、我レト恵ミ給ン事コソ難タカラメ。偶々外ノ示現ヲ蒙レルヲ

サへ妨ケ給フハ、何事ナルラン」トウラメシキ余リニ、涙ヲ押ヘツ、「居た時、山王権現が稻荷明神の質問に対し、その理由を説明して、

此ノ僧順次ニ必生死ヲ離ルヘキ者ニテ侍ルヲ、若シ豊カニテ世ニ侍ラハ、必余執深ク成テ、猶穢土ニ留ルベキ也。…中略…往生ヲ遂ケサセント構ヘ侍ル也

という。桓舜は覚めて比叡山に戻り、最後は往生を遂げた。

「桓舜」話の、「年来朝夕ト云ハカリ無ク、山王詣テツ、泣ク々祈リ申」という文と、二度出現した「ウラメシ」という言葉は、明らかに「公経」話評文の傍線部と対応している。さらに、この一話は「公経」話と同じく、現世において仏（権現）に対する願いが叶えられなかった話である。但し、この現世の願いが叶えられなかった理由についてはそれぞれである。「公経」話では、その評の最後部分の

カツハ、願ノムカシニタガハスニテ、願トシテ成ヘキ事ヲシルベシ

が示す通り、まずは前世の願を叶えるべきであると説き、「桓舜」話においては、これは山王権現が桓舜の後世を配慮するためのであると説明した。つまり、現世祈願不成就の裏には、それなりの理由があるのである。説話本文のみを考えれば、「公経」話と「桓舜」話はかなり緊密に繋がり、一対と見なすことがあり得る。さらに、「桓舜」話の末尾では、

カ、ル時ハ、トニカク、仏神ノ御構ヘホトニ、有リカタク目出度事ハ無カリケリ。又、貧シキモ善知識也。愚カニシテ、三宝ヲソシリ給フベカラズ。

という評—むしろ忠告である—があり、現世の祈願が叶わなくても、三宝を誇るべからず、仏神（仏と権現）を信ずべしと説いた。これは、仏菩薩の衆生救済の誓願を説く第(4)・(5)話とも対応し、「公経」・「桓舜」話は、第(4)・(5)話とは一つのセットと考えられるのである。但し、グループ②「誓願不思議」とグループ③「貴族道心譚」との関連性が完全に見えなくなるという新しい疑問点が生じたようである。しかし、右の推測が成立しないとしても、両グループの繋がりをめぐる不審点は依然存在するので、この疑問点を容易に右の推測を否定する証拠としない。

(二) 第(7)・(8)・(9)・(10)話の配列について

第(7)話「少納言統理遁世事」は、第(6)話と同じく、『今鏡』の本文をほぼ忠実に継承しているが、部分的に変更を加えている。この変更にも長明の意識が含まれていると考えられる。「たてまつりたる哥へなど」もあはれにきこへ侍き」と、統理の人情味に同情する姿勢を持つ『今鏡』に対し、「此心ニテイカデカ生死ヲ離ンゾ」という僧賀の叱りで話を終える『発心集』は、明らかに強く批判する態度を示していて、「往生失敗譚」と見做してよいものである。しかし、この一話は巻五においては第(8)話ではない。巻三の第(10)話「証玄律師希望深事」のように、第(8)話以外の位置にも「往生失敗譚」（あるいはそれに相当する説話）を配する例もあるが、前述のように、巻四までの各巻の第(8)話に必ず「往生失敗譚」を配することは決まっている。しかし、巻五においては、所収説話十五話のうち、「往生失敗譚」に相当するのは第(7)話「統理」話の一話しかない。

第(8)話「中納言顕基出家籠居事」は第(7)話と相似の構造を持ち、一見、同じく出家した僧が俗世の情愛を完全に切り捨てられない話であるが、明白に批判された第(7)話と異なり、「一ノ人」が顕基の親心を察知し、「事ニフレツ、ヒキタテトリ申給ヒ」、顕基の息子が中納言になった第(8)話に見られる編者の姿勢は完全に異なっている。また、第(8)話の「子息懸念」話柄は、明らかに高僧となった貴族の後日譚・美談として取り上げられたもので、第(8)話の中心話柄ではない。第(8)話の重心はやはり貴族である顕基の出家にある。第(7)話の「統理」話と第(8)話の「顕基」話は近似の構造を持っているものの、一対の説話とは見られない。

そして、第(9)話「成信重家」話のなかで、親王と右大臣の子である成信と重家が昇進闘争を厭い、約束して同時出家した。第(10)話の花園左大臣は出家していないが、身分・地位に執をとどめず、浄土を願う心は同じであると言える。この点は、第(11)話の「猶シ仏ゾ上モナクオハシマシケル」という認識、そして第(12)話・第(13)話の主題「浄土を願うべし」と一致する上に、第(4)話の

妻子ヲ恋ガ如ク恋タテマツリ、名利ヲ思ガゴトク行ハ、顕レ給ハン事カタカラズ
との仏菩薩に願うべしという勧めとも照合するようである。

第(7)話「統理」話と前話の第(6)話「公経」話との関連性が薄いことと、「公経」話と神宮本独自説話「桓舜」話との関連性が緊密であること、そして、第(8)話の「子息懸念」話柄から見られる「親心」要素と第(14)・(15)話との関連の可能性、及び第(14)・(15)話と前話の第(13)話とは完全無関連であることを含めて考えて、第(7)話と第(8)話はおもともこの場所に配されていたのではなく、後人により移動された可能性があると言える。

では、慶安版『発心集』巻五のなかから、他所から移動されてきたと見られる第(7)話と第(8)話と、後人増補である第(2)話の「伊家妾」話を除き、第(6)話「公経」話の後に来ると考えられる「桓舜」話を入れて、改めてまとめてみると、次のように分けられる。

- ① 愛執と仏道 (第(1)話・第(3)話)
- ②の1 誓願不思議―仏菩薩に願うべし (第(4)話・第(5)話)
- ②の2 誓願不思議―現世祈願が叶えられない理由 (第(6)話・神三(7))
- ③の1 浄土を願う―身分・地位より仏道 (第(9)話・第(10)話・第(11)話)
- ③の2 浄土を願う―世間的な望みより浄土 (第(12)話・第(13)話)
- ④ 僧である子とその母 (第(14)話・第(15)話)

右のように、慶安版『発心集』巻五は、不審な説話を取り除いて考えれば、「誓願不思議」に関して二対一セット、「浄土に願うべし」に関して二対一セットらしきものが指摘できはする。だが、前者は神宮本独自説話を入れねばならず、後者は三話一「対」(?) になっている部分がある。つまり、全体的に見れば表1の巻構成―巻一から巻四(第(9)話まで)は完全に認められた―が満たされているとは言いがたい。

このことは何を意味するのであろうか。

第(2)話の後人増補事情や第(7)・(8)話の位置移動問題などから考えれば、慶安版巻五に現れている混乱状態は、すべて後人の改竄によったかと解釈できるようだが、巻五のみを対象にし、巻四第(9)話までの部分に対して、何

らの手も加えていない点が不思議に思われる。従って、後人の操作などがあったといっても、それは慶安版巻五の様相をもたらした原因のすべてではない。

では、もしかして、長明が編纂方針を変えたのであろうか。しかし、前述したように、「二対四話一セット」構成様式（あるいはそれに近い構成）と解釈できる部分があるので、容易に編集方針を変えたとは言えない。

ここで、再び後人の操作の可能性について注目してみよう。一般的に言えば、後人が先人の書物に手を入れる目的は、その書物の不足を補うためである。従って、第(2)話の補入や第(7)・(8)話の位置移動などをした後人あるいは後人たちの目より見れば、『発心集』の巻五は不備であった、つまり、長明が残した『発心集』——特に巻五以降の部分——はまだ未完成な状態であったのではなかったか。そのため、後に誰かが不審だと思う箇所には補入添削をしたのであろう。但し、この後人あるいは後人たちは、当時よくある「二話一対」配列様式や主人公の身分などの基準に従って変更を加えただけで、長明が考案した「二対四話一セット」構成様式に基づく、より複雑かつ厳密な巻構成を十分に理解していなかったようである。

『発心集』は、巻四第(9)話までは、説話の配列の方針が緻密に貫かれていた。しかし、その後巻五に至る範囲は、長明の編纂は未完成であったと結論せざるを得ないのである。

では、親子関係説話で始まり、明らかに巻五の巻末部に次ぐ巻六はどうであろう。次節で考察する。

註

- (1) 慶安版巻五第(3)・(4)話と第(10)・(11)話は、それぞれ、神宮本巻二第(9)・(10)話と巻四第(15)・(16)話に当たる。

(2) 廣田哲通「愛することと往生をとげること―発心集第四九話成立の論理と背景―」(『女子大文学・国文篇』28、一九七七年三月)。

(3) 浅見和彦・伊東玉美訳注『発心集』の註によれば、説草「有信卿女事」がある。一九六四年岡見正雄「説教と説話―多田満仲・鹿野苑物語・有信卿女事―」(『仏教芸術』54号、一九六四年)に、同題翻刻あり。独立小冊子。また、『国書総目録』によれば、京都大学に一冊しかないもので、同じものである。内容は、明らかに『発心集』か『雑談集』の本文に基づいて大幅に改編したもので、特に参考にならない。

(4) 本章における同類話の本文引用につき、『今昔物語集』は小学館古典文学全集、『今鏡』は国史大系、『雑談集』は古典文庫、『沙石集』は深井一郎編『慶長十年古活字本沙石集総索引―影印編―』(勉誠社、一九八〇年三月)による。明らかな誤字などを訂正する。筆者が入れる傍記は()で示す。

(5) 上野陽子『『沙石集』の『発心集』受容』(『国語と国文学』八〇巻一号、二〇〇三年一月)等。

(6) 神宮本において、一部の説話には、後人増補と見られる、他伝本にはない「独自評」あるいは「独自文」がある。

(7) 山口真琴『『今鏡』から『発心集』へ―その受容の実態と方法―』(『国語教育研究』二六巻上、一九八〇年十一月)、山本一「貴族道心譚から見た『発心集』―説話構成の方法と方向―」(『日本文学』25、一九七六年十二月)、田中宗博『『発心集』説話の貴族たちと長明―公経・統理・顕基をめぐって―』(『国文論叢』11、一九八四年三月)、同田中氏『『発心集』貴族集』説話の貴族たちと長明―公経・統理・顕基をめぐって―』(『国文論叢』11、一九八四年三月)、佐藤麻里子『『発心集』における貴族道心譚について』(『日本文学研究年誌』第6号、一九九七年三月)等。

- (8) 註(7)諸氏論文。
- (9) 註(7)諸氏論文。
- (10) 註(7)田中氏・佐藤氏論文。

第三節 卷六の構成検証

前節において、慶安版卷五を分析した結果、後人増補説話の存在を確認し、長明撰『発心集』の卷五は実際には未完成であると推測した。では、卷六の場合はどうであろう。

慶安版『発心集』の卷六には、卷五と同じく十二話以上の説話が収められている。所収十三話のうち、第(1)話・第(4)話・第(10)〜(13)話との六話が神宮本と共通し、独自説話が占める割合は卷四・五より上回り、一卷の約二分の一に及ぶ。この共通説話六話のなかで、第(1)話と第(4)話は神宮本では孤立していて、連続している第(10)〜(13)話のうち、第(10)話と第(12)話は神宮本卷四の第(7)・(8)話に当たり、第(11)話と第(13)話が神宮本卷二の第(11)話と第(13)話に当たる。従って、慶安版卷六において、卷四・五のように、神宮本と完全に同じ配列で並ぶ部分を見出すことはできないが、配列は近似している。特に、第(11)話と第(13)話の神宮本での配列は、もともとの第(12)話が差し替えられたためであると考えられる。¹¹⁾

そして、慶安版独自説話七話のうち、第(2)・(3)・(6)話は、『私聚百因縁集』では、それぞれ卷九の第(6)・(7)・(8)話に当たり、説話本文はほぼ同文であると同時に、説話順序も同じである。慶安版第(8)話は明らかに、『今鏡』から取り入れたもので、第(9)話の冒頭記述は『十訓抄』に簡略な記述があり、末尾部分は同文の記述がある。これらの説話が長明撰『発心集』に属していた可能性は容易に否定できない。独自説話のなかに、第(5)・(7)・(10)話のように出典あるいは類似説話が完全に見出されないものもあるが、その割合は前の各巻の場合とは大差がないの

で、これらの説話も長明の手によって選択されたことを前提に考察することは、特に支障がないと考える。

また、巻六は未完成の巻五に続くので、巻六も編纂が終わっていないと想像できる一方、巻五のように、部分的に、説話配列が既定方針の通りに出来上がっている可能性もかなりあるに違いない。

では、巻六の所収説話はすべて長明の手により選択されたと仮定し、巻六の説話配列を考察していこう。

一、慶安版巻六の所収説話

慶六(1)「証空替師命事」

① 三井寺の智興内供が「カギリアル定業」の病にかかった時、安倍晴明が身替わりの人に病を移し替えるという唯一の方法を示したが、数多くの弟子のなかで、師の身替わりになろうと決意したのは、「末ノ人」である証空しかいなかった。

② 証空は、老いた母の所へ赴き、身替わりの由を語り、その功德を「母ノ後世菩提ニ廻向」することこそが「マコトノ孝養」であると母を説得し、その了解を求めた。

③ 師の代わりに病苦に責められた証空が不動明王の絵像を拝み、「悪道ニヲトシ給フナ」と願ったところ、絵像の不動尊が血の涙を流し、「汝ハ師ニカハル。我ハ汝ニカハラシ」と言つて、内供も証空も命が救われた。

慶六(2)「后宮半者悲一乗寺僧正入滅事」◆

一乗寺僧正の四十九日の法要を行った時、若い女房が現れ泣き続けた。後に、女房が、自分は孤児であった

が、僧正に救われ養親を定めてもらったお蔭で、後の宮に勤める半者まで至った経緯を語り、僧正に対する感謝及び女である自分が恩返しできない悲しさなどを話した。

慶六(3)「堀川院蔵人所衆奉慕主君入海事」◆

堀川院の御所の蔵人所に仕える男は、院を敬い慕うが、同じ御所に居ることだけで満足し、出世などを求めなかった。堀川院が崩御した後、この男は出家し、各寺院の説法を聞きにまわった。院が「西ノ海ニ」龍に転生した由を知ると、この男は筑紫より出航し西へ向かった。

慶六(4)「母子三人賢者遁衆罪事」

兄の妻と姦通する男を殺した弟が罪に問われた時、兄弟とも自分こそが罪を蒙るべきと主張したため、判定が決まらなかった。二人の母に聞くと、母は、実子の弟ではなく、亡くなった夫の形見である継子の兄を助けようとした。母子三人の情に感動した帝が三人とも許した。

慶六(5)「西行女子出家事」◆

① 西行が出家する時、寵愛していた娘を弟に育てさせたが、疎かに扱われる様子を覗いたので、彼女を冷泉殿に頼んだ。

② 西行は、娘が冷泉殿の妹に仕える女房になされることを知り、娘との面会を図り、「カヤウノツギノ所」より「仏ノミヤヅカへ」を勧めた。娘は父の意思に従った。出家する事情を養母に秘めた西行の娘が養母の家から離れようとする時、やはり養育の恩を忘れがたく、一度戻り、冷泉殿の顔をじつと見ていた。

③ 冷泉殿は、後に阿弥陀仏の絵像を描き続け、臨終の時その阿弥陀仏が現れた。

慶六(6) 「侍従大納言幼少時止験者請事」 ◆

① 侍従大納言成通九歳の時、彼の病気がなかなか治らないので、両親は祈祷僧を変えようとしたが、成通はこの僧のお蔭で自分が無事成長できた恩を思っ止めた。両親がこの由を僧に伝え、僧が感動して祈りに励み、成通の病気を治した。

② 「評」成通は幼い時からこのような素晴らしい心を持っていて、「事ニフレッツ、情フカク、優ナル名」を残せたのである。「惣テ、イミジスキ人ニテ、世ノ濁ニ心ヲソメズ、イモセノ間ニ愛執アサキ人ナリケレバ、後世モ罪アサクソ見ヘケレ」。

慶六(7) 「永秀法師数寄事」 ◆

① 石清水八幡宮の別当頼清が、遠戚の永秀法師に援助しようとする意思を伝えた時、永秀は「深く望申ベキ事」があると申し出たが、求めたのは僅か一管の漢竹の笛であった。

② 頼清が毎月の生活の援助を送ると、永秀はそれがあ限り、八幡宮の楽人と共飲し、楽をした。なくなれば、また一人で笛を吹いた。

③ 「評」 「カヤウナラン心ハ、何ニツケテカハ深キ罪モ侍ラン」。

慶六(8) 「時光茂光数寄及天聴事」 ◆

① 帝が市正時光という笙吹きをお呼びになろうとしたが、使いがやってきた時、時光は茂光という篳篥師と

唱歌しながら囲碁をしていたため気付かなかった。帝は時光を咎めず、「何事モ忘ハカリ思ランコソイトヤム事ナケレ」と評判する一方、「王位ハ口惜キモノ」だと嘆いた。

②〔評〕「是等ヲ思ヘバ、此世ノ事思STEM事モ、数奇ハコトニタヨリトナリヌベシ」。

慶六(9)「宝日上人詠和歌為行事」◆

①宝日という聖が、朝昼晩ごとに和歌一首ずつを読むことで修行とする。「人ノ心ノス、ムカタ様クナレバ、勤モ又一筋ナラズ」。

②恵心僧都はもとは、和歌を「綺語ノアヤマリ」と見ていたが、「世の中を何にたとえん」という歌により、「聖教ト和歌トハ、ハヤク一ナリケリ」と再認識し、相応しい時は必ず和歌を詠むようになった。

③蓮如という聖が定子皇后の臨終歌に感涙し、和歌を詠んだり尊勝陀羅尼を誦したりして、その後世を弔った。

④大式資通は、琵琶を弾くことで「極楽ニ廻向」した。

⑤〔評〕「数寄」は「出離解脱ノ門出」である。

⑥崇徳院が讃岐に流された時、蓮如が参上したが、御所に入れず、回りながら笛を吹き続けた。やがて御所から人が出てきた折になかに入り、その人に院への「朝倉ヤ」の和歌を託した。崇徳院から「朝倉ヤ只イタヅラニ」の返歌をもらった蓮如は泣く泣く、それを笈に入れて帰洛した。

慶六(10)「室泊遊君吟鄭曲結縁上人事」

或る遊女が少将聖の乗っている船に近づき、和泉式部が性空上人に送った「くらきより」歌を歌い、結縁しようとする志を示した。聖が感動し、後に人に語った。

慶六(11)「乞者尼得単衣奉加寺事」

十月なのに破帷一枚に蓑をつけた老尼は、与えられた単衣を着ず、直ちに清水寺に奉加し、志を表す「かの岸に」歌を書残して、姿を消した。

慶六(12)「郁芳門院良住武蔵野事」

西行法師が武蔵野を通った時、野中の庵で『法華経』を唱える人と出会った。この人はもともと郁芳門院の侍の長であったが、院の逝去後出家して各地を回ったが、武蔵野の花に心を慰められ住み続けた。煮炊きして草花を傷めるのを憚り、食事は人から与えられるのを待つのみであった。

慶六(13)「上東門院女房住深山事」

① 或る聖が遁世しようと思ひ、隠居場所を探したところ、北丹波の谷の川上に切り花が流れているを見て、好奇心で尋ねてみたら、軒を並べる二つの庵に住む二人の女を発見した。この二人は、もとは上東門院に仕えた女房であったが、世の無常と恋愛の罪を悟り、約束して出奔し、念仏のみで過ごした。聖は二人と結縁して帰った後、麻衣や食料などを持って再び訪ねてみたが、二人は姿を消していた。

② 「評」「人ノ心、同ジカラネバ、其行モサマ^くナレド、女ノ身ニテ、カ、ル棲オモヒ立ケン、オホロケノ道心ニハアラザルベシ。今、此事ヲ思フニ、ケガラハシクアタナル身ヲ、山林ノ間ニヤドシ、命ヲ仏ニマカ

セ奉テ、清淨不退ノ身ヲ得ン事ハ、ゲニ心カラニヨルベキ行也」。

③ 「跋文風文章」略。

この十三話は、大きく二つのグループに分けられるようである。第(1)話から第(6)話までの六話から「恩」の要素が読み取られ、第(7)話から第(13)話までの七話の多くは、「数寄」(Ⅱ和歌・管絃などの風流・風雅の道に心を寄せること)を主題にし、またはその要素を有する。そして、この二大グループの主題移転を図るには、第(6)話の「侍従幼少」話の評が接点・分かれ目として存在している。では、「恩」と「数寄」との二つのテーマをめぐって、この二大グループをそれぞれ分析してみよう。

二、第(1)話から第(6)話―「恩」をめぐって―

(一) 第(1)話「証空替命」話の「恩」

第(1)話「証空替命」話には、特に「師の恩」「母の恩」そして「仏の恩」との三種類の「恩」が語られている。証空が、師の命に替わる、即ち身替わりになると決意したのは、師の仏法伝授、いわゆる教育の恩に報じるためである。自分の命を捨てようとしたが、母の了解を求めなければならぬのは母の生育の恩を知っているためである。そして、不動明王が証空の身替わりになったのは、「仏」より賜った慈悲であり、「仏の恩」とも言える。

「母の恩」については、前話の巻五第(15)話「正算僧都母為子志深事」の主題である。「正算母」話は末尾において、

惚テ、哀ミノ深キ事、母ノ思ニスギタルハナシ。愚ナル鳥獸マテモ、其慈悲ヲバ具シタリ。…中略…鳥獸ノナサケナキダニ、子ノ為ニハ、カク身ニモカヘテ哀ミ深シ。イハンヤ、人ノ親ノ腹ノウチニヤドルヨリ、人トナルマデ、念々ニアハレフ志、タトヒ命ヲステ、孝ストモ報ツクサン事カタクコソ。

と、「母の恩」の尊さを語っている。証空が自分の命を捨てても師の恩に報じようとする考えは、明らかに、前掲の「正算母」話の末尾部分に示している、母の恩に対する観点と近似していて、それを踏まえたのである。但し、証空の場合では、母の生育の恩より、師の教育（＝仏法伝授）の恩がより重視される。そして、これによって生じた「孝道」と「仏道」との矛盾は、証空の、「母ノ後世菩提ニ廻向」するのは「マコトノ孝養」であるという主張を通して、仏教的な論理で解決された。最後、「仏の恩」については、不動明王が慈悲を賜り、証空の身替わりとなったのは、証空の師の命に替わる行為に対する、「仏」からの「ご褒美」とも言える。従って、第(1)話の「証空替師」話は三つのシーンで構成されていて、三種の恩が示しているが、話の眼目は明らかに、証空が命を捨てて師の恩に報じる点である。

(二) 第(2)話「后宮女房」話の「恩」

第(2)話「后宮女房」話は、評の

モロクノ事、メヅラシク耳近キヲ先トスル習ナレバ、何ワザニツケテモ、サシアタリテ、キハヤカナル恩ナド蒙フレルヲコソ悦ブメレ。カ様ニヲホゾラナル事ヲ忘ズ、心ニカクル事ハ、最有難カルベシ。誰々モ、思

シル人モ、年月積リユケバ、則ノ様ニヤハアル。サレバ、彼村上御門ノ御服ヲキテ、一期ツキニヌガテヤミケン事ナドヲバ、哀ニアリガタキタメシニコソハ云ヒ伝ヘ侍リヌレ。シカアルヲ、ハカナキ女ノ心ニサシモ

ツキ
尺セズ、思シメタリケン、情ノフカサ、猶タグヒナクゾ侍

が示す通り、女房が成年・出世した後、どのような時でも、幼時の自分を助けた僧正の恩徳を念々に心に刻むことに対して、高く評価する姿勢が見える。恩を知るといふ点は、明らかに第(1)話の「証空替師」話にも通じている。但し、これだけでは、この冒頭二話が一对であると言い切る程の緊密性が見えない。

(三) 第(3)話「蔵人所衆」話の「恩」

第(3)話「蔵人所衆」話について、題に「奉慕主上」と書かれてあるので、彼の出航は堀川院の人格的・能力的な素晴らしさに魅了されたためであるとされていることが多いが、男の堀川院に対する想いを細かく分析してみると、「恩」の存在が確認できる。彼は「御有様ヲカギリナク目出度思ヒシメ」ているが、「只、カ、ル御代ニ生レ合テ、御垣ノ内ニ明シ暮ス」ことで心を慰めていた。もし、この男が単純に堀川院の人的魅力に惚れ込んでいたのであれば、「カ、ル御代」ではなく、「カノ御代」または「カノ御門ノ御代」などと記すであろう。しかし、ここでは「カ、ル御代」である。「カ、ル御代」とは、説話冒頭部に既に紹介された、「天カ下オサマリテ、民安ク世ノドカ」で、「高キモ賤キモ悦」ぶ、堀川院の治世を指し、堀川院の人的魅力よりは、安穏な生活ができるその素晴らしい治世、即ち「主上の恩」に感激しているのである。従って、この一話も「恩を知る」説話として

扱えるのである。

さらに、第(3)話「蔵人所衆」話と第(1)・(2)話との関連性はこれだけではない。次に、末尾の評に注目したい。

万ノ事、志ニヨル事ナレバ、身ヲカヘテ、必ス参合テツカフマツリナンカシ。

大方、程ニツケツ、誠ノセニハ思ハズナル事オホカリシ。タ、シキ、ウトキニモヨラズ、顧ノアリナシニ

モヨラス。カクハシリツキタル物ノ命カハリ、年比フカク相タノミタル人ノ、ヒトヨリモ愚ナルタメシ多ク

キコユルハ、前ノ世ノ結縁ニヨルニコソ。一度ハ生カヘリテ見マホシキ事ナリ。

この評は二つの部分に分けられる。一句目は明らかに、蔵人所の男がその深い志によって、必ず転生し、堀川院のもとにまで到着するとの判断である。そして、二句目以降の部分では、著者は、「ハシリツキタル物」である蔵人所の衆の、次の生までつき従うこととは逆に、「年比フカク相タノミタル人」は他人よりも冷淡である事例も多いことに思いをめぐらし、この不可解なことは前世の因縁によるのだろうと解釈した。

ここでの「年比フカク相タノミタル人」との比較は、第(1)・(2)話にも見出せる。第(1)話の証空が智興内供の「相タノミタル弟子」になったのは身替わりの後のことであり、第(2)話の女房は、僧正は大童子に養育を命じたのみで、その後、僧正との直接の接点はなかった。どちらも「相タノミタル人」ではない。さらに、第(3)話の、西の海に出航した男も、蔵人所に勤めるが末端の使用人というだけで、院と日常直接接触するような身分ではない。

さらに、ここまでの三話の主人公達の身からも一つの共通点を見出すことができる。この三人はともに身分の低い人であったのである。確かに、証空は師の智興の命に替わろうとした時は、まだ弟子のなかの「末ノ人」

であつて、一乗寺僧正の恩徳を念じる女房も、もともと河原の捨て子であつた。

従つて、第(1)・(2)・(3)話はともに、直接親交のない、身分の低い人の「情フカサ」に関する説話であり、「恩を知る」話であると言える。

(四) 第(4)話「母子三人」話と第(5)話「西行女子」話の「恩」をめぐる

第(4)話「母子三人」話と次の第(5)話「西行女子」話において、話題が一転、再び親子の關係に戻つたようである。まず、第(4)話について、前話との関連性から考えれば、母子三人は、帝によつて罪が許され、命を拾つたので、「主君の恩」の存在が見える。但し、末尾部分の評の

カノ山陰中納言ノウヘニハ、タトヘモナカリケル母ノ心カナ

から見れば、この一話は、継母の、継子を実子より大切にすることを讃嘆する話と読み取るべきである。この継母の決断は継子に対する「恩」であり、帝の寛恕は「主君の恩」であるとも言えるが、「恩」という方向では説話は展開していない。

では、次の第(5)話の「西行女子」話はどうであろう。「西行女子」話は第(4)話と同じく、実母ではない人物(養母の冷泉殿)の登場があるが、この人物をめぐる部分が本説話のメインとは言えない。但し、西行の娘が隠れて出家に向かう時に、一度戻つて養母の顔をじつと見るといふ行動から、この娘が養母の養育の恩を完全に忘れられない、つまり、養育の恩を知るといふ側面は読み取れる。とはいえ、これはこの話の主題ではない。西行の娘が

実父の勧めを受け出家することこそがこの一話の主眼であって、主題の変化がより明白に見られる。

しかし、第(6)話の「侍従幼少」話になると、説話の主題がまた、同巻冒頭部に現れた「恩を知る」という点に戻っている。従って、慶安版巻六前半に収められている六話は、おおまかに「恩」をめぐる一群と見られるが、第(1)・(2)・(3)・(6)話は、すべて、恩を知る人とその行為に対して讃嘆する姿勢が見え、「恩を知る」という共通主題が浮上する一方、この四話の間に挟まれている第(4)話と第(5)話は、やや異色に見える。

この異色二話のなかで、第(5)話は、第(1)・(2)・(3)・(6)話とは主題が異なるが、「恩を知る」の要素をも持っているので、前述四話の間に位置するのが不自然だと言えても、それらの前あるいは後—前の巻五巻末部にある親子関連説話を考えれば、むしろ前—にあるのがより相応しいと感ぜられる。

これに対し、「恩を知る」要素が全く見えない第(4)話は、この一連の知恩説話の間に入っているのは極めて不自然で、この「恩を知る」グループとは直接に関連しないようである。むしろ、同じく実母でない人物が登場する第(5)話と同じく、巻五巻末部の親子関連説話とは何らかの関連性を持っているかもしれない。

さらに、この一話は後人による増補である可能性もあるようである。何故かという点、この一話の最後に、次の一文がある。

但シ、是ハ晋^(神)ノ三賢ト云フ物語ニ似タリ。モシ其事ニヤ。

ここの「三賢ト云フ物語」というのは、もともと『孝子伝』に収められた話であると推定できる。但し、話は「三賢」ではなく、「三義」と呼ばれるべきようである。

原話の最後には、王は「一門有三賢、一室有三義哉」と嘆いて、孔子の弟子のなかの冉求・冉耕・冉雍の三人が「一門三賢」と呼ばれる故実を譬えとして、この母子三人を一室の「三義」と褒めたのである。この話は、『発心集』より早い時代に成立した『今昔物語集』にも選ばれ、『注好選』や『内外因縁集』などにはほぼ同文の記述がある。『孝子伝』でも『注好選』でも、長明が生まれる前に既に日本で流通していた書物で、特に『孝子伝』は啓蒙に用いられている。序に天竺・震旦の話を書かないと主張した長明が、『孝子伝』の話を取り入れないのは当然のことであるが、貴族の教養を持つ長明がこの話を知らなかったはずはなく、「三賢」と間違う可能性もないだろう。

さらに、『発心集』から多くの説話を取り入れた書物のなかに、この話について、『発心集』と同系統の説話は、かなり遅い時代に成立した『三国伝記』の巻一第(30)話「母子三人賢人事」しかないようである。『私聚百因縁集』でも『沙石集』でも、『発心集』の話を取らず、『孝子伝』、あるいは『孝子伝』を出典とする『注好選』の方を選んだ。住信と無住が『発心集』の所収説話を取らず、他の書物のものを選んだのは、他の書物の方がより良いと考えた可能性もあるが、住信の『私聚百因縁集』においては、この「三賢」話の直前に、慶安版巻六第(2)・(3)・(6)話をほぼ同文で書写したばかりで、『発心集』の話を見捨てる、他書から話を取り入れる可能性はかなり低いである。

右の数箇所の不審点を考えて、慶安版巻六の第(4)話「母子三人」話はもともと、『発心集』に存在していなかった可能性が高いと考える。

(五) 卷六前半部分の説話配列について

ここまで、慶安版卷六の前半部分、第(1)話から第(6)話までの「恩」をめぐる諸話について分析してみた。結果として、「恩を知る」という共通主題が浮上し、第(4)話「母子三人」話は後人増補である、第(5)話「西行女子」話の主題は別にあり、位置の変更があると推測した。では、右二話を除いて、卷六の冒頭部の説話配列を改めて考えよう。

まず、第(1)話の「証空」話は明らかに、卷五卷末部の親子関係説話と卷六冒頭部の「恩を知る」説話グループとの接点であり、この「恩を知る」グループの先頭に立つ。

次に、第(2)・(3)・(6)話について、この三話は『私聚百因縁集』においても同じ順序で並んでいるので、住信が見た『発心集』での先後順は同様であることがわかる。この三話は、長明が編纂した時も連続していたか否かは別として、先後順は同じであったと考えられる。

第(1)話 「証空替命」 ……	師の身替わりになろうとする末弟子	(仏道伝授の恩)
第(2)話 「后宮半者」 ……	助命の恩を念々にする元捨子	(命を生かし、養育させる恩↓助命の恩)
第(3)話 「蔵人所衆」 ……	命をかけて院を追隨する使用人	(安穩な治世で、百姓の命を生かす恩↓助命の恩か)
第(6)話 「侍従幼少」 ……	死ぬとしても、助命の恩人を裏切らない幼児	(命を生かす恩↓助命の恩)

この四話は、ともに「恩を知る」人の話であり、互いに共通点を持っているが、「対」が見えず、配列は不明確

のようである。これは、未完成のためであろうか、長明没後から『私聚百因縁集』が成立するまでの間に、何かの変化が生じたか、今の段階ではまだ不明である。

三、第(7)話と第(13)話―「数寄」をめぐる―

卷六の第(7)話から第(13)話の七話中、第(7)・(8)・(9)・(10)話は明確に「数寄」を主題とする説話で、第(11)・(12)・(13)話は、第(12)話「郁芳門院侍長」話がよく「数寄」の面から論じられているほか、第(11)話にもある程度「数寄」との関連性が見出せる。

(一) 第(7)話「永秀法師」話と第(8)話「茂光時光」話の「数寄」

第(7)話の「永秀法師」話において、主人公の永秀は僧であるが、修行・道心などに関する記述は一切なく、一見、仏教説話としての性格を持っていないようであるが、末尾に、

カヤウナラン心ハ、何ニツケテカハ、深キ罪モ侍ラン

という評があり、話の主旨は、「数寄者」の「罪」の是非を問うことにあるとわかる。これは明らかに、第(6)話の「侍従幼少」話の末尾部分、

此君ハ、オサナクヨリ、カ、ル心ヲモチ給テ、君ニ仕マツリ、人ニマジハルニ付テモ、事ニフレツ、情フ
カク優ナル名ヲトメ給ヘルナリ。惣テ、イミジキスキ人ニテ、世ノ濁ニ心ヲソメズ、イモセノ間ニ愛執アサ

キ人ナリケレバ、後世モ罪アサクコソ見ヘケレ

という評に呼応している。前節に紹介したように、「侍従幼少」話は明確に「恩を知る」を説く説話であり、右の批評の「数寄人」に関する部分は、次の説話グループへの伏線であるとわかる。

そして、第(8)話「茂光時光」話は、第(7)話と同様の構造で、末尾の評の

是等ヲ思ヘバ、此世ノ事思STEM事モ、数寄ハコトニタヨリトナリヌベシ

は、第(7)話の評より一歩進んで、「数寄」はさらに世を捨てる便り、即ち仏道への便りともなるに違いないと主張する。

(二) 第(9)話「宝日上人」話の「数寄」

第(9)話「宝日上人詠和歌為行事」には、多数の小話柄と評が記されている。そのうち、①の宝日上人が毎日三時和歌を詠むことで行とする話を主話柄として挙げられていて、その評の

イトメヅラシキ行ナレド、人ノ心ノス、ムカタ様くナレバ、勤モ又一筋ナラズ。潤州ノ曇融聖ハ、橋ヲワ
タシテ浄土ノ業トシ、輔州ノ明康法師ハ、船ニ棹サシテ往生ヲトゲタリ。況ヤ、和歌ハ、能コトハリヲキハ
ムル道ナレバ、是ニヨセテ心ヲスマシ、世ノ常ナキヲ観ゼンワザドモ、便アリヌベシ

に示す通り、宝日上人の和歌修行に対し、橋を架ける、渡し守となるなどの様々の特異な修行での往生を示し、和歌を行とするのは珍しいけれど、不可能ではないと語り、さらに、むしろ「能コトハリヲキハムル道」である

和歌が、無常観察には利点があると主張する。さらに、その裏付けとして、小話柄②―源信の和歌観の変化の逸話―が来る。

これらに続けて、小話柄③と④は、それぞれ、蓮如と大貳資通の例が挙げられた。蓮如は、定子の臨終歌を思い出して哀れんで、その歌を詠んだり尊勝陀羅尼を唱えたりして、定子の「後世ヲトフラ」い、資通は仏堂で「数ヲトラセツ」、琵琶ノ曲ヲヒキテゾ極楽ニ廻向」したのである。和歌だけでなく、管絃のことをも加えて、⑤の評の

「数寄」ト云ハ、人ノ交リヲコノマズ、身ノシヅメルヲモ愁ヘズ、花ノサキチルヲ哀レミ、月ノ出入ヲ思ニ付テ、常ニ心ヲスマシテ、世ノ濁リニシマヌヲ事トスレバ、ヲノヅカラ生滅ノコトハリモ頭レ、名利ノ余執ツキヌベシ。コレ、出離解脱ノ門出ニ侍ベシ

に示す通り、「数寄」が往生へ導くと説いた。

しかし、最後の部分の小話柄⑥、蓮如が崇徳院の配所へ参上した話に至っては、単なる「数寄説話」として取上げるしかない。仏道との関連性は全く見えず、前の話柄等とは異色に見える。長明は、主題の表現に邪魔になるものを省く傾向を持っているので、長明自身がこの話を取り入れたとは考えにくい。『十訓抄』に同文箇所が見出せるこの話は、『十訓抄』が成立するまでに、誰かによって、蓮如の逸話として『発心集』に書き込まれた可能性が高い。

(三) 第(10)話「室泊遊女」話の「数寄」

第(10)話の「遊君結縁」話は、特に和歌を修行とする説話として前話と繋がってはいないが、和歌が、往生のための結縁の手段となるという話である。遊女は、最初に少将聖の船に接近しようとしたが、商売のためであろうかと疑われ、梶取に叱られた。その時、実は結縁を図ろうとする遊女は鼓を打って、

クラキヨリ闇キ道ニゾ入ヌベキ遙ニテラセ山ノ端ノ月

という歌を二三遍歌って、「カ、ル罪フカキ身ニナレルモ、サルベキ報ニ侍ベシ。此世ハ夢ニテヤミナムトス。必ズスクヒ給ヒナン、心計、縁ヲムスビ奉也」と、志を表明した。

右の和歌について、『無名抄』にも関連する文章がある。「式部赤染勝劣事」という一段において、和泉式部と赤染衛門の和歌について、長明が自分の意見を述べた時、『式部が秀歌はいづれぞ』と選ぶには、『遙かに照せ』と云ふ哥の勝るべきにこそ」と、右の歌を高く評価した。この歌は、『和泉式部集』の「雑」に収められていて、「はりまのひじりのおもとに、結縁のためにきこえし」という詞書があり、よく知られた名歌である。遊女が、自分の志を表わすには、和泉式部が播磨聖性空上人に結縁するため詠んだこの歌が最もふさわしいであろう。鼓を打ちながら和歌を詠ずるといふ、音楽と和歌と両方の力で、往生の結縁を図ったのである。

第(10)話においては、和歌・管絃などを行とする話ではないが、それらを介して往生へ導く点では、第(9)話に通じていて、この二話は一対であると考えられる。

さらに、ここまでの四話を全体的に見れば、第(7)話と第(8)話は、名利無視の「数寄」は「罪」ではなく、世を捨てる便りともなると主張し、第(9)話と第(10)話では、和歌や管絃などは、或は行とされ、或は往生への契機となり、「数寄」が往生に繋がる実例として並べられている。この四話は二話ずつ一対と考えられ、「数寄も往生へ導く」という共通主題が読み取られ、「二対四話一セット」構成様式を満足すると言える。

(四) 第(11)・(12)・(13)話と「数寄」

明確に「数寄」と「仏道」をめぐって展開する第(7)・(8)・(9)・(10)話とは異なり、慶安版卷六の第(11)・(12)・(13)話の主題は別にある。

まず、第(11)話「乞尼単衣」話では、冬の寒さに堪えないため蓑を被った乞尼が単衣をもらった後、それを清水寺に奉加し、

彼ノ岸ニ漕ハナレニシニナレハ ヲシテツクヘキウラモ、タラス
という歌を「イトウツクシキ手ニテ」書き遺して、姿を消した。

この歌は、「彼岸」である浄土に向かって俗世間から離れて行った「尼」である自分を、現実世界での「岸」から離れて行く「海人」に託する歌である。岸から離れた海人が着く「浦」を持っていないように、自分は単衣に付ける裏がないので、「単衣」をもらっても意味がないと、俗世物に執しない態度を示し、一筋に後世を望む意志を表明したのである。

この一話は、乞尼が和歌と書道の素養を持っている点で、ある程度「数寄」と関連付けられるが、話の主題は「数寄」ではなく、明らかに、右の和歌に示しているように、後世を望んで俗世を離れる乞尼が、俗世物（単衣）を持たないという「志」にあるのである。

前話との関連性について、和歌の出現と歌のなかの「漕ハナレ」という言葉が、前話の「室泊遊女」話を連想させる。そして、「室泊遊女」話のなかの「和歌結縁」のことを含めて考えれば、この乞尼が和歌を書き遺したのは、観音菩薩を本尊とする清水寺と結縁するためとも考えられる。

そして、第12話「郁芳門院侍」話については、その前半部分で武蔵野の美景に対して生き生きとした長い描写を与えていることと、元侍は美景で心を慰めるため、武蔵野に住むようになり、かつその美景を保護するために炊事をしないことから、この一話を数寄説話とし、元侍を「数寄者」とする研究が多い¹⁰。果たしてそうであろうか。まず、もし、この元侍が武蔵野に住むのは、美景に耽るためであるとすれば、その人物像は、巻一第(8)話のなかの、花を愛し過ぎたため、蝶となり畜生道に堕ちた佐国のことと重なるようになる。元侍が佐国とは同じタイプの人物であるとすれば、その評価も同様であるに違いない。しかし、この話では、元侍に対する態度は批判ではなく、

イカニ心スミケルゾ、ウラヤマシクナム

と讚嘆する姿勢を取っている。

西行がこの元侍と出会った契機は、彼の誦経の声であった。時は八月十数日の夜で、元侍は「カレ、声、ニテ法華

経ヲツゞリ読」んでいた。声がかれていて、さらに夜中までも声を止めずに読経し続けることから、元侍が一秒も無駄にせずに読経する姿が浮上し、彼の道心の深さが窺える。

また、この元侍が命を維持する便りとするのは、ただ、たまたま通り過ぎる人からの布施で、炊事もせず、外出して乞食などをするかもしれないようである。炊事をしないのは武蔵野の美景を保護するためから、外へ出ないのは美景に耽るためであるとも解釈できるようだが、花も草もない時は、外へ出てもよいであろう。しかし、この元侍は、「オボロケニテ、里ナドニ罷出事モ」なかった。「ヲノヅカラ人ノ哀レミヲ待テ侍レバ、四五日ムナシキ時」もある。美景の有無問わずこのような厳しい条件で生き続けてきたのは、やはり前述のように、読経に使える時間を無駄にしないためであろう。

では、この武蔵野の美景は元侍に対しては、「数寄」の対象あるいは「執」の対象ではなければ、一体、何であるのか。ここで、巻六の第(9)・(10)話を思い出す。和歌・管絃はよく「数寄」の対象とされるが、世を捨てる契機ともなり、往生の手段ともなる。重要なのはその行為自身ではなく、その行為を通しての心の認識である。宝日上人の三時の歌も、恵心僧都が景色に心が動かされて、自然に詠んだ「世の中を何をたとえん朝ぼらけこぎ行く舟の跡の白波」という歌も、室泊遊女が歌った和泉式部の「くらきより」歌も、すべては仏道の理解と結ばれている。「数寄」の「執」に至りやすい和歌・管絃でも往生の手段・契機と使われるように、この武蔵野の美景は元侍にとっては、煩惱を滅ぼす手段であると考えられる。確かに、元侍はこれを介して、「心ヲナグサメツ、愁シキ事侍ラス」、厳しい条件でも数十年間武蔵野で修行し続けてきた。加えて、この話の先頭に、西行の目を通して、武

蔵野の美景を描くのは、その心を慰める力を強調するためであろう。

次の第13話「上東門院女房」話は、「郁芳門院侍」話と同じく、院に仕えた人が出家・遁世して、厳しい条件に耐えて仏道修行を続ける話である。そして、評の

人ノ心、同ジカラネバ、其行モサマくナレド、女ノ身ニテ、カ、ル棲オモヒ立ケン、オホロケノ道心ニハ
アラザルベシ。今、此事ヲ思フニ、ケガラハシクアタナル身ヲ、山林ノ間ニヤドシ、命ヲ仏ニマカセ奉テ、
清浄不退ノ身ヲ得ン事ハ、ゲニ心カラニヨルベキ行也

によれば、男性より弱い立場に立つ女性の「道心」の深さをさらに讃嘆する姿勢が見える。

この二人の女房は宮中での男女の恋愛にうとましさを感じ、罪の恐ろしさを悟り、二十歳ぐらいの若さで約束して出家した。

二人が住むところを探しつつ、最後に落ち着いたのは、人のいない北丹波の深い谷であった。最初は「嵐ノ音モケハシク、ハカナキ鳥獣ノ気色マテモヲソロシクテ、堪へ忍フツヘキ心地モアラザリシカトモ」、二人は困難を乗り越えて、四十数年念仏しつづけた。そして、この二人の女房は、この住居が暴露された後姿を消した。新しい修行の地を探して、そこへ移ったのであろう。一旦人に発見されたからといって、四十数年も暮らしていた土地をも離れ切る二人の、人と交わらない「志」は尋常のものではない。

かつ、二人の女房が、これまで北丹波の谷で四十年以上も暮らしたことは、交替で里に出かけて食物を乞いながらも、自分の栖を人の目からきちんと守ってきたことを示す。これも余程の意志のなせるところであろう。そ

して、人に知られると姿を消して新しい意中の地へ移るのは、自分自身に相応しい修行の「場」を確保するためであると考えられる。この点から考えれば、第(12)話の元侍が武蔵野で炊事しないことも、この、心を慰め、愁いが生じない、修行に最適の「場」を守るためであったに違いない。

慶安版巻六所収十三話は、一見、第(1)話から第(6)話は「恩」、第(7)話以降は主に「数寄」と関連するようだが、詳しく考察すれば、少し異なる様相が浮上する。

まず、「恩」を主とする第(1)話から第(6)話について、第(4)話「母子三人」話は後人増補であると考えられ、第(5)話「西行女子」話はもともと別の位置であった可能性があると推測した。残る第(1)・(2)・(3)・(6)話は、同じく「恩を知る」を主題とするが、配列は不明瞭のようであり、「二対四話一セット」構成様式を満足しないようである。この部分は未完成か、長明没後に何かの変化があったか、まだ未解明である。

そして、主に「数寄」と関連するような第(7)話以降の部分について、第(7)話から第(10)話の四話は、「数寄」と「仏道」との関係を論じ、特に第(7)・(8)話は、和歌・管絃の道に深く心を寄せているが、俗世の名利財宝に対し全く興味がない「数寄者」を主人公とし、彼らの名利無視の態度から、「数寄」は世を捨てる契機となれるという考えを提示した。そして、次の第(9)・(10)話はこの考えを踏まえ、実に和歌・管絃などを行とする人、それらを手段として往生の結縁を図った人の例を挙げ、ふつう「執」と繋げられる「数寄」でも往生へ導く便りとなることを論じた。この四話は、明らかに二話ずつ一対となり、対と対とも対応し、「二対四話一セット」構成様式を満足している。

そして、巻末部に位置する第(11)・(12)・(13)話は、実は「志」をめぐる一連の説話で、厳しい条件の下でも一筋仏道を求める人々が描かれた。そのなかに、特に第(12)話と第(13)話との共通点が多く、関連性がより緊密であると考えられる。従って、慶安版巻六から疑問のある第(4)話と第(5)話を除いて、残る十一話は次のように、三つの主題に分けられる。

① 「恩を知る」 (第(1)話・第(2)話・第(3)話・第(6)話)

② 「数寄も往生へ導く」 (第(7)話・第(8)話・第(9)話・第(10)話)

③ 「仏道への極めて深い志」 (第(11)話・第(12)話・第(13)話)

そのうち、特にグループ②は完全に、グループ③は部分的に「二対四話一セット」構成様式を満足すると言える。これは、巻五の様相に相似している。慶安版の巻六は、巻五と同じく、後人の手が加えられている可能性があるものの、主には長明の手によって編纂されたものである、但し、巻一から巻四(第(9)話まで)に見られる厳密な説話配列は完成されておらず、部分的に「二対四話一セット」構成様式を満足するだけで、巻六も未完成のものであると推定できる。

註

(1) 神宮本巻二において、第(11)話「乞食尼単衣ヲ得テ同寺ニ奉加タル事」と第(13)話「上東門院ノ女房深山ニ住タル事」との間には、慶安版の巻六第(4)話に位置する「母子三人賢者死罪ヲ遁事」が挟まれている。この三話の前には、慶安版巻五第(3)・(4)話に当たる「手指成蛇」話と「亡妻帰来」話が置かれていて、すべては女性を主人公とするものであるが、説話の主題はそれぞれで

あり、特に「乞」「母」「上」三話の神宮本での配列は不自然である。

(2) 柴佳世乃「堀河院を追慕する人々―金沢文庫保管『堀川院御事』と『発心集』―」(『金沢文庫研究』36巻、二〇〇一年三月)

(3) 『私聚百因縁集』の同文話では、堀川院が亡くなった後の行方について、「大龍」ではなく、「大日」となったと記されている。この「大日」は「太陽」であると考えにくく、「大日如来」の略であろう。堀川院が実は大日如来であり、亡くなった後もこの姿に戻ったと考えられるようであるが、「西方」と言えば、阿弥陀如来の極楽浄土を言うのが普通で、大日如来の「密厳国土」(「密厳浄土」ともいう)も西方に所在するという記述はまだ見当たらない。また、評のなかの「カクハシリツキタル物ノ命かハリ」の解釈もわかりにくくなるので、『発心集』の「大龍」を取るべきようである。

(4) 『孝子伝』本文の引用は、『孝子伝注解』(汲古書院、二〇〇三年二月)所収の陽明本・船橋本影印版による。

(5) 『孝子伝』の船橋本の冒頭は「曾、有、義士兄弟二人」、陽明本は「魯、国、義士兄弟二人」となる。『注好選』の同話は、「義士遇赦」との題が付けられ、船橋本に従い「曾有」と記されている。『今昔物語集』は、陽明本に近い、「震旦の魯洲」となっている。(6) 『私聚百因縁集』の同話は「母子三賢」と名付けられたが、本文の先頭には「義士遇赦」と記されていて、『注好選』からの引用であることがわかる。『沙石集』は、陽明本『孝子伝』に近いと考えられる。

(7) 慶安版巻一第(8)話の幸仙の話など。

(8) 『無名抄』の本文引用は、日本古典文学大系65『歌論集 能楽論集』(岩波書店、一九六一年一月)による。

(9) 『和泉式部集』の本文引用は、『校定本 和泉式部集(正・続)』(笠間叢書160)(笠間書店、一九八一年五月)による。

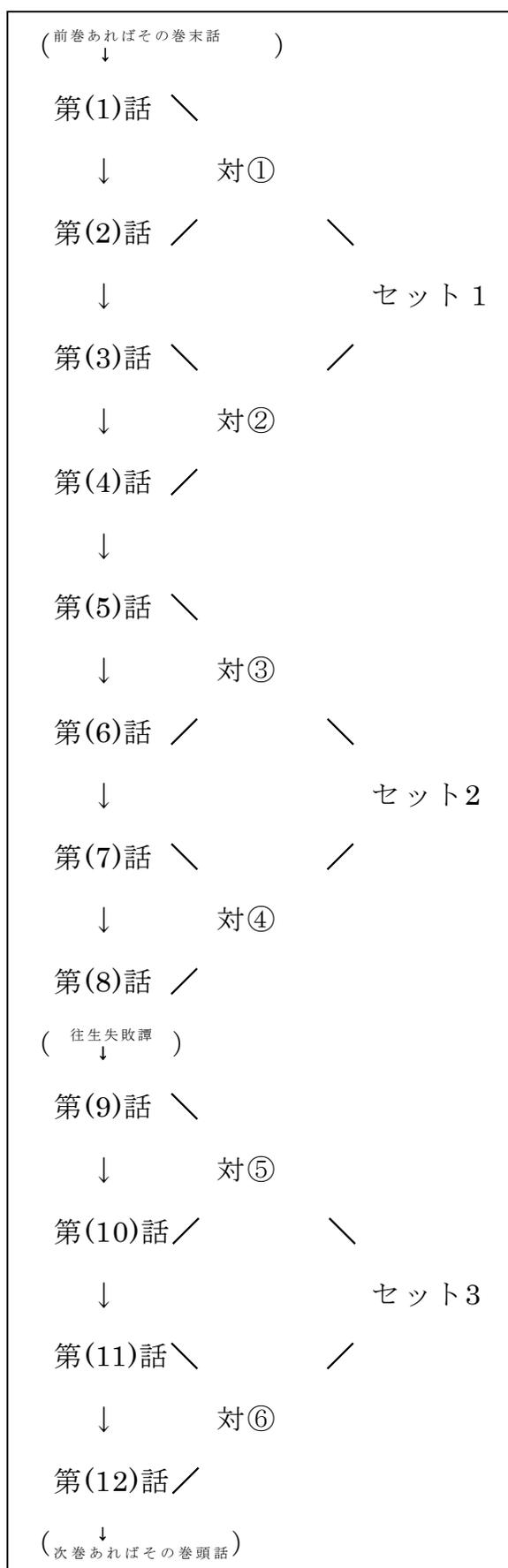
- (10) 今村みゑ子「武蔵野の花―『癡心集』における抒情的一面―」(『中世文学』37号、一九九二年六月)、岡田恵子「鴨長明法名蓮胤の「すき」と仏道」(『大正大学大学院研究論集』第十六号、一九九二年三月)、金賢姫「蓮胤における数寄と信仰」(『立正大学大学院 日本語・日本文学研究』創刊号、一九九七年三月)など。

終章

以上の各章で、慶安版『発心集』の巻一から巻六のそれぞれの巻の説話配列について、神宮本の説話順や本文をも視野に入れながら、考察を行ってきた。その結果、次の諸点が指摘できたことになる。

- 一、鴨長明の巻構成法の推定
- 一、慶安版『発心集』における原形態保持状況の推定
- 一、鴨長明撰『発心集』本来の様態の推定

まず、鴨長明が『発心集』を撰する時考案した巻構成法について、図示すると次のようになる。



一卷に収められている十二話は、隣接説話と関連性を持っていて、さらに、その関連性の緊密度の差により、二話が一对、二対が一セットと考えられ、「二対四話一セット」構成様式と命名した。この「二対四話一セット」構成様式に基づき、セット主題間にも緩やかな関連性を持つ三セットで一つの巻に統合する。且つ、各巻の第(8)話に必ず往生失敗談を配し、先の巻の巻末部で次巻への伏線を敷く。

慶安版では、この構成法は、共通説話のみで構成し、均等に十二話を有する巻一から巻三までにとどまらず、僅か十話しかなく、同時にその内に慶安版独自説話三話を含む巻四においても、右の編纂方針が貫かれていることが指摘できた。この巻構成の様相は単なる偶然とは考えにくく、長明が採用した構成法そのものであると考ええる。さらに、長明以前の説話集類においては、類似説話を二話ないし数話連続させ並べるものが多いが、これほど厳密な巻構成法を採ったものはなく、「二対四話一セット」構成様式で解釈できるものもないようである。この構成法は、長明の独自の考案であるとも言ってもよいと思われる。

次に、慶安版『発心集』における原形態保持状況について、慶安版の巻一から巻四の第(9)話までの説話順は、長明の元来の編纂のままであると言える。そのうち、巻四の第(10)話は実質の第(10)話ではなく、第(11)話の位置に配され、神宮本独自説話の「侍従大納言ノ家ニ山王不浄ノ咎メノ事」とは一对であるはずだと推定した。但し、第(9)話と一对になるべき一話はまだ見当たらない。巻四の第3セットの不備について、当時未完成であったか、後の時代において何らの原因によって不備が生じたか、今の段階ではまだ結論できない。そして、慶安版巻五・六においては、後人増補と見られる二話

慶五(2) 「伊家ガ妾頓死往生事」

慶六(4) 「母子三人賢者遁死罪事」

と、説話順の移動があると見られる三話

慶五(7) 「少納言統理遁世事」

慶五(8) 「中納言顕基出家籠居事」

慶六(5) 「西行女子出家事」

があるという問題が含まれているが、これらの説話を除く部分の説話順は、長明の原編纂の形である可能性が高い。

長明撰『発心集』の本来の様態について、慶安版の配列の問題点に目線を配り、神宮本の本文をも含めて考察して得た推論をまとめると、表1と表2のようになる。

慶安版巻一から巻六を中心に考察した結果をまとめるうえで、考察によって追究できた『発心集』巻一から巻六の構成状態を顧みて、特に、巻一から巻六までの主題移転について解釈してみた。

貴僧の再遁世に注目し、「俗世からの出離」をめぐる展開する巻一は、長明の遁世者身分には最も相応しい冒頭であると考えられる。そして、巻二の「末世の不思議」、巻三の「往生の諸行・諸因」、巻四の「厭離穢土」、巻五の「欣求浄土」の形で、仏教者の普遍的な関心を示す各巻に次いで来るのは、長明の個人的な関心を寄せる部分であると考えられる。

※表1 (巻一) 巻四

〈巻二〉

慶一 (12) 慶一 (11) 慶一 (10) 慶一 (9) 慶一 (8) 慶一 (7) 慶一 (6) 慶一 (5) 慶一 (4) 慶一 (3) 慶一 (2) 慶一 (1)

偽りの妻帯	狂いで隠徳・肉食	断執	名・利を捨てる(散執)	山林隠遁	知られていない地へ隠遁
-------	----------	----	-------------	------	-------------

偽徳隠	断執散	貴僧の再遁世
-----	-----	--------

慶二 (13) 慶二 (12) 慶二 (11) 慶二 (10) 慶二 (9) 慶二 (8) 慶二 (7) 慶二 (6) 慶二 (5) 慶二 (4) 慶二 (3) 慶二 (2) 慶二 (1)

念仏を怠らざら積む	特別な念仏往生	往生への縁・良縁・悪縁	護法不思議	道心堅固	善知識を求め臨終正念で往生
-----------	---------	-------------	-------	------	---------------

念仏不思議	不仏思議	で貴族の堅固な往生道
-------	------	------------

〈巻二〉

〈巻三〉

慶三 (12) 慶三 (11) 慶三 (10) 慶三 (9) 慶三 (8) 慶三 (7) 慶三 (6) 慶三 (5) 慶三 (4) 慶三 (3) 慶三 (2) 慶三 (1)

自供から誦経する(昇仙)	老人の忠告に覚めな	捨身行	入水	悪人発心 往生の勇猛心	身正規の修行で往生積行
--------------	-----------	-----	----	-------------	-------------

自供から無智の者に入ら	捨身を選んだ人々	卑劣な人々の正行
-------------	----------	----------

〔俗世からの出離〕

※出世の名聞のための遁世すべからず

〔念仏往生・末世の不思議〕

〔往生の諸因諸相〕

〈巻四〉

神四 (3) 慶四 (10) ? 慶四 (9) 慶四 (8) 慶四 (7) 慶四 (6) 慶四 (5) 慶四 (4) 慶四 (3) 慶四 (2) 慶四 (1)

濁世を忌む	物忌は濁世を忌む	妻子財産を失つたことを厭う	臨終の善知識の役割	往生の魔障を遠ざける	穢れの浄化	法華経の浄世界の
-------	----------	---------------	-----------	------------	-------	----------

遠く離すべし	往生の魔障の対治	天法浄土の浄化
--------	----------	---------



表2 (巻五・巻六)

〈巻五〉

慶五 (15)	慶五 (14)	慶五 (13)	慶五 (12)	慶五 (11)	慶五 (10)	◆ 慶五 (9)	◆ 慶五 (8)	◆ 慶五 (7)	◇ 神三 (7)	◆ 慶五 (6)	慶五 (5)	慶五 (4)	慶五 (3)	◆ 慶五 (2)	慶五 (1)
母を養子のう 僧、知りぬる 死をぬる との心・母	現世をよ 望む 極楽を	帝・関 白	昇進 より	貴族出 家 恩捨て られず	現世祈 願 成就の 理由	菩薩願 ふ 願う	誓願不 思議 願う	× *愛執と 發心 關連							
母と子のあ る子とあ	極楽を 願う				に仏菩薩 を救済 し願う										
恩					淨欣 土求										

〈巻六〉

慶六 (13)	慶六 (12)	?	慶六 (11)	慶六 (10)	◆ 慶六 (9)	◆ 慶六 (8)	◆ 慶六 (7)	◆ 慶六 (6)	◆ 慶六 (5)	慶六 (4)	◆ 慶六 (3)	◆ 慶六 (2)	慶六 (1)
十世継 統	嚴した 人、通		をけ 表す 志	和歌・ 管生	名に執 利に執 に執	父の親 心	△ 養母の 恩	× 繼母の 心	主君の 恩	を助 命の 恩	母の 後身 代		
	深 い 通 志			導 往 生 へ				を 幼 低 身 分 の 人					
			關 數 寄								關 恩 連		

そして、慶安版卷五卷末部の親子の絆と卷六前半の親の恩・師の恩・助命の恩に関する部分は一つの塊りで、最後の「数寄」グループと「志」グループとは一連になると考える。

「親の恩」に関しては、『方丈記』において、「山鳥のほろと鳴くを聞きても、父か母かと疑ひ」と、行基の歌に共感する「みなしご」長明、後鳥羽院の知遇の恩を念じる長明、師の俊恵の言論を『無名抄』に多く記した長明が、親の「産みの恩」・帝の「治世の恩」に・師の「教育の恩」に関心を寄せるのは、不自然ではない。また、「数寄」の問題については、歌人であり琵琶もよくした長明が、出家後も方丈に和歌・管絃の抄物を置いていたことから、「数寄」に関心を寄せるのは当然のことと考えられる。親・帝・師に対する想いと、和歌・管絃に対する「数寄」は、長明が往生への道に向かう時に当面する大きな問題、つまり障礙となる可能性のある二種の存在であると想定できる。

では、この二つの障礙について、どうすれば解決できるのか。

「証空替命」話において、功德を親の後世に廻向するという仏教者なりの答えが提示された。そして、いわゆる数寄説話四話から、和歌・管絃は、心を澄ませる力、観察の能力を高める力を持っている存在であり、執しなければ、往生の便りともなるという結論がまとめられた。方丈での生活状態を考えれば、長明は、和歌・管絃の抄物を『往生要集』と同じ籠に置いたのである。このことから、長明の和歌・管絃に対する態度、仏法と一緒にあるという姿勢が読めるのであろう。

また、数寄関連説話グループに続く最終三話の極く深い道心を持っている主人公たちは、各々元貴族女性・郁

芳門院に仕えた元侍・上東門院に仕えた元女房であり、和歌の教養を持つているに違いないが、「数寄者」とは言えない。長明の経歴とも重なるこれらの人の身の上からこそ、長明が探求する、自分に相応しい仏教者としての在り方が顕れているのであろう。

さらに、上東門院に仕えた元女房の、露見すると姿を隠す行動は、明らかに、『発心集』冒頭部の玄賓・平等の人物像と重なっていて、この一話と、もし一対になる話があれば、それも一緒に『発心集』の結びの部分に配し、冒頭部に呼応させる構想が想像できそうである。

従って、『発心集』は完全に完成はしていないが、「遁世」という、隠者長明の関心から始まり、仏道に関する様々な証しと諫めの例を語った後、長明自身に最も関係深い問題をめぐって議論・解決し、最後に再び遁世者のあるべき姿に戻った、という構成が読みとれる。

『発心集』というのは、長明が序に記した

我一念ノ発心ヲ樂ハカリニヤ

の通り、「遁世者」である長明、「数寄者」であつた長明の、仏道への「発心」を保ち固めるための著書であると言える。

本論文では、取り上げることのできなかつた問題もまだ様々残っている。特に、次の

慶安版卷五・六に見られる説話順移動事情

慶安版卷六卷末部の跋文風文章の後人増補疑惑

神宮本独自説話の位置

との三点については、最終的に、長明の思想を解明する大きな糸口になると思われ、今後の課題にしたい。